
the keys

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t h e k e y s

【Nコード】

N 7 4 7 1 E

【作者名】

羽村奈留

【あらすじ】

ローラン国とサザーランド国との戦争は、終結したと思われている。だが約1年が経ち、再びサザーランド国が戦争の準備を始めているとローラン国に知らせが届く。ローラン国王は、戦争の原因となっている秘宝を守るといふ鍵を国外へ出そうと考えるのだが……。秘宝とは何か？鍵とは何か？剣と魔法の冒険ファンタジー「the keys」をどうぞお楽しみ下さいませ。

第1話：オーカス

焼け跡は、黒く広大な土地となつて一面に広がっていた。

「これは一体どういうことだ……」

黒い土地を見ているしかないオーカスの口から、信じられない思いが呟きとなつて出る。

そこにあるはずの貴族の屋敷は無く、黒い焼け跡が、家主の身に尋常でない出来事が起こつたと、オーカスに無言の言葉を投げかける。

そこへ、地竜の背に荷物を載せて連れて歩く老婆が通りかかり、オーカスに声を掛けた。

「あんた。このコトツク様のお知り合いの人かね？」

「ええ、そうですか」

オーカスと老婆を比べると、オーカスは曾孫くらいの若さがある。老婆は興味津々にオーカスを見ながら言う。

「一週間くらい前だったよ。夜遅く、いきなり燃え出して。そりゃあよく燃えて、見ての通り何も残っちゃいない。屋敷に住んでいた人の死体すらもね」

老婆は、オーカスの腰に挿さっている細身の剣や剣士専用の革のブーツを見ながら話を続ける。

「火を使う魔法使いに襲われたつて噂だよ。跡形も無く全てを燃やし尽くせるのは火の魔法しかないからね。何も残らないほど燃やされてしまうなんて、どんな恨みを買ってしまったんだろうねえ。人の善い貴族様に見えたんだがねえ。戦争が終わって1年が経ち、これからだつていうのに。くわばら、くわばら」

老婆が立ち去ったあとも、オーカスは静かに焼け跡を見つめていた。

黒い焼け跡は屋敷の区画内だけで、周りにある家屋どころか、区画の外は全く焼けてはいない。区画の外すぐの所に落ちている石も、

生えている雑草も、火事の熱を浴びて変色した形跡も無い。区画の端にある角も仕切られていたかのように90度の角となって黒い焼け跡があるのである。

その普通では考えられない物理的な現象を無視した焼け方は、魔法使いだからこそ成せる技で、他に延焼を及ぼさない火の魔法の技術は、かなりの上級魔法である事を意味していた。

オーカスと思う。自分と同等の、もしくは自分より上級クラスの火の魔法使いが、ここに住んでいた貴族コトツク卿を襲い、屋敷諸共焼いてしまったのだろう。と。

上級クラスの火の魔法使いが残した黒い焼け跡を見て、オーカスは自分の内なる所に生じた火の魔法使いに対しての畏怖を感じて、無意識に自分の腰にある剣についている魔法器を掴んでしまう。

そよぎ始めた静かな風は、上級魔法を目にして畏怖の念を抱くオーカスを介抱するように、オーカスのウェーブがかかった茶色の髪を撫でていく。

しばらくして、またオーカスが立っている道に人が通りかかる。

オーカスは、地面の砂利を踏み鳴らす足音に気付いて我に返り、黒い焼け跡から視線を上げた。

近くの木から小鳥が飛び立ち、空に舞った小鳥は平和そうな声で鳴いて、オーカスの視界の端を横切って行く。

「鍵の手がかりは、ここで途絶えてしまった。という事か」

オーカスは、ズボンのポケットから紐を取り出して、髪を後ろに束ねると紐で一括りにして結んだ。

「さて、どうしたものか」

黒き焼け跡の言葉無き訴えを聞いても、今のオーカスは何も答えられないし、どうする事もできない。成す術が無い今の現状に開き直りともとれる笑みを見せると、オーカスは焼け跡を背にして歩き出した。

第2話：ローラン国1

この世界のどこかに秘宝があるという。しかし、秘宝を見た者は誰もいない。なぜ秘宝が存在するのか、秘宝がなんなのかも、誰も知らない。世界存続の危機を救うものとして伝承が残っているだけである。

秘宝の話が出るのは酒の場が多い。多種多様の人々が必ず知っている共通の知識。その秘宝の話題を切り出せば、場が盛り上がり話が尽きる事がないからだ。

ある者は秘宝を究極の魔法だと言い、ある者は究極の武器だと言い、ある者は秘宝ではなく神が眠っていると言う。

ローラン国の王も、秘宝がなんなのかを知らない。国王は、その見た事もない秘宝について悩んでいた。頭を抱えている姿が悩みの大きさを物語っている。

「サザーランド国は、なぜ鍵を奪おうとするのか」

ここでの鍵とは、どこかに隠された秘宝の封印を解くために、神々が民に託した鍵の事をいう。

現在、ローラン国にある鍵は二つ。

議事室には、ローラン国王のほかに長老や執政官などが肩を並べて座っている。疲労のある表情を見ると長い時間話し合っていたようだ。

長老は疲れ切った表情で言う。

「鍵の奪い合いで国家間で争っても、秘宝の場所も分からず、秘宝がなんなのかも分からなければ、戦う意味が無いものを」

執政官は緊張した表情で手元にある資料を見ながら言う。

「1年前の戦いで、我が国の損害は、国家予算の4分の1に及びます。また戦うとなると更に4分の1以上の予算が流出する事になり、戦争で目減りした民と荒れた土地から税を回収するのは難しく、もしまた戦争となれば財政破綻を招く事になります。王様、これ以上

の戦いは絶対に避けなければなりません」

「判つておる。それに奪い合いではない。サザーランド国が我が国の鍵を狙つておるのだ」

ローラン国王は、言つてから椅子に座り直し、背もたれに深くもたれてからまた言う。

「暫く考えさせてくれ」

ローラン国王は、悩みに悩んで、ついに王冠を頭から外して円卓の上に置いた。王冠の跡が残っている頭髪を、搔いてから撫ぜる。それを見て長老が口を開く。

「王様」

「長老、分かつておるから、そう言わんでくれ」

ローラン国王は、もう小言は聞きたくないという思いを吐き出しながら長老に言う。

「ローラン国の王として、なんとかせねばならないのは分かつておるが、我が国にある鍵を求めて戦いを仕掛けてくるのは、サザーランドのほうなんだぞ」

第3話：ローラン国2

長老は、頭を抱えるローラン国王をもう一度呼ぶ。

「王様」

「だから分かっておると申したではないか」

「いえ、王様。考えが一つ浮かんだのです」

長老の進言でローラン国王の悩みは一時停止する。

「考えとはなんだ？」

背が曲がり小柄に見える長老は白髪交じりの口ひげを揺らしながら言った。

「名案か分かりませんが、国家間の争いの元となる鍵を、国外に出してはいかがでしょうか。戦いの場が国外になれば、今後の国の損害をかなり減らせると思いますが」

「なるほど」

ローラン国王は感心してから、頭に浮かんだ疑問を長老に言う。

「鍵を国外に出すのはよいが、誰が鍵を守護するのだ？」

「もちろん鍵の継承者です。ちょうど我が国の鍵の継承者は二人共軍人。一人はマジックナイトの称号を持ち、もう一人はアルランドの英雄。その二人を国外に出しても、そう易々と鍵を奪われやせんでしょう」

ローラン国王は椅子の肘掛けに手を置いて指を動かしながら考える。

「だが、ただ国外に出すだけでは鍵の継承一族が承諾せんだろう」

そう言われて長老は言葉を詰まらせた。まだ先の事は考えていなかったようだ。長老が継承者を国外に出す理由を考えていると、長老の半分の若さである執政官が口を開いた。

「継承者に秘宝を探させてはいかがですか？」

ローラン国王は執政官を指さす。

「おお、それだ。その考えでいこう」

王の喜びに長老が釘を刺すように言う。

「王よ。秘宝の所持はなりませぬぞ」

急に活気付いたローラン国王はオーバーアクションで長老に言う。
「所持はせぬ。秘宝の位置の把握をしておくだけだ。神々との古のいにしえ契約を破るつもりはない」

「それならよいのですが」

言い切った王を見て、長老はとりあえず一息ついた。

だが、執政官の仕事はまだ続く。

「では、鍵の継承者の一人であるシーライト將軍を呼びまして、秘宝探しの命を与える事に致しましょう」

ローラン国王は王冠を頭につけ、円卓に手をついて立ち上がった。
「それは、余が直々に申し伝える。久し振りにシーライト將軍と話もしたいしな。シーライト將軍を謁見の間に呼び出せ」

執政官は王に頭を下げる。

「畏まりました。では、もう一人の鍵の継承者には、後日特命をもつて伝えることに致します」

「うむ、そうしてくれ」

後ろで控えていた側近にマントを掛けられたローラン国王は、颯爽とした足取りで議事室をあとにした。

第4話：シーライト將軍1

ここは、吟遊詩人が神々が降臨した大地だと歌う世界、ユーフォリア。

剣と盾を持った人々が暮らす世界だが、文明はそう低くない。

空間と大地にある粒子と光の粒子を融合させて高エネルギーを作り出すエネルギー発生装置が有り、大型のものは飛空艇、小型のものは照明や調理器具など日々の生活に利用されている。

中でも、更に小型のエネルギー発生装置を所持し扱える技能者を魔法使いと呼び、それから発せられる高エネルギーを魔法と呼んだ。先ほど話に出たシーライト將軍もその魔法使いの一人で、剣の腕も立つ彼は、優れた武勇の功績をいくつもあげ、ローラン国王よりマジックナイトの称号を得ていた。

シーライト將軍は、謁見の間に入ると早速王の前で片膝をついて頭を垂れた。肩にあった緩いウェーブのある獅子色の髪も顔を隠して垂れ下がる。一呼吸の静寂のあと、シーライト將軍の力強い声が謁見の間に響き渡った。

「ローラン国王の直々のお呼びだて、恐悦至極に存じ上げます。王のご機嫌麗しく……」

ローラン国王はシーライト將軍の挨拶を遮る。

「挨拶はよい。余は早くそちと話がしたい。別室に酒を用意した。そちも共に来るがよい」

「はっ」

ローラン国王は玉座から立ち上がり手招きをしてシーライト將軍を会席の間に招いた。

シーライト將軍は立ち上がって歩く。年齢は二十歳前後。マントを羽織り、銀の胸当てをつけただけの軽装備で、歩く姿は軽やかで優美。

ローラン国王は会席の間に入ったシーライト將軍を椅子に座らせ

た。

テーブルには様々な食事が並び、ローラン国王の贅沢な生活ぶりがうかがえる。

ローラン国王は対面して座らず、シーライト將軍の傍らに腰を下ろした。

「とりあえず、久し振りに会えたシーライト將軍との再会を祝おうではないか」

60歳を過ぎた国王は、目尻にシワを寄せてシーライト將軍との再会を心の底から喜んでゐる。

シーライト將軍は笑顔を見せつつも恐縮した態度を見せた。

「このようなわたくしに、王自ら再会の祝い事など、恐れ多い事でございます」

側近は、笑顔を合わせるローラン国王とシーライト將軍のグラスに酒を注ぐ。

ローラン国王は、シーライト將軍と乾杯をしたあとに、側近に会席の間を出て行くように命じた。

側近は会釈をして出て行く。

第5話：シーライト將軍2

側近が全員出て行ったのを確認してからローラン国王はシーライト將軍に話しかけた。

「サザーランド国内が騒がしくなってきた。もしかすると、また戦いが始まるかもしれん。そうなれば、シーライト將軍にも、いろいろと頼む事になると思うが。戦いを回避できぬ余の考えは浅いだろうか？」

伺い口調でシーライト將軍を横目で見るローラン国王に、シーライト將軍は二重の瞳を向けて言う。

「いいえ。サザーランド国の目的は、わが国にある2つの鍵を手中に収める事。神々と交わした契約上、本来、一国の王が鍵を求めるのは、ユーフォリア存続の危機のみ。しかも、鍵の継承一族の合意が必要です。神々と交わした契約を守る上でも、我々は、無為に鍵を狙うサザーランド国王から、我が国の鍵を守らねばなりません」

酒で頬をピンクに染めるシーライト將軍はまだ若い。將軍として国を守るうとするのは当然の事だが、若くて優美な將軍が国を守るために返り血を浴びながら戦う姿を想像し、ローラン国王は戦いを回避できない無能な自分に情けなさを感じて表情を暗くさせてしまふ。

「もし戦争が始まれば、その時もやはり、そちは戦場の最前線に赴くのか？」

「はい。もちろんでございます。敵の飛空艇を落とすのに、兵士の魔力は弱過ぎるので、どうしてもわたくしが持っている鍵の魔力が必要になると思います。それに、わたくしも鍵の継承者として義務を果たすために、賢者シーライトが暮らしたこの地を、ローラン城があるこのシーライト地方を守らなければなりませんので」

挫折経験の無いシーライト將軍の自信に満ちた声を聞き、ローラン国王は肉に手を伸ばしながら苦笑する。

「余は、そちを幼い頃より見てきた。そのそちを最前線にやりたくはないのだが、鍵の継承者としての義務があるのでは、それも無理か」

ローラン国王は回想する。次期鍵の継承者としてローラン国王に謁見をするために、軍人である父に手を引かれてローラン城に初めて登城した幼い頃のシーライトを。

「鍵は今も所持をしておるのか？」

「はい。ここに」

シーライト將軍はアクアマリン色の瞳でローラン国王を見据えて胸に手を当てる。

ローラン国王は肉の入った頬を膨らませながらシーライト將軍の胸元を見た。

シーライト將軍は、酒で濡れて艶を帯びた薄めの唇を動かして微笑む。

「また鍵をご覧になりたいのですか？」

「うむ。見せてくれ。古の神々が創りたもつたという秘宝を守る鍵を」

シーライト將軍は、軽装備の下から見えているタートルネックに手を入れて鍵を取り出した。

第6話：シーライト將軍3

鍵は、大豆ほどの小さな金属の板。表面はオパールのように乳白色で虹色の光沢があり、鎖に繋がれている。どうやらペンダントのようだ。

シーライト將軍は、鍵をローラン国王に差し出す。

「どうぞ」

だが、ローラン国王は身を引いて断った。

「いや、見るだけでいい。もし触れて、所持をしたと神々に思われでもしたら、余はどんな目にあうか分からぬからな」

「ならば、鍵はここに置きましょう」

シーライト將軍は鍵を王の目の前に置いた。

ローラン国王は食事をしながら鍵をまじまじと見る。

「いつ見ても、こんな小さなものから軍の巨大飛空艇を打ち落とすほどの魔法が発動するとは信じられぬ。これも神々の成し得る技という事か」

「そうですね。ここまで小さい魔法器を創造された神々は、本当に恐れ多い存在だと思います」

シーライト將軍は器にあったスープを口に含んだ。品良く動く手は育ちの善さをうかがわせる。

ローラン国王はシーライト將軍の端正な顔立ちを横目で眺めた。

「そちを呼んだ本当の理由は、その鍵の事なのだ。サザーランド国王は、我が国の鍵をまだ諦めておらん。今もなお強大な魔力を持つ鍵を欲しがっている。もし、サザーランド国に鍵が渡れば我が国はどうなることか。考えただけでも恐ろしい」

「ですが、古の神々^{いにしえ}と交わした契約は絶対です。鍵の魔力は神々に定められた血族の、それもごく一部の者にしか扱えません。王のご心配には及ばないかと存じ上げますが」

ローラン国王の表情が陰しくなる。

「もし、ローラン国で暮らす鍵の継承一族が、サザーランド国に買収されていたらどうする？ シーライト家の何人かが買収されてサザーランド国に入国したという情報も入ってきておるのだ」

シーライト將軍の顔色が変わる。

「それは本当ですか？ 我が血族に裏切り者がいるとは信じられませんが」

「余も信じたくない。できる事なら」

ローラン國王の食事をする手が止まった。

「サザーランド国は鍵を狙い、また戦争を仕掛けてくるだろう。できる事なら、何も生まない国家間の争いは避けたい。それで緊急議事を開き、皆で知恵を出し合った」

議事の結果をシーライト將軍に告げる前に、ローラン國王は水を口に含んだ。数回喉を鳴らしてグラスの水をゆっくりと飲み干す。空になったグラスをテーブルに置いてシーライト將軍の顔を見た。

第7話：シーライト將軍4

「シーライト將軍。もう一人の鍵の継承者と合流をし、秘宝を探しに行ってもらいたい」

「秘宝を探す！？ 恐れながらローラン国王。「王が秘宝の所持をするのは世界存続の危機のみ」と、神々と交わした契約があります。その契約を破るおつもりですか？」

「破るつもりはない。もしサザーランド国がローラン国にある鍵を手に入れば、次に狙うのは秘宝。サザーランド国より先に秘宝の場所を把握しておけば、もしもの時に次の手が打ち易いのだ。それに鍵を持った継承者が移動しておれば、鍵の場所が分かりにくくなり奪われる心配が減り、ローラン国内での戦争も避ける事ができる。全ては我が国と秘宝を守るためなのだ。シーライト將軍、秘宝探しに行ってくれるな？」

「そついう事ですか」

シーライト將軍は視線を落とした。テーブルにある鍵を握る。

「承知致しました。秘宝探しの命、謹んで承りましょう」

シーライト將軍はローラン国王に頭を垂れた。

ローラン国王はホツとした表情でシーライト將軍を見る。

「もう一人の鍵の継承者の事だが」

シーライト將軍はペンダントになっている鍵を首につけながら言う。

「それは存じております」

獅子色の髪を揺らして身なりを整えながらローラン国王を見つめる。その眼差しは純粹無垢。中性的で品のある顔立ちは、数々の戦いで返り血を浴びてきた軍人とは思えないほど清楚な美しさがある。軍人にしておくには惜しい獅子色の髪をまとう高貴な顔立ちで、ローラン国王の心を虜にしながらシーライト將軍は続けて言った。

「もう一人の鍵の継承者は、賢者コトツクの血を引くコトツク家の

長女。鍵については国の極秘事項ですが、その息子ラーグ・フルフオンド・コトツクは、ローラン国の南東に位置するコトツク地方を統べるコトツク家の跡継ぎにして、我がローラン国の軍人。1年前の戦争では、激戦を極めたコトツク地方の東の地アルランドで戦い、サザーランド軍を撤退にまで追い込んだつわもの。帰還後、王より英雄の称号を与えられ、我ら軍人で英雄と称される彼を知らぬ者はおられません。ですが、現在の彼は軍におりません。1年前の戦争後、知事である父の役職を継ぐために、退役しておりますので、とりあえず今回の件の知らせと迎えのために、先にわたくしの部下をコトツク地方へ派遣致しましょう」

「相変わらずそちは話が早いのだ」

ローラン国王は会話をしながらシーライト將軍の品のある仕草を目で追い、無意識にシーライト將軍に手を伸ばす。

ローラン国王の手がシーライト將軍に届く前に、シーライト將軍は席を立った。

「では、ローラン国王。わたくしも秘宝探しの旅の準備がありますので、これで失礼致します」

ローラン国王はシーライト將軍を求めている自分の手の位置に気がつき、シーライト將軍に悟られないように近くにあったフルーツを手にとって、シーライト將軍の挨拶に笑顔で答えた。

シーライト將軍が会席の間を出て行っても、ローラン国王はシーライト將軍が出て行った扉を見ていた。美しい將軍の魅了から解放されたローラン国王は、我に返り悲しみ満ちた表情になる。

「シーライト……」

ローラン国王は姿が見えなくなってもまだシーライト將軍を見送っていた。

第8話：ラゲ1

オーカスは、コトツク地方の一番東にある田舎町リクナに来ていた。リクナに到着したのは、陽が西に落ちそうな夕方である。

リクナは、東にあるサザーランド国と隣接している。北には戦前貿易で栄えた街アルランドがあったが、1年前の戦争でアルランドの街は壊滅状態となり、サザーランドとの貿易が途絶えている事もあって現在のアルランドは廃墟と化していた。

リクナはアルランドの南に隣接しているが、戦争中はローランとサザーランドの両国に利益をもたらさない田舎町という理由で戦禍を逃れたため町の損傷は無く、戦後の今は人々が集まり賑わいを見せている。

コトツク邸の全焼から一週間。鍵探しの旅を続けていたオーカスは、コトツク家の英雄と同じ名前を持つ男の噂を聞きつけ、リクナの酒場に来ていた。

オーカスは水を運んできた店の娘にチップとして銅貨を渡し、二枚目の銅貨を見せながら問いかけた。

「ラゲという男が、この店を出入りしていると聞いたのですが、知っていますか？」

娘は左右に三つ網のお下げをしていて10歳くらいでまだ幼い。銅貨に目をやりにつこりとするが、少し考えながら答える。

「ラゲ……。その人が判らないけど、ラゲって呼ばれてる人なら、ほら、あそこで酔い潰れてるよ」

オーカスは黙って娘が指さした先を見た。灰色のショートヘアの男がテーブルにある酒の瓶を抱えてうつ伏せになって眠っている。

「ほかは？」

「もうおりません。似た名前のあの人だけです」

それを聞いてオーカスはまたハズレだと思った。

「あの……」

オーカスは娘に呼ばれる。見ると、娘はオーカスが持っている銅貨を指さしている。英雄の噂を聞いてリクナの町に来てみれば、英雄ラーグではなく、ラグという男だったのだが、それでも娘は答えた恩賞として銅貨が欲しいようだ。

「そういえばそうでしたね。それと食事をしたいので何か食べるものを」

オーカスは持っていた銅貨を娘に渡した。

「畏まりました」

娘は銅貨を握ると喜んで立ち去った。

オーカスは旅の疲れでボーッとする意識を保ちながら、酔い潰れて眠っているラグを見た。

この一週間、鍵の手がかりを求めて旅をしているうちに、ラーグと名乗る者は何人かいたが、軍人だの、アルランドで戦った英雄だのと触れ回っていただけで、全ては無銭飲食か金儲けが目的の偽者だった。

今、テーブルの上でだらしく眠る男もまた噂に聞く英雄ラーグとは正反対の姿。しかも名前はラグときている。

オーカスと思う。今度の男はラーグ本人かどうか確かめる必要もない。この田舎町で一泊して体を休めたら、すぐに旅立とう。と。

第9話：ラゲ2

コトツク邸の全焼によって既に亡くなっているかもしれない英雄ラーグを探し、その徒勞で疲れているオーカスのテーブルに食事が届く。西にある夕日は半分ほど沈んでいるので夕食といったところか。

オーカスは腕のたるさを感じながらフォークを掴んで食事を摂っている、カウンターで飲んでいた男が急に騒ぎ出した。

「俺は知ってるぞ。ユーフォリアに眠る秘宝は絶世の美女だ。俺はかみさんを捨てて秘宝と寝て暮らすんだ」

周りで笑いが起こる。

「秘宝は美女だと？ 嘘をつくな！ お前のような男は、かみさんで充分だ」

人々は酒が入るといつも秘宝の話題で盛り上がる。

「秘宝はな、若返りの薬なんだよ。俺は秘宝の薬を飲んで、もてていた若い頃に戻るんだ」

「もてただと！？ だったらなんでかみさんができないんだよ」

笑いは続く。

「秘宝っていうのは」

「秘宝は」

今度は二人の酔っ払いが同時に言う。言うてから互いの顔を見合わせた。仏頂面で睨み合う。

「俺が先に言う」

「なんだと！？ 俺に言わせろ」

酔っ払いは千鳥足で掴み合う。

「生意気な！」

「うるせえ」

それが取っ組み合いの喧嘩に発展する。

「やれー」

「行けー」

酒場の連中は、喧嘩の仲裁をするどころか喧嘩を煽って楽しんでいる。

オーカスは、テーブルと椅子を店内の隅へ移動させて、見て見ぬ振りをして食事を続ける。

酔っ払いの喧嘩はしだいに激しくなり纏れに纏れて、あのラグが酔い潰れているテーブルに倒れ込んだ。

大きな音と共にテーブルは倒れ、寝ていたラグは床に投げ出される。

喧嘩中の二人の酔っ払いはすぐに起き上がり、床に転がっているラグを気にも留めず喧嘩を続けている。

「俺が先に言うというのが分からんのか？」

「お前はうるせえんだよ」

取っ組み合いを続ける酔っ払いの横で、ラグは起き上がった。薄目を開けて床にある酒瓶を拾ってくわえるが、中の酒はこぼれてしまっていて入っておらず、ラグは口をへの字に曲げてから酒の瓶を投げ捨てた。両手で顔を覆い皮膚を縦に伸ばしながら顔を擦ると床に手についてふら付きながら立ち上がった。それと同時にラグの腰にある剣の金具が音を立てて鳴る。

オーカスは食事の手を止めてラグを見た。オーカスの剣士としての本能が剣の音に反応したからだ。

ラグは千鳥足で歩み寄り、喧嘩をしている酔っ払いに掴みかかった。

「お前ら。俺の酒をどうしてくれるんだ？ ああ？」

ラグの威勢があつたのは最初だけで、ラグは酔っ払いを掴むと目を閉じて抱きつき、相手の肩に顎を乗せてもたれかかる。

第10話：ラグ3

二人の酔っ払いは協力して抱きついてきたラグを押し返す。

「お前、鬱陶しいんだよ」

「なんだとお？ 俺は床にこぼれた酒代を返せと言ってるんだ」

ラグは薄目を開けて後退りしながら腰の剣を抜いた。後退りをやめて剣を構えるが、千鳥足が酔っ払いのリズムをとってしまつので左右にふらついている。

酔っ払いはそんなラグを見て笑い飛ばした。

「お前の剣など恐くもないわ」

「酒代を出せえー」

ラグは剣を振るが、剣の動きがゆっくり過ぎて、酔っ払いに逃げられて全然当たらない。

酔っ払いは余裕の表情で回りこんで、ラグを殴り倒した。

ラグの手から剣は落ち、床に倒れたラグは起き上がるうとするが、無雑作に手を伸ばしたところで力が抜けて、ラグの手は床に落ちた。気絶して床に大の字になっているラグを、酔っ払いは見下ろす。

「お前の望みどおりに酒代は払ってやるよ」

酔っ払いは、ラグの耳に手を伸ばした。

「その耳飾りがあれば、酒代を払っても釣りが出る」

オーカスは、酔っ払いが触っているラグの左耳に注目する。

床で気絶しているラグがピクリと動いた。

酔っ払いは、ラグの耳にある飾りを触り続けている。

「なんだこりゃ？ 取れやしねえ」

「ただ単についてるだけだろ。なんで取れねえんだ？ 俺にやらせろ」

もう一人の酔っ払いが、ラグの耳にある飾りを引っ張った時、ラグはその酔っ払いの腕を掴んだ。

「俺のイヤークフに触るな！」

酔っ払いは、ラグに掴まれた腕を痛がる。

「いてて、何しやがる」

「触るな!!」

ラグは酔っ払いを突き飛ばし、起き上がり様に床にあつた剣を拾う。起き上がってからラグは、酔い潰れていたとは思えないほど動きが早かった。アメシスト色の瞳を見開き、酔っ払いに向けて剣を振り回す。

「触るな。触るな。触るな」

第11話：ラグ4

酔っ払いは、ラグの豹変振りに驚いて逃げ惑う。

「助けてくれえ」

「なんだ？ こいつ、急に勢いづきやがって」

酔っ払いの一人は店の外へ逃げて行ったが、逃げ遅れたもう一人が店の隅に追い詰められた。

「おお、お助けを。剣士様」

酔っ払いは跪いて命乞いをするが、ラグの耳にその声は届かなかったようで、ラグは紫の瞳をギラギラと光らせて無言で剣を振り下ろした。

「ひえええ」

眼をつぶって怯える酔っ払いの悲鳴が店内に響き渡る。

酔っ払いがもうダメだと思った時、酔っ払いの頭の上で甲高い金属音が鳴り響いた。

酔っ払いが恐る恐る目を開けると、オーカスが剣を握り酔っ払いの頭の上でラグの剣を止めていた。

「貴殿は、剣を持たぬ相手を切り捨てるつもりですか？」

酔っ払いは、交差している二本の剣の刃の下から這い出て、一目散に店を飛び出して逃げて行く。

酔っ払いが逃げに行ったあとも、オーカスの細身の剣の上にラグの剣は載っていた。

オーカスは、動かなくなったラグにもう一度声を掛ける。

「ラグ殿？」

次の声でラグは顔を上げる。オーカスを見るが、ラグの目は白目になっている。

「さ……わ……る……な……」

ラグの手から剣が落ちる。ラグは白目のまま仰向けに倒れた。

「ラグ殿！」

オーカスがラグに駆け寄ると、ラグは酔い潰れて寝息を立てていた。オーカスは床に片膝をつけてラグの左耳についているイヤークフを見る。また暴れられては面倒なので、当然ラグの耳は触らない。ラグの左耳についているイヤークフの大きさは大豆くらい。艶消しを施された銀色の金属が耳の側面を覆うようにして耳の溝に合わせて噛ませてある。

魔法の発動を確認していないので判らないが、ラグのイヤークフは鍵に見えないこともない。真偽を確かめるには時間が必要だと思ったオーカスは、懐から銅貨を1枚出した。その仕草で、呼んでもいないのにオーカスの所に店の娘が駆け寄る。

オーカスは娘を見ると銅貨を差し出した。

「すまないが、二人分の宿をとりたい。この者を担がなければなら
ないから、ここから一番近い宿がいい」

娘は銅貨を受け取って言う。

「だったら、うちの二階が空いております。それにこの人、酔いが
覚めて動けるようになるまで、店の隅に寝かせておいてもいいです
よ。ずっと前からそうでしたから」

それを聞いてオーカスは笑顔になった。

「なら、それで頼む」

「畏まりました」

娘は、店に来て初めて見たオーカスの笑顔に、同じく笑顔で返した。

第12話：ジェイロー

1年前の戦争。

ジェイローは、シーライト軍の陸の三十四部隊に所属している兵士。剣より魔法が得意な彼は、弓を持つ後方支援の魔法使いである。その前衛に、ラーグ・フルフォンド・コトツクはいた。

ここはローラン国国境にある貿易の街アルランド。

戦況は、投入されたサザーランドの兵の数が多く、それを受けて戦うローラン国側の不利といわれていた。

そのためアルランドで戦う三十四部隊もまた、倒しても倒しても次々と現れるサザーランド兵に悩まされ、苦戦を強いられていたのである。

ラーグは部隊の皆に言う。

「直に応援部隊が到着するはずだ。それまで持ち堪えるんだ」

仲間のために声を上げれば、当然目立つ存在となり、ラーグの後ろに敵兵士が迫る。

「副隊長。あぶない！」

後方支援のリーダーでもあるジェイローは、ほかの後方支援の魔法使いに指示を出し、自らも矢を放って敵兵士を倒す。

振り返ったラーグは、倒れた敵兵士を見てから次に向って来た敵の兵士の剣を交わして、瞬時に移動し周りにいる敵兵士を全員切り倒した。

ほかの前衛の魔法剣士もそれぞれに戦って敵兵士を倒していく。

周囲にいた全ての敵兵士が倒されたのを確認するとラーグは顔をあげた。移動と戦いの連続でわからなくなった自分の位置を確認し、次にジェイローを探す。

ジェイローは、周囲の状況に気を配りながら、ラーグの素振りを見て、自分の位置を知らせるために声を掛けた。

「魔法を使わずに何十人もの敵を倒す。相変わらず見事な太刀捌き

だな」

ラーグは、自分もジェイローのように魔法が使えたらどんなに楽かと思い、苦笑しつつ周囲を警戒しながら言う。

「それもこれも、しっかり者の魔法使いが後方にいてくれるお陰だ」
ジェイローとラーグは、泥と返り血で汚れた互いの顔を見て、不利な状況下で戦う互いを無言で励ましあつてから、また先へと足を進めた。

そんなジェイローとラーグは同じ年。勇猛果敢な20歳である。

ジェイローは軍の学校で魔法を、ラーグは騎士としての訓練を受け、卒業後に配属された三十四部隊で初めて顔を合わせた時から二人はなんの蟠りも無く意気投合し、ジェイローとラーグは無二の親友といえるほど仲がよかった。

第13話：アルランドの英雄1

貿易によって栄えた街アルランドは、堅剛豪華な建物が大半を占めている。

それが兵士の視界を遮って行く手を阻み、前から後ろから、そして上からと、建物の陰から現れる敵兵士に振り回され、不利な状況下で戦うローラン兵士に更なる混乱と悲劇を招いていた。

現在、三十四部隊は隊長が戦死したため、今は副隊長のラーグが隊長の代わりを務めている。

今も続く不利な戦いにより、三十四部隊の兵士の数も半分以下に減ってしまっていた。

またもやその三十四部隊に敵兵士の集団が襲い掛かった。

後方の魔法使いは、前衛の支援のために物陰で大きな火の玉を作り始める。

前衛の兵士は、味方の魔法使いの詠唱時間を稼ぐために、敵兵士と剣を交えて敵兵士の足止めをする。魔法器から発動した火の玉が近づく頃合いを見計らって、前衛は一瞬にしてその場から逃げ去った。前衛がいなくなつてすぐに火の玉は敵兵士の集団に落ちて、敵兵士全員が焼け死んだ。

阿吽の呼吸で戦いアルランドの戦場を移動していく三十四部隊の戦いは順調に見えたが、周りで戦う味方部隊は次々と倒されていき、支援部隊が到着しない現状では不利な環境で戦う事に変わりはなく、そんなラーグたちにも絶望という現実が巡ってくる。

ラーグがまた敵兵士の集団に囲まれた時、ジェイローは魔法を投げながら言った。

「副隊長。もうダメです。こうなつたら皆の魔力を集めて最後の手段に」

連続で魔法を投げ続けているジェイローは集中力が衰え、魔法器のついた弓を握る腕も重くなつてきている。

ラーグも浴び続けた返り血のせいで剣を握る手が滑り気を帯び、戦いのために踏み込んだりして移動し続けている足の裏は肉刺がつぶれていて、足を動かすたびに酷い痛みを感じてしまう。

だが、戦場で戦いをやめる事は死を意味し、隊長の代役を務めるラーグが戦いを諦める事は、部隊の全滅を意味している。

ラーグは、敵兵士と戦いながら言う。

「ダメだ。そんな事したら、この辺り一帯に重力場ができ、敵味方共々重力に押し潰されて死んでしまう。まだ諦めるな。支援部隊が到着するまで頑張るんだ！」

敵兵士に囲まれ精神的にも追い詰められたジェイローは、呼ぶ時に守らなくてはならない階級を忘れて、親友としてラーグを呼んでしまう。

「ラーグ。もう我々は生き残れない。周りをよく見る。最後の手段を使わなければ、我々は無駄死に……」

ジェイローの言葉が途中で止まる。それはある事を告げるサイン。

第14話：アルランドの英雄2

ラーグは判っているながらも振り返った。

「ジェイロー！」

ジェイローの背中に敵兵士が剣を突き立てている。その剣の刃の先がジェイローの胸からも見えている。

「おのれ。よくも！」

ラーグは向かって来る敵兵士を切り倒して進み、急いでジェイローの所に向かう。

敵兵士はラーグに気づきジェイローから剣を抜いてラーグと剣を交える。

剣の腕はラーグのほうが上で、ラーグは敵兵士の懐に入り込んで、いとも簡単に敵兵士を切り倒した。そしてすぐに地面に倒れているジェイローを抱き起こした。

「ジェイロー。しっかりするんだ！」

ジェイローは何かを言おうとして口を動かすが、声の代わりに口から血が溢れて流れ出す。咳き込んで血を吐き出したあと、ジェイローは息絶えた。

ラーグはジェイローの死を悲しむが、新たに現れた敵兵士はそんなラーグに同情などしない。今がチャンスとばかりに、ラーグの背中に剣を突き刺す。

ラーグは背中を押されたように感じた。それが痛みに代わり、激痛になっていく。ラーグは振り向いて自分の背中を刺している敵兵士を見た。

敵兵士は手柄を立てたと喜んで笑顔になっている。

その敵兵士に、ラーグは言った。

「笑顔で……私を……刺……す……な」

敵兵士にとって、急所を刺されているラーグなど死んだも同然。ラーグの言葉を見殺しにして、剣を抜いて次に戦う相手に向かって行っ

た。

致命傷を負ったラーグは、もう誰からも狙われなくなった。ラーグの瞳に味方の惨敗という悲惨な光景が映る。私はここで死ぬのか？ ラーグの手足は感覚がなくなり、徐々に足の力が抜け、地面に両膝をつけたあと倒れて意識を失った。

直後、ラーグの全身は強い光に包まれる。

その光はアルランドの街と共に敵のサザーランド兵士をも焼き尽くし、その後支援のために到着したシーライト軍に勝利をもたらしたのである。

ラーグは致命傷をおっていたが、駆けつけたシーライト軍によって保護され、奇跡的に命を取り留めた。

数日後、捕虜となった敵兵士の証言により、ラーグはサザーランド軍に占領されそうになったアルランドの街を救った英雄となったのである。

第15話：リクナの酒場1

気がつくとラグは暗闇の中にいた。

カーテンを開ける音がする。

ラグは目蓋に光を感じて目を開けた。音がしたほうを見ると、窓際に人が立っていて外を見ている。窓から入ってくる光が眩しくて、誰なのかよく見えないが、腰には剣があり剣士というのだけは分かる。

ラグが起き上がると、窓際にいる者が振り返りラグを見た。

「うなされていたようですが？」

昨日、ラグの剣を止めた剣士のようだ。ラグは思い出して、これ以上関わり合いたくないと思い、相手の声を無視する。ベッドから降りて立て掛けてあった剣を腰に挿した。

剣士はどこかへ行こうとするラグに歩み寄る。

「ラーグ殿。私は」

ラグは、腰に挿した剣の位置を直しながら言う。

「俺はラグだ」

それだけ言ってラグは部屋を出た。

剣士は、ラグを追って部屋を出る。

「失礼しました。ラグ殿。私は、シーライト軍、陸の二十一部隊、隊長のオーカスと申します」

ラグは、オーカスの言葉を無視して階段を下りながら大きな欠伸をする。

オーカスは小走りでラグの横について、ラグと一緒に階段を降りる。横について歩くオーカスは、ラグより小柄で背が低い。

「シーライト將軍の命により、鍵の継承者の護衛をするため、コトツクの地へ赴いたのですが、コトツク家の屋敷は全て焼け落ちて跡形もなく」

ラグはまたオーカスの言葉を無視する。階段を降り切ってから、

一階にある酒場のテーブルを陣取り、店内を歩いている娘に言った。

「おい。酒」

娘はトレーにあつた料理を客に配ってから振り向く。

「またですか？　少しは食べないと」

「酒でいい」

「はあい」

娘はイヤそうに返事をするが、オーカスと目が合うと笑顔になり声の調子も弾んでトーンが高くなる。

「お食事をされますか？」

「ああ。パンに合う物を。あとミルク」

「畏まりました」

第16話：リクナの酒場2

娘が去ってから、オーカスは椅子を動かしてラグの隣に座った。

「私は鍵の手がかりを探して」

無表情でオーカスの言葉を無視していたラグは表情を歪めた。

テーブルの下にあった手を持ち上げて、掌で思いつきりテーブルを叩いてオーカスの言葉を止めた。

「うるさい。俺は二日酔いで頭が痛いんだ」

そして、ラグは初めてオーカスの顔を見た。オーカスは青い瞳で茶髪を後ろでまとめて紐で一括りにしている。多分それなりの長髪なのだろう。まだ髭の剃り跡も無く、あどけなさが残る少年のようなオーカスの顔をまじまじと見る。

「お前。隊長つて言ったよな？」

「はい。言いました」

「歳、いくつだ？」

「十七歳です。あの、私の歳が何か？」

「何かだと？ 十七の未成年が酒場に来るな！」

ラグはオーカスの腕を掴む。立ち上がってオーカスを引っ張って連れて行く。

「来い！」

最初オーカスは逆らうが、力はラグのほうが強いようで、強引に引っ張られていく。

「私は酒を飲みに来たのではなく、任務で来ているのです。飲んだくれの貴殿と一緒にしないで下さい」

「なんでもいい。とにかくお前は店から出て行け！」

ラグは、オーカスを店の外へ放り出した。

オーカスは、ラグに押し出された勢いで前のめりになり転倒しそうになるが、腰を低くして地面に手をつき派手な転倒だけは辛うじて逃れる。オーカスは身を起こして手についた砂を払いながらラグ

に言った。

「昨日一緒に泊まった仲じゃないですか。それに私は食事はまだ摂っていません。食事だけでもさせて下さい。ラグ殿。お願いです。ラグ殿」

第17話：リクナの酒場3

ラグは戻って席に座ろうとするが、オーカスが店の外でラグの名を呼んで騒ぐので、周囲の目はラグに向けられ、オーカスの声と周囲の目が鬱陶しくなったラグは仕方なく店の外に出た。

「いい加減にしろ。ガキみたいに騒ぐな！」

オーカスに怒鳴るが、オーカスは驚きもせずラグを見て愛想笑いをする始末。

結局、ラグは店の外にテーブルと椅子を持ち出して無言で椅子に座った。

オーカスは、にこにこ顔でラグの隣に座る。

「私のために、外にテーブルを出してくれるなんて、ラグ殿は口は悪いけど根は善い人なんですネ」

ラグは仏頂面になっている。

娘が含み笑いをして酒と食事を運んで来た。オーカスと視線を交わしてから酒と食事をテーブルに置く。

「お待ちどうさます」

ラグは無言で酒に手を伸ばす。

その酒をラグよりも早くオーカスが掴んだ。

「今日から酒はやめて下さい」

「はあ？」

ラグは声を裏返してテーブルに両手をつく。

オーカスは酒を娘に返した。

「酒ばかり飲んでいては体に悪いじゃないですか。この人にミルクを」

「畏まりました」

「おい女。勝手に返事をするな。酒を置いていけ。おい？」

娘は軽蔑の眼差しをラグに向けてから酒を店内に持って行ってしまった。

「くそつ。なんなんだ!？」

酒が飲めなくなったラグは拳でテーブルを叩く。

オーカスは、苛立つて機嫌の悪いラグを怖がりもせず笑顔で見ている。

「面白がつてんじゃないねえ。お前のせいなんだぞ」

ラグは怒ってオーカスに言うが、オーカスは悪ぶれた様子もなくパンを手を取った。

「ラグ殿が鍵の継承者でないなら、私はまた当てを外したことになります」

パンを適当に割さいて野菜やハムを挟みながら言う。

「次は、居所がつかめない鍵の継承者を探して彷徨さまようより、居所がはっきりとした鍵の継承者の所へ行こうと思います。敵国ですが」

第18話：リクナの酒場4

その話に、無関心だったラグが初めて興味を示した。

「敵国つて、戦争を仕掛けてきたサザーランドだろ。なんでそんな敵国へ行くんだ？」

「鍵の継承者の護衛。私がシーライト將軍から仰せつかった任務なので」

オーカスの表情が軍人として引き締まる。

「サザーランド国王は、秘宝を手中に収めんとして鍵を集めているという情報です。我がローラン国王は、ユーフォリアの平和のため、神々との契約を破ろうとするサザーランド国王の野望を阻止したいのです」

ラグのアメシスト色の瞳にオーカスが映っている。

「国境の道は、どこも封鎖されていて通れねえよ。昼も夜も両国の兵士が睨み合っている状態だ」

オーカスは自分で作ったサンドイッチを頬張りながら言う。

「でも任務なので」

任務という言葉に反応して、ラグの表情がまた歪む。

「お前のようなガキが、敵国の兵士がうろつろしている、警戒厳重な国境をどうやって越えるんだ？」

怒り口調になって^{いか}いるラグに、オーカスは穏やかな表情で言った。
「軍人とはいえ、過酷な任務を背負っている私の事を、心配しているのですか？」

胸中を言い当てられ、ラグは一瞬赤面する。

「心配なんかじゃねえ」

横を向いたラグに、娘がミルクを持って来た。

「お待ちどうさまです」

ラグはテーブルに置かれたミルクを睨み付ける。

「くそっ」

ミルクを一気に飲み干す。そしてラグは、笑いを我慢して店内へ戻ろうとする娘を呼び止めた。

「おい。俺にも持って来てくれ。その……、そいつと同じものを」
ラグは視線をオーカスに向ける。オーカスに負けたようで悔しいのか、オーカスが大嫌いで虫唾^{むしず}が走るのか、ラグの詳しい胸中は分らないが、オーカスが食べているパンの食事が欲しいと素直に言えないのは確かなようだ。

「畏まりました」

娘はラグに笑顔で返事をした。

第19話：リクナの国境1

戦前のアルランドの街にあったローラン国とサザーランド国を繋いでいた国境の道は、平坦で行き来が楽なため商業の流通経路になっていた。

戦争が終わった現在は、どの国境の道も封鎖状態だが、両国の許可証を持った一部の商人だけが、国境の行き来を許されていた。

リクナの町にも、サザーランドへと続く細い道があるのだが、国境を越えるには進出国へ重い税金を支払わなければならない、許可証がもらえない、もしくは税金が払えないといった人々の密入国があるとを絶たず、その密入者を防ぐために、背より高い国境の壁を間に挟んで両国の兵士が交代で肩を並べて睨みをきかせていた。

酒場で昼食を済ませたオーカスは、昼間のうちに旅支度を済ませ、日が暮れてからは草原に潜み、国境にある壁を見ていた。

夜空には満月が浮いている。雲がゆっくりと流れて満月を隠すと、辺りは闇夜になり、国境の壁は黒味を増して闇夜に溶け込んで見える。

オーカスは暗くなった今がチャンスとばかりに草原を這って移動する。

その隣に、なぜかラグもいた。

「一緒に来てくれるなんて、ラグ殿は本当に善い人なんですネ」

オーカスが嬉しそうに言うのを、ラグは鬱陶しがる。

「いらん事をしゃべってないで、さっさと進め」

「はい」

小声ではあるがラグが怒り口調で言っても、オーカスは嬉しそうに返事をして這って進む。

草原にいる虫たちは、そんな二人の会話や物音を隠すように曲を奏でている。

国境の壁に近づくとつれ、壁のレンガ模様がはっきりと見えてく

る。近くで見る国境の壁は、思った以上に高く、魔法でトラップも施されていて、ヘタに壁に触れれば何が起こるか分からない。

オーカスは、剣についている魔法器を使って壁に施されているトラップがなんなのか調べようとする。

「とりあえず、どんなトラップが仕掛けてあるのか知りたいので、周囲の状況を魔法で調べてみましょう」

オーカスの行動の一部始終を見ていたラグが素早く静かに動いて魔法器に触れているオーカスの手を掴んだ。

「やめろ。魔法を使えば、敵の魔法センサーに感知されるぞ」

第20話：リクナの国境2

オーカスは、ラグの手の温もりを感じながら、剣の魔法器から手を放した。

「よくご存知ですね」

ラグは、オーカスの冷やかに低い声で言う。

「うるせえ」

「もしかして、いろいろと調べて国境越えの準備はしたものの、このリクナの国境の壁が越えられなくて、酒浸りになっていたのですか？」

オーカスの言葉で、ラグはぐうの音も出なくなった。凶星のようだ。

オーカスと視線を合わせにくくしているラグの素振りを見て、オーカスは勝ち誇った笑顔で言った。

「ラグ殿は、私より大柄な体格なのに、中味は子供なんですね」

「子供だとお」

こめかみに青筋を浮き上がらせたラグの頭と口を、オーカスは押さえて草の中に隠す。

「俺は二十一……、フガッ、フガッ」

「しっ。誰か来ます」

ラグは右拳を挙げて「俺は怒ってんだぞ！」ポーズでオーカスに押さえつけられて雑草の中にひれ伏す。近づいてくる何人かの足音が聞こえてきて、それを耳にしたラグは、敵にしる味方にしる見張りの兵士に見つかるその後々面倒な事になると思い、地面に頬をつけながら硬直した。

来たのは数人の敵国の兵士だった。今まで見張りをしていた兵士と交代をする。

去って行く兵士を見ながらオーカスは言った。

「次の交代の兵士が来るまで時間がありますね。なら、魔法を使わ

ずにあの兵士を倒して国境の壁を越えましょう」

オーカスがラグを見ると、ラグはまだ怒っていた。

「俺を子供だと言ったのを取り消せ！」

「フフフ。本当にラグ殿は……」

子供っぽいと言うと、またラグは怒るだろう。オーカスは、更に怒ったラグの表情を思い浮かべて小さく笑うと、見張りをしている敵国の兵士に向かって走り出した。

「おい。こら。急に走り出すな」

ラグもオーカスを追って走る。

第21話：リクナの国境3

サザーランドの兵士がオーカスとラグに気付いた。

「貴様ら、何者だ！」

オーカスは腰の剣を引き抜く。

「貴殿らに恨みは無いが、死んで頂く」

「何！」

オーカスは兵士と剣を交える。戦っている時のオーカスは真剣な表情になっている。もうラグをからかって笑う十七歳のオーカスはそこにはいない。

ほかの敵兵士が剣の魔法器に手を添えた瞬間、ラグがあつという間の速さでその兵士に近づいた。魔法器を作動させる前に切り倒す。オーカスはまだ兵士とやりあっている。

その間に、ラグは駆けつけた敵兵士も全員切り倒してしまった。誰一人として魔法を発動させる事なく。

その後すぐに、オーカスは剣を交えていた兵士を切り倒した。流れ出た汗を拭きながらラグを見る。

「魔法を使わずに戦うのは、魔法を使うよりきついですね」

戦いが終わるのを待っていたかのように、月が雲の間から顔を出して辺りを照らした。

月の光を受けて、ラグの灰色の頭髮は白く浮き上がり、潤みを帯びたアメシストの瞳は紫色に煌いている。

ラグは、オーカスが話しかけて暫く経ってから剣についた血を払い鞘に収めた。体から血を流して倒れている敵兵士を見ながら、静かな口調で言葉を言い捨てる。

「魔法嫌いの俺には、どうでもいい話だ」

オーカスは、ラグの冷たい口調を咎めず、歩みを進めて月の光ではっきりと見える敵兵士の死体に近づいた。

「私が敵兵士一人と戦っている間に、ラグ殿は残りの敵兵士全員を

倒したのですね。剣さばきといい、身のこなしといい、人間離れした早技だ。既に退役されましたが、以前シーライト軍にも俊足で魔法を使わずに戦う兵士がいました。その兵士は、我がローラン国軍の不利といわれたアルランドの戦いを勝利に導いた英雄。その兵士も、灰色の髪で紫の瞳だったと聞きます」

オーカスはラグを見るが、ラグは顔色一つ変えず何も言わない。

オーカスは遠まわしにラグを追及するのをやめて、倒した兵士の剣を拾った。壁の下の地面に剣を突き刺す。

オーカスの行動に気付いてラグが様子を見に来た。

「急に何をやりだしたんだ？」

オーカスは何度も地面に剣を突き刺している。

「穴を掘っているのです」

第22話：リクナの国境4

「はあ！？ お前バカじゃないのか。地面の下にも壁はあるんだぞ」
ラグは呆れ顔でオーカスが掘り始めた地面を見ている。

「それは私も分かっています。でも、地中にまでトラップの魔法は仕掛けてないと思うんです。それに魔法センサーも地中までは届いていないはず。だって、それだけ魔力の強い土属性の魔法器を扱う魔法使いは限られていますから、リクナのような田舎町には配属されていないと思うんです」

オーカスは地中の壁に触れてみる。トラップは作動しない。

「ほら、やっぱり」

考え通りだったと笑顔になってラグを見る。

ラグはまだ納得がいかず、オーカスの行動が奇妙な光景にしか見えない。

「こんな所で穴を掘るより、国境の道を通った方が早いだろ？」
「確かに、剣の腕が立つラグ殿が一緒なら、国境の道を通った方が早いでしょうね」

オーカスは穴を掘るのをやめて顔を上げた。一瞬だけ見せた笑顔のあと、オーカスは急に真面目な表情になった。

「しかし、国境の道には監視と税の取り立てのため両国の兵士がいます。突っ走れば両国の兵士との戦いは避けられないでしょう。敵国の兵を切り倒すのは仕方ないとして、ラグ殿は、我がローラン国の兵士を切り倒してサザーランドに入国しなければならぬほどの事情と覚悟があるのですか？」

頭一つ分背の高いラグを見上げるその姿は、小さいながらも威厳をまとった陸の二十一部隊をまとめるオーカス隊長さまさまだ。

そのオーカスに問われて、ラグは返事の代わりに表情を歪ませた。背の低い増してや年下のオーカスに意見を言われてラグが腹を立てるのも仕方が無いのだが、何かに当たり散らすのでもなく、ただ表

情を歪ませて黙って立っている。その視線は、オーカスが掘っている穴に向けられていたが、見えているものは別の何かだった。それにしても、ラグが口を閉ざして表情を歪ませる理由はなんだろうか？

オーカスは、ラグの心理状態を心配して言葉を続けるのをやめた。一呼吸置くためにまた穴を掘り始め、ラグの様子を見ながらまた口を開いた。

「この程度の警戒態勢なら、地中で魔法を使っても魔法センサーに感知されずにすむと思うので、もっと穴が深くなったら、私の土魔法で地中の壁に穴を開けて、サザーランド国まで穴を通します。その穴を潜ってサザーランドに入国しましょう」

歪んだラグの表情は今も変わらず、真面目に穴を掘っているオーカスを見ている。

オーカスは、動こうとしないラグに言った。

「早くしないと次の交代の兵士が来てしまいます。さあ、ラグ殿も穴掘りを手伝って下さい」

「あのなあー」

ラグの表情が、穴を掘り始めた頃の呆れ顔に戻った。

それを見てオーカスは、ラグの言葉の途中で言う。

「ラグ殿は、サザーランドへ入国したくはないのですか？」

ついにラグは脱力した。黙々と動いて敵兵士の剣を拾う。オーカスの前に来てからのラグは、いつもの口の悪い調子を取り戻していた。

「はいはい。さすが隊長殿」

オーカスと向き合い、剣で穴を掘り始める。

「シーライト軍、陸の二十一部隊の隊長を務めるだけの事はある。シーライト軍の隊長の中で、こういう穴掘り作戦を思いつくのは、オーカス隊長殿だけです」

ラグは、半ば嫌味を込めて言い、オーカスを茶化しながら一緒に穴を掘り続ける。オーカスと共に汗をかきながら、下を向いて穴を掘るラグの表情に、少しだけ笑顔が浮かんでいた。

次の日。

サザーランド国王に一報が届く。サザーランド国とローラン国を隔てている国境の壁を越えた者有り。敵味方、及び人数などは不明。我が軍の見張りの兵士十人を殺害したもよう。魔法センサー感知せず。よって、壁を越えた者は魔法兵器が使えない一般市民の可能性有り。と。

第23話：オフエーリア

戦争が終わって間も無くの頃。

オフエーリアはコトツク邸を訪れた。長い栗毛の巻き毛と華やかなドレスが似合う彼女は、左腕にパイが入った籠を提げている。

「こんにちは。ラーグが戦争から帰って来たって本当ですか？」

「いらつしゃい。オフエーリア。よく来てくれたわ。ラーグは、帰って来てはいるんだけど、辛い戦いだったみたいで、人が変わったようになっちゃって部屋に籠もりがちなのよ」

出迎えたキリエラは曇った表情で答える。

「あんなに気を落とした息子を見たのは初めてだわ。どうしたらいいのかわからなくて……。オフエーリア。幼馴染みのあなたが来てくれて本当によかったわ」

オフエーリアの笑顔も曇る。

「アルランドの戦いの噂は、私も聞いています。勝利はしたけど、戦いは激しく相討ちに近い状態だったって。おば様。ラーグの部屋に行ってもいいですか？」

キリエラは両手を差し出して、オフエーリアの籠を提げている左手を握った。

「お願い。あなたの顔を見たらラーグも少しは笑顔を取り戻すと思うから」

「はい」

オフエーリアは急いでラーグの部屋へ行く。

コトツク家の屋敷は二階建て。コトツク地方を統べる貴族だけあって屋敷の部屋の数も多いのだが、幼い頃からコトツク家に通い慣れているオフエーリアは、階段をあがって二階へ行き迷う事なくラーグの部屋へ向かう。

オフエーリアがドアを開けるとラーグは茫然自失の状態でベッドに座っていた。オフエーリアは静かに歩み寄ってラーグの隣に座っ

た。

「ラーグ。私よ」

ラーグはオフェーリアを見る。最初は誰か判らなかつたようだが、オフェーリアの顔を見ているうちに無表情が揺れ動いて、ラーグは瞳から涙をこぼした。

「なぜ私は生き残つたんだ？ 副隊長として皆を守れなかつた私に、王はなぜ英雄の称号と褒美を与えたんだ？」

ラーグは、生き残つた代償として、戦いの惨劇という忘れたくても忘れられない記憶を抱えていた。このやつれて人相が変わつてしまつた彼を誰がアルランドの英雄だと思ふのだろうか。

オフェーリアはラーグの手を握る。

「ラーグ。あなた一人だけが苦しいんじゃないわ。戦いで生き残つた兵士の誰もが苦しい思いをしているの。一人で悲しまないで。これからは私がついているから」

第24話：悪夢に変わる時

ラーグは声を上げてオフエーリアに泣きついた。

「オフエーリア。もう嫌だ。あんな思いは二度としたくない」

オフエーリアの慰めの声は、救いの女神のように優しくラーグの耳に響く。

ラーグはオフエーリアにすがって暫く泣いていたが、オフエーリアの様子の変化に気付いて顔をあげた。

「オフエーリア？」

見れば、オフエーリアの顔が焼けただれている。特に左の頬から顎にかけては肉が剥がれ落ちてしまつて骨が見えている。

「わあああ」

ラーグは悲鳴を上げてオフエーリアを突き放した。

ラーグがベッドから立ち上がった瞬間、ラーグの部屋だった場所は一瞬にして闇の世界に変わった。

オフエーリアは剥き出した歯でしゃべる。

「ラーグ。あんまりだわ。私は、あなたの為に尽くしたのに。あなたはこんなになつてしまつた私を見捨てるのね」

「違う。オフエーリア。それは誤解だ」

ラーグは、逃げ腰になりながらも震える足を前に出してなんとかオフエーリアに近づいて行くが、近づくにつれ、オフエーリアの顔から血が滴り落ちてドレスが血の色に変わっていく。

「オフエーリア。今行く。何があるうと、私は君を見捨てるつもりはない」

ラーグは、震えながらオフエーリアに手を伸ばす。しかし、今度は地面から無数の手が伸びてきてラーグの足を掴んで邪魔をする。

手は、ラーグの足を掴んでよじ登り、地中からジェイローが這いつくばって出て来た。

「副隊長。私たちを見捨てないで下さい」

ラーグが足を抜こうとするが、無数の手はラーグの足を掴んでなかなか放さない。

ジェイローは背中に剣が刺さった状態で立ち上がりラーグの腕を掴んだ。

「ラーグ。なぜ生き残った？ 最後の手段に講じなかったのは、自分だけが生き残るためだったのか？」

ラーグは叫んで弁解する。

「そんなつもりはない。私だって皆と共に必死で戦ったんだ」

オフエーリアがラーグの前に立ち低い声で言う。

「いいえ。あなたは助かった事を喜んでいたわ。そりゃあ、最初は「自分も死にたかった」って泣いていたわ。でも、日が経つにつれて、笑顔が増えてきて「生きていてよかった」って私に言ったじゃない。あの頃のあなたは、亡くなった戦友の事なんて忘れてしまっていたでしょ？ そうよ。今だって私の事を忘れようとしてる。違うかしら？ ラーグ？」

地面から伸びてくる手は、更に数を増して泣き叫ぶラーグの体や顔に巻きついていく。

ラーグは身動きがとれない状態で叫びまくっている。

「皆を、オフエーリアを、忘れた事など一度も無い！ 忘れられるはずがないだろ？ 一度死んだ私は、今は死ぬ以上の思いで生きているんだ。どうすれば皆を忘れる事ができるんだ？ そんな方法があるなら私が一番知りたい。これほど苦しい思いを抱えている私を、どうして皆は分かってくれないんだ」

オフエーリアは肉が削げ落ちた顔で、身動きがとれなくなったラーグの頬にキスをして、血まみれの全身でラーグに抱きついた。ラーグの顔を愛しそうに見つめ、しかし肉が削げ落ちている左側の顔はラーグを恨めしそうに睨み、ラーグの頬に手を添えて優しく撫ぜながら言う。

「だったら、私を愛して。未来永劫ずっと私を愛して。ラーグ」

オフエーリアとジェイローの体から立ち昇る腐敗臭が、無理矢理

にラーグの鼻に入ってきて、ラーグは半狂乱になりながら悲鳴をあげる。

「部隊も、オフエーリアも、見捨てるつもりはなかった。忘れるつもりもないんだ。本当だ。信じてくれ。私を信じてくれ。頼む。頼むから、もう二度と私の前に現れないでくれ」

ラーグは、無数の手に掴まれながら何度も泣き叫んだ。

第25話：サザーランド南西1

気がつくといつも暗闇の中にいる。次にカーテンを開ける音がする。いつもの早さで開けられるカーテンの音は、慣れてくると心地よくて安堵感に包まれる。ラグがそう思うようになったのはつい最近だ。目蓋に光を感じて一日の始まりを知り、生きる事が苦痛で永遠に眠ってしまいたいと思う事もなくなった。そう思いながらラグは目を開けた。

窓際には、きちんと身形を整えたオーカスがいて、外の景色を見ている。

これも見慣れた朝の風景だと、ラグは思いながら起き上がった。オーカスは外の景色からラグに視線を移した。

「ちょうどローラン国内は平穏で変わりないそうです。ラグ殿。昨夜も、うなされていたようですが？」

いつもの事だが、ラグはオーカスの言葉を無視して、手早く身支度を終えて部屋を出て行く。ラグは階段まで足を進めるが、振り返ってもオーカスがいないので、まだ部屋に残っているのかと思い、戻って部屋を覗いた。

「なんだ、まだ外を見ているのか？」

オーカスは、まだ窓際に立っていた。さきほどラグに無視されたのに、それに腹を立てた様子も無く、いつもの笑顔でラグを見てから部屋の外へと歩き出す。

「ここから見えるサザーランドの街並みが綺麗なので、つい見とれてしまっただけ」

ラグは、差し込む陽の光と、街並みの景色を背にして立っているオーカスに眩しさを感じて目を背けた。

「戦禍を逃れた街が綺麗なのは当たり前だ」

言葉を言い捨てて再び部屋を出て行くラグに、オーカスは小走り

でついて行き、一緒に階段を下りた。

国境の壁を越えて数日、二人は別れることなく一緒にサザーランド国内を旅していた。

オーカスの説明では次の鍵の継承者は「サザーランドの北に住んでいる」らしい。

現在、サザーランドの南西にいる二人は、田舎町出身の貴族を装い観光旅行とい理由をつけて景色のよい小さな町を見つけては滞在し、少しずつ北へ移動していた。

オーカスと数日行動を共にしているラグは、未だに口数が少ないものの心境に変化が表れ、オーカスを待つようになっていた。

ラグとオーカスは、宿代を払うと外に出た。

外の通りは広く、地竜に乗って移動する人や、食料を積んだ荷台を牽引する事ができる大型の魔法器を操縦する人々が往来している。ラグは店の看板を見ながら道端を歩く。

「さて、どこで朝食をとるか」

オーカスもラグの横について歩く。

「どこかで地竜と食料を手に入れて、食べながら移動しましょう」

第26話：サザーランド南西2

野生の地竜は獰猛だが、卵から育てると地竜は人になつてペット同然になる。頭が良く主人の顔を覚え、馬のように騎乗したり、また力もあるため荷物を引かせたり積んだりもできる。ただし、ラグにとっては高価な生き物だったりする。

ラグは驚いてオーカスを見た。

「俺は地竜を買う金なんか持ってねえぞ」

オーカスは驚いているラグの顔を面白そうに眺めながら言う。

「私が持っていますから大丈夫です。必要経費ということで軍から支給されているんですよ。長旅になる事も考えて、この前倒した兵士からも頂いておりますし」

「頂いたって！？ お前。それは強盗殺人だぞ」

先ほどまで朝陽を浴びて光明神からの祝福を受けていたオーカスの言葉とは思えない犯罪者的な発言に、ラグは更に驚いてオーカスを頭の天辺から足の爪先まで見てしまう。

オーカスは、ラグの動揺を楽しそうに見ながら自分の唇の前に指を立てて言った。

「ラグ殿。声が大きい。静かにして下さい。どの道、私たちは敵国の軍人で、見張りの兵士を殺して国境を越えたお尋ね者なんですから」

「お前は、なんて奴だ」

ラグはぼやきながらもオーカスに従う。

年下のオーカスが年上のラグを制する。オーカスが陸の二十一部隊の隊長を任されている理由がここにあるようだ。

ラグとオーカスは、地竜と食料を手に入れて、次の鍵の継承者がいる北の町を目指した。

オーカスは地竜に跨り揺られながら言う。

「今から向かうサザーランド国のリー地方には、癒しの魔力を秘め

た鍵があります。ローラン王都の図書館で調べた古代の文献によると、癒しの鍵は指輪の形をしているようです」

ラグは地竜の背に乗り、林檎をかじりながらオーカスの話を聞いている。

「ふーん。で、その鍵の継承者に挨拶をしたあと、私は敵国ローランの兵士オーカスです。と言うつもりなのか？」

ラグは皮肉を込めて言うが、オーカスは真面目に答える。

「事と次第によっては、身分を明かさなければならぬでしょうね」

「おい。バカ正直に返事をするな」

第27話：湖の畔1

ラグの反応を見てオーカスはまた笑う。

「でも、古代の文献によると、鍵には意思があると記されているので、鍵が身分の提示を求めてきたら、私は応じる覚悟でありますけど」

「鍵に意思があるって！？ そんなはずないだろ」

ラグは言ってから静かになった。林檎を口へ運んでいた手の動きが止まっている。

オーカスはそんなラグの様子をうかがいながら静かな視線を向ける。

「急に静かになって、どうしたのですか？」

「なんでもない。いちいち俺の事を気にするな」

ラグは、また林檎を食べ始めた。

ラグたちが向かっているリー地方は農耕作が盛んで、リー地方で作られたものはザーランドの各地域へ出荷されている。ラグが今かじっている林檎もリー地方のものだろう。

ラグとオーカスは、まる一日地竜の背に揺られて北へ移動し、通りかかった湖のほとりで野宿をする事にした。

日が暮れて夜になり、ラグとオーカスは焚き火を囲んで座っている。

視線の先にある湖には夜空にある月が映り、その湖面は月の光を受けて静かに揺れる波が白く光っている。

「この湖は、ローラン国と同じ魚がいるんですね」

オーカスは魚を焼きながら言う。

「4、5日真東へ歩けばローランにたどり着く距離だからな。同じ魚くらいいるだろ」

ラグは焼けた魚を食べている。

「ラグ殿。足りなかったら遠慮無く言って下さいね。また魚を獲っ

てきますから」

「獲るって、さっきのように氷の魔法で凍らせて捕獲するのか？」

俺はもうそんなに食えんぞ」

「いえ。今度は明日の朝食の分も獲りたいので雷いかずちの魔法を使おうと思っっています」

ラグは魚の骨を焚き火に放り込んで燃やし、次に焼けた魚を取って食べ始める。

「国境の壁に穴を開ける時は、土の魔法。焚き木に火をつける時は、火の魔法。魚を獲る時は氷と雷いかずちの魔法。お前はいろんな属性の魔法が使えるんだな」

オーカスは焼けた魚を食べながら言う。

「ええ。本来、魔法兵器は強力すぎる魔力ゆえに、いかに訓練を受けた軍人といえど1つの属性魔法しか使えないはずなんです、私は幼い頃から複数の属性魔法が使い、貴族の家に生まれた事もあって、魔法剣士としての教育を受けました。魔法兵器もそんな私に合わせて、コトツク地方の工場で特別に作られた魔法兵器なんです。

確か、アルランドの英雄の父君であるコトツク卿も、ユーフォリアでは数少ない四種の属性魔法が使える魔法剣士だと伺っております。コトツク卿が軍人だった頃、鍵の継承一族が強大な魔力を持つコトツク卿を目に留められて、一族の薦めによりコトツク卿は火の鍵の継承者であるキリエラ様とご結婚されたとか」

オーカスはラグにそれとなく鍵の話題を振るが、ラグは何食わぬ顔で6匹目の焼き魚を頬張っている。

第28話：湖の畔2

「お前は、天性の魔法剣士なんだな。俺は、魔法兵器だろうが生活道具だろうが、全ての魔法器が使える。湯も沸かせないから、茶を飲むのにも人の手を借りんといかん」

ラグは、普段から物事に無関心なだけに、コトック卿の話題に興味が無くて話に乗ってこなかったのか、それとも理由があつて態と話をそらしたのかが分かりにくい。

オーカスはラグの左耳についている銀色のイヤークフを見る。

「持つて生まれた魔力が弱いせいで魔法兵器が使いこなせなくて軍人になれない者は沢山おりますが、ラグ殿のように、家庭の魔法器も全く使えないというのも珍しいですね」

もしラグの耳についているイヤークフが秘宝を封印している鍵だとして、強大な魔力を秘めた鍵を持つ者が魔法が全く使えないというのはおかしい。オーカスは、その理由を探る意味で言葉を続ける。「ユーフォリアの人間は、皆、生活に必要な最低限の魔法器は使えるはずなのに」

「だよな」

ラグは沈んだ表情になった。

イヤークフは、焚き火の緩やかな灯りを浴びて今はオレンジ色の光沢を帯びている。

それを左耳に付けているラグは、真相を知りたがっているオーカスの期待を裏切り、そしてオーカスの予想通りの短い言葉を口にするだけだった。

ラグがいつもの無視をしないだけ、まだマシな方かもしれないが、どちらにしても沈んだ表情のラグに言葉を続けていけばいずれは無視を始めると思い、オーカスは話題を変える事にした。

「リー地方は、更に北へ進み二週間ほどで到着する予定です。この湖の向こう側に名も無き土地があり、湖の西側に沿って移動し名も

無き土地を通って北上すればもっと早くリー地方に到着できますが、ご存知の通り、名も無き土地は砂漠地帯です。その砂漠地帯を越える日数分の水と食料を地竜に乗せるのは無理なので、多少移動日数はかかりますが、湖の東側を通って名も無き土地を迂回し、途中の町で水と食料を補給しながら移動する事にします。明日からは、夜の睡眠以外は休みなしの移動になりますので、リー地方に到着したらどこかの宿でゆっくり休む事にしましょう。それから鍵の継承者に会っても遅くはないと思いますので」

「ああ」

オーカスが話題を変えて明日の旅の予定を説明してもラグの沈んだ表情は直らなかった。

その後、いつもの如くラグの口数は更に少なくなり、夜が更けてきた事もあって、話し相手がいなくなったオーカスは、ラグより先に寢床に入った。

第29話：コトツク家1

全焼前夜のコトツク邸。

「おば様。これでいいですか？」

オフエーリアは、盛り付けた肉料理を、隣にいるキリエラに見せた。

キリエラは首だけを動かして隣の皿を見る。横を向くキリエラは、灰色の長い髪を上にあげてまとめているのが分かる。

「いい感じじゃない。でも直して欲しいことがあるわ」

「そ、それは……」

オフエーリアは不安な表情をする。

キリエラは、オフエーリアの表情を笑顔で見ながらフキンを取って手を拭いた。

「おば様じゃなくて、お母様。戦争が終わり、息子が無事に帰国して結婚したんだから、私の事は、お母様と呼んで欲しいわ」

「はい。お母様」

オフエーリアはすぐ笑顔になった。オフエーリアの栗毛の長い巻き毛は彼女の笑顔を一層引き立てている。

そんな二人に、別室にいる中年の男が声を掛ける。

「キリエラ。料理はまだなのか？」

「あなた。ちょっと待って。おば様、お母様と呼ばれて、今度はキリエラになったわ」

キリエラは、オフエーリアに言うと、盛り付けた料理を自分の夫がいるリビングへ運ぶ。

オフエーリアも料理を持って義母であるキリエラの後に続いた。

二人が移動したリビングは、広さがあるのはもちろんの事、漆喰の壁には絵画が飾られ天井にはシャンデリアがあり、貴族階級ならではの豪華さがある。

キリエラは料理をテーブルに置いて席に着く。

オフェーリアも料理をテーブルに置いて席に着く。

「料理などは使用人に任せておけばよいのだ」

偉そうに言う中年の男はキリエラの夫コトツク卿のようだ。

「でも、たまには愛する人に手料理を作ってあげたいじゃない。ね

え。オフェーリア」

「ええ。お母様」

オフェーリアは頬を赤らめて返事をする。

第30話：コトツク家2

「ラーグも愛する人の手料理を食いたいでしょ？」

「はい。母上」

ラーグは照れながら母親に返事をしてから、隣にいるオフェーリアを見て小声で言った。

「塩辛くないよな？」

「昔は塩辛かったけど、今はそうじゃないわ。昔の話を持ち出すなんて」

オフェーリアはテーブルの下足を動かして、ラーグの足を踏む。ラーグは頬を膨らませて踏まれた足の痛みに堪える。

それを見ていたラーグの妹セーラが含み笑いをした。

キリエラは仕返しついでに、夫に冗談半分の小言を言い続けている。

夫はキリエラの口うるささに負けて顔を歪めた。

「分かった、分かった。私は待ち過ぎてお腹が減って仕方が無い。先に食べるからな」

夫は待ちきれなくて料理に手を伸ばす。

これを切っ掛けに家族団らんの食事が始まった。

ここはコトツク邸。コトツク地方を統べるコトツク家の長おさが住む屋敷である。

現在の長はキリエラ。姉妹おさしか生まれなかったため、長女のキリエラは婿をとって結婚したのだ。

婿はもちろんラーグの父で、現在はコトツク卿と呼ばれ、知事として地方政策に腕を振るっている。

約1年前の戦争終結後、ラーグは戦いで負った致命傷は完治したものの心の傷までは修復できず、自分の部屋に引き籠もって絶望と共に暮らしていたが、オフェーリアの愛ともいえる献身的な介抱により立ち直り、二十一歳の今は、知事である父の後を継ぐべく地方

政府の職に就きながら、オフエーリアと幸せな新婚生活を送っていた。

コトツク邸の屋敷には、至る所に壺や毛皮などローラン国王から戦いの功績を称えられて贈られた数々の褒美の品が置かれている。軍人だった頃の父コトツク卿への褒美もあるが、大半がローラン国の不利といわれたアルランドの戦いを勝利に導いたラーグへの褒美である。

そんなコトツク家の幸せを焼き尽くした全焼の悲劇は、食事が半ば進んだ頃に起きた。

オフエーリアがラーグのグラスにワインを注いでいる時に、屋敷のどこかで大きな爆発音がしたのである。

第31話：コトツク家3

「父上。今のは？」

ラーグはグラスをテーブルの上に置く。

家族全員が硬直し、使用人が確認のためにリビングを出て行く。

コトツク卿は口元を拭くと立ち上がって壁に掛けてあった剣を掴んだ。

「今の音はなんだ？」

コトツク卿は使用人に聞くが、同じ部屋にいる使用人に分かるはずもなく、誰もが動揺していて答えられない。

「あなた」

「お前はどこかに隠れていなさい」

コトツク卿は駆け寄りキリエラを遠ざける。

オフエーリアも剣を持っているラーグの腕に掴まる。

「ラーグ」

「オフエーリア。母上の所に」

オフエーリアがセーラと手を繋いでキリエラの所へ行ったのを見届けてから、ラーグは父コトツク卿の隣に並んだ。

「父上。ここは私に任せて母上と共にいて下さい」

「何を言う。お前一人に任せねばならぬほど、私の剣の腕は衰えておらぬ」

コトツク卿も軍人だった頃の記憶が蘇り、剣を持つ手に力が籠る。その時、通路から誰かの悲鳴が聞こえた。

ラーグとコトツク卿は、キリエラたちを残して、同時にリビングを出た。

通路はきな臭い煙が漂っている。左右を見て悲鳴の出所を探すと、右の通路の先で使用人が倒れている。

コトツク卿とラーグは小走りで駆け寄る。

使用人は、うつ伏せになって倒れ、床には使用人の血が流れて広

がつている。

コトツク卿が倒れている使用人に呼びかけた。

「しっかりしろ。誰にやられた？」

使用人からの返事はない。

ラーグは使用人の首の脈に触れる。

「父上……」

ラーグは首を横に振って、コトツク卿に使用人の絶命を伝えた。

第32話：コトツク家4

コトツク卿は周りを見回す。

「我が屋敷を攻撃したのは誰だ？」

民の暮らしをよくするために、いくつもの地方政策を打ち出してきたが、そのたびに反対意見も多く、逆恨みされる事も少なくはない。コトツク卿の頭の中に反対派閥の面々がつぎつぎと現れる。

ラーグは先に進みガラスが割れた窓を発見する。

「父上。足跡が外に向っていています。どうやらここから逃げたようです」

コトツク卿は、壁に手をつけて窓の外をうかがうが、夜の闇のせいでよく見えない。コトツク卿は、剣にある魔法器に触れ土魔法を発動して窓の外を調べた。土魔法を使うコトツク卿の脳裏に、地面の様子が3Dの立体画像となって浮かぶ。

地面にあるのは、雑草や木の幹、放射状に伸びている根、小動物や人間の足跡。ラーグが覗いている割れた窓ガラスの真下には、飛び降りたあと着地して逃げたと思われる足跡が複数あり、足跡は外へ向かって伸びていたが、外へは出ておらず途中で途絶えている。

「まだ、屋敷のどこかに潜んでいるのかもしれない。いいか、警戒を怠るな！」

使用人は、コトツク卿の指示でそれぞれの持ち場へ移動する。

その時、新たな爆発音と共に女性の悲鳴が響き渡った。悲鳴はリビングからだ。

「キリエラ！」

「オフエーリア！」

二人は駆け戻ってリビングに入る。最初に目に入ったのは、床に倒れている血塗れの使用人の死体。その先で黒尽くめの剣士が妹セーラの首を掴んで持ち上げている。

セーラの手は力なく垂れ下がり、口からは泡を吹いている。

「セーラ！」

愛娘の名を叫ぶコトツク卿。

妻オフェーリアは、既に首を切り落とされ床に横たわっている。

「オフェーリア！」

ラーグも叫ぶ。

キリエラは腹に剣が刺さった状態で床に座り込んでいた。

「キリエラ！」

コトツク卿は自分の妻の名も叫ぶ。

第33話：コトツク家5

キリエラが座り込んでいる上の天井は抜け落ち、破片が床に散らばっている。

黒尽くめの剣士は突然天井から現れ、先にセーラを人質にとつたため、キリエラは魔法防御も攻撃もできずに相手の剣を腹に受けてしまったのだ。

リビングにいる黒尽くめの剣士は全部で五人。掴んでいたセーラを投げ捨てると、五人全員が剣を構えた。五人の剣にある魔法器が作動し魔力を帯びて剣全体が淡く光る。

それを見たコトツク卿の剣も淡い光を帯びる。

「おのれ魔法剣士！ 許さぬ！」

その言葉と同時に、一斉に炎の帯と水流と稲妻と氷の刃やいばがリビングの中を飛び交った。

コトツク卿は最初に氷の魔法で盾を作り、攻撃魔法を防ぎながら突き進み、炎の魔法を使う魔法剣士をしとめる。次に稲妻を発動して水を使う魔法剣士を感電死させる。

ラーグは父コトツク卿を背にして戦い、黒尽くめの魔法剣士が投げる稲妻を避け、濡れた床に流れる電流をもジャンプでかわして稲妻を投げる魔法剣士に駆け寄ると、胸の急所を刺して倒した。次の相手は氷使いの魔法剣士。刃やいばとなって飛んでくる氷の温度は低く、ヘタに触れれば自分の身も凍ってしまう。ラーグは氷使いと何回もすれ違い剣を打ち合わせ、氷魔法の影響を受けて自分の剣を凍らせながら戦う。

コトツク卿は二人の間に割って入り、息子のラーグを庇って氷使いの刃を受けて弾き返した。

「ラーグ。大丈夫か？」

「まだ大丈夫です」

今のラーグは軍人だった頃と違い、数人と戦っただけで息を切ら

している。

そして後方にいた五人目の魔法剣士、重力使いがラーグたちに重力魔法を投げて言う。

「コトツク卿は、数少ない複数属性を使いこなす魔法剣士のようなが、その息子は全くと言っていいほど魔法が使えるようだ」

氷使いがコトツク卿の火の魔法を跳ね返ししながら言う。

「息子は、アルランドの英雄と聞いていたが、噂だけか」

戦いは既に三人を倒しているラーグたちが有利に見えていたが、急にコトツク卿は床に片膝をつけた。重力魔法を受けてしまったのだ。

ラーグは、飛んでくる氷の刃を受け流しながらコトツク卿を見る。

「父上！」

「来るな！ ラーグ。お前も重力魔法に巻き込まれる」

ラーグの動きが早くなる。

「うおおお！」

ラーグは、飛んでくる氷魔法を避けたり剣で受けたりしながら進み、氷の魔法使いの首を刺して倒した。

第34話：コトツク家6

コトツク卿は床に手をついて口から血を吐いている。重力の加重により内臓が潰れたのだ。

「父上。今、お助けします」

「来てはならぬ。重力魔法を受けたら、お前の体も潰される」

ラーグは俊足で移動して重力使いと剣を交える。

「よくも父上を！」

「くつ。動きが早過ぎる。魔法の発動が間に合わん。これが英雄と呼ばれるお前の強さか」

ラーグの剣が重力使いの体をかすめ、破れた服の下から金色の糸で刺繍された紋章が見えた。

「それはサザーランド国の紋章！」

重力使いは手で紋章を隠すがもう遅い。

「くそっ」

重力使いは顔に焦燥感を表しながら重力魔法をラーグに投げる。

ラーグは俊敏に動いて重力魔法を交わし敵との間合いをつめていき、迫って来るラーグに恐れ慄いて動きが鈍くなった重力使いの目の前で、剣を翻して重力使いの体を縦に両断にした。重力使いの体が二つに分かれて床に倒れて動かなくなったのを確認してから、コトツク卿に駆け寄る。

「父上。しっかりして下さい！」

「私は大丈夫だ。これしきの傷、傷のうちに入らぬ」

コトツク卿は、床に剣を刺して杖の代わりにしてもたれかかり、片膝をつけて身を持ち上げていたが、重力魔法が解けてからは、ラーグが来たという安心もあり足の力が抜けて床に倒れた。

「父上！」

ラーグはコトツク卿を抱き起こすが、コトツク卿は既に言尽きていた。

「父上」

ラーグは涙を流す。コトツク卿を静かに床に横たわらせてから、
周りを見回す。

「オフエーリア。セーラ」

妻も妹も死んでいる。

第35話：コトツク家7

戦争はもう終わっているというのに、どうしてこんな事になってしまったのか。ラーグには訳が分からない。

「母上」

「……ラーグ」

ラーグの呼びかけに、キリエラは弱々しい声で答えた。キリエラはまだ生きていたのだ。

ラーグは泣きながらキリエラに駆け寄り、跪いてキリエラの腹に刺さった剣を抜こうとする。

「剣を抜いて止血します」

キリエラはラーグの腕に触れる。

「ラーグ。もう剣を抜く必要はありません」

「何を言っているのです。治癒の魔法を施せば母上は助かります。今すぐ癒しの魔法使いを呼んで」

キリエラは、助けを呼ぼうとするラーグの手を握る。

「私は、もう助かりません」

「母上。何を言うのです。そんな事はありません」

ラーグは泣きじゃくる。

キリエラは自分の左耳にあるイヤークフに触れた。

「この耳にある鍵が、私の死を悟り、次なる継承者を求めているのです」

「イヤです。母上。死ぬなどと言わないで下さい」

ラーグは首を横に振る。

「ラーグ。私の話を聞いて」

「イヤです。母上。イヤだ」

「ラーグ。母の言葉を聞くのです！」

キリエラはコトツクを統べる長として、訪れる母の死を拒絶するラーグに強く言った。

ラーグはキリエラを凝視する。

キリエラは手を伸ばしてラーグの頬を伝う涙に触れ、息子を諭すために頬を撫でながら言う。

「神々は、この地に降り立った時、何人かの賢者に鍵を託しました。その一人が私たちの祖先、灰色髪の賢者コトツクです。あなたが知っているとおり、賢者コトツクが住んでいたこの地の名前にもなっています。私たちコトツクの名を持つ者は、代々その血を受け継ぎ、強大な魔力を操り、コトツクの地に暮らす民を守ってきました。今度は、あなたがその責任を担うのです」

第36話：コトツク家8

「母上。無理です。私は幼い頃から魔法が使えません。母上も、私が鍵の継承権から外されているのはご存知のはずです」

ラーグの涙は止まらずに流れ続けている。

キリエラは、尚も息子を諭すために両手でラーグの頬に触れる。

「いいえ。ラーグ。あなたも私と同じコトツクの魔法使い。コトツク家の象徴たる灰色の髪と紫の瞳がその証あかしです。私と同じ灰色の髪と紫の瞳を持つ息子。私の大切なラーグ」

キリエラの意識が薄れラーグの頬に触れていた両手が落ちた。

ラーグは、キリエラの体を揺する。

「母上。しっかりして下さい」

キリエラの意識が戻り、ラーグと視線が合ったキリエラは力の無い笑顔を見せる。

ラーグは、キリエラの体を支えながら言う。

「家の魔法器すら使えない私が、なぜ魔法が使えるのですか？魔法器に触れても魔法は発動しないというのに」

「魔法は私たちの中にあるの。それが、祖先が賢者と呼ばれる由縁。契約により神々から与えられた古いにしえの力。現にあなただって、さっき魔法を使って戦っていたでしょ」

「え！？」

「あなたの俊足。フルフォンド・コトツクが自ら発動した高温の火の魔法で己の身を焼かないように編み出したという移動魔法、瞬間移動を。気付いていなかったの？」

返事ができないラーグにキリエラは言う。

「無意識に使っていたのね」

キリエラの声が小さくなる。

「あなたは、鍵の継承権から外された訳じゃないの。あなたは賢者コトツクの血を引く者の中で、最強の火の魔法使いと呼ばれたフル

フォンドと同じだったから、もっとも高温で特殊な火を扱える魔法使いだから、類をみない強大な火の魔力があなたの負担にならないように、主人と相談をして、あなたがフルフォンドの火の魔力を使うその時まで、継承権の話は先送りにしていただけなの。本当はアerlandの英雄として帰って来た時に、鍵の継承権がある事を伝えるはずだった。でも、あなたは心身に大きな傷を負っていて」

第37話：コトツク家9

「母上。そんな過去の話、もうどうでもいいじゃないですか。今は、母上が助かる事だけを考えて下さい」

泣きじゃくるラーグの目の前で、キリエラの耳からイヤークフが落ちた。

キリエラは、床に転がったイヤークフを拾う。

「鍵が、あなたの所へ行きたかがっているわ。ラーグ」

キリエラは、ラーグの左耳にイヤークフをつける。

「母上。やめて下さい」

ラーグは、自分の左耳を触ってイヤークフを取ろうとするが、耳の溝に沿って噛ませてあるだけのイヤークフが、なぜか取れない。

「母上。どうやって取ればいいのですか？」

キリエラは、ラーグを見ているが返事をしない。

「母上？」

ラーグは、キリエラの肩を掴む。

キリエラは息絶えていた。

「母上……」

ラーグはキリエラの顔に手を置いて、何も映さなくなった瞳を閉じた。

賢者コトツクの話は子供の頃から母キリエラがお伽話のように何度か話してくれた。キリエラが火の魔法を使うのも幾度となく見ている。でもそれは料理の時だったり、庭の焚き火だったり、賢者コトツクを称える火の祭だったり、ラーグの記憶には平和な場面で火を使う母の姿しかない。そんな母からなんの前振りもなく「コトツクの地に住む民を守れ」と鍵を託されても、鍵の継承権から外されて育ったラーグには今後の行動を決定する継承者としての知識がなく、どうする事もできない。そもそもラーグは魔法を使えないのだ。これからどうすればいいのか？ ラーグは助けを求めて無意識に

オフエーリアを見てしまう。今まではオフエーリアの助けがあった。首と胴体が離れ息をしていないと分かっている、オフエーリアがとても恋しい。ラーグは重い体を無理矢理に起こして、ふら付きながら立ち上がった。貧血と目眩で揺れ動くオフエーリアを目指して歩いて行く。

第38話：コトツク家10

「オフエーリア」

幼なじみで美しかったオフエーリア。でも今は、床に広がる血の海の上で首と胴体が切り離されて無惨な姿で横たわっている。

「愛してる。オフエーリア」

ラーグは死体となったオフエーリアに全ての愛を捧げながら跪く。せめて頭を胴体に戻そうと思い、床に転がっているオフエーリアの頭を拾う。だが、ラーグは自らの意思によりオフエーリアの頭を手放してしまった。

オフエーリアの頭はゴトリと音を立てて床に落ち、転がって顔をラーグに向けた。多量の血を吸って赤黒くなってしまった巻き毛。それに覆われた顔は焼けただれて左の皮膚と肉が剥がれ落ち、左頬の骨が見えている。唇も左半分が無く歯と歯茎が剥き出しになっている。当然薄皮である両目の目蓋も焼けてしまつて無い。剥き出しの気味の悪い目玉がラーグを見て「見捨てないで。助けて！」と訴えているように見える。

「オフエーリア」

ラーグは妻の名を呼ぶが、気持ちが悪くて近づけずオフエーリアの頭から後退りをする。同時にラーグの脳裏に蘇る戦争の記憶。魔法攻撃を受けて飛び散る肉片。惨殺される兵士。ウジが湧いた死体目を背けても鼻から入ってくる腐敗臭。その後すぐにラーグは床に吐瀉物をぶちまけた。胃液の酸で喉が焼けて咽ながら、もう変わり果てた妻を見たくないとい自分の顔を両手で覆う。

「なぜだ？ 戦争は1年前に終わったというのに」

ラーグの叫び声に反応して、新たな声がする。

「今声がしたぞ」

天井から男の声がする。

ラーグは天井を見上げる。

天井を踏み歩く音がして、抜けた天井の穴から黒い覆面をした剣士が覗いて下をうかがう。

「いた。一人見つけたぞ」

黒尽くめの剣士は、仲間を呼ぶと天井の穴から飛び降りた。

続いて黒尽くめの剣士が次々と降りてくる。手にある剣には全て魔法器がついている。

第39話：コトツク家11

魔法剣士は床に座り込んでいるラーグを取り囲んだ。

「戦意は感じないが、油断はするな」

魔法剣士の一人がラーグの前に立つ。

「鍵はどこだ？」

ラーグは返事をしない。憔悴しきった表情を魔法剣士に向けるのみ。

魔法剣士はラーグの襟首を掴んで持ち上げる。

「おい。答える！」

ラーグは、その剣士の腕を掴んだ。

「お前たちも、サザーランド国の魔法剣士なのか？」

魔法剣士は、ラーグの無様な姿を見て笑う。

「だったらどうだというんだ？ ローラン国の英雄ラーグ殿」

周りを囲んでいる魔法剣士もラーグを見て笑う。

ラーグの表情が怒りに変わった。

「なぜ妻を、家族を殺した？ 戦争の恨みなら、元軍人である私に向ければいいだろ」

笑いは更に大きくなる。

「英雄殿は、勘違いをしておられる。戦争は鍵を得るためのもの。

鍵が手に入るならコトツク家の人間など、どうでもいい。大人しく我がサザーランド国王に鍵を捧げていれば多くの命を失わずに済んだのだ。貴殿の家族もな」

魔法剣士は剣をラーグに向けた。

「これで分かっただろ。さあ、大人しく鍵を渡せ！」

ラーグは立ち上がる。小刻みに震えるほど全身に力を入れて大きく息を吸い込んでから、体内で渦を巻いている怒りと悲しみと憎しみの全てを吐き出して叫んだ。

「殺してやる！」

同時に、ラーグの全身が淡く輝き出す。

後方にいる魔法剣士が言う。

「魔法が発動しています」

黒尽くめの魔法剣士は条件反射で身構える。剣についている魔法器も作動して剣が淡い光に包まれる。

「どこで魔法が発動している？」

「その者からです」

後方の魔法使いはラーグを示す。

第40話：コトツク家12

前衛の魔法剣士がラーグを調べるが、体のどこにも魔法器が見当たらない。

「こいつは魔法器どころか何も持つてはいない。魔法使いは他にいるはずだ。探せ！」

「いいえ。間違いなく、その者から魔法が発動しています」

「なんだと！」

魔法剣士全員がラーグに注目した時、ラーグを包んでいた光が強い輝きに変わる。

「お前ら。全員、殺してやる！！」

ラーグの叫び声のあと、体を包む強い輝きは太陽光並みの高熱エネルギーとなり一瞬にして屋敷全体に広がった。

ラーグの目の前にいた魔法剣士の体に火がつき、見る見るうちに燃えて灰となって散ってゆく。他の魔法剣士も、その後ろで横たわっている妹の亡骸も灰になっていく。父も母も、ラーグの妻オフェーリアも。

オフェーリアの体が全て灰になり、炎の渦に舞い上がって散った頃、憎しみに身を任せていたラーグは我に返った。

炎は渦を巻いてラーグを囲み今もお燃え盛っている。

ラーグは光り輝いている自分の体に気付く。魔力を注ぎ火に勢いをつけているのは自分なのだ。強大な魔力を操る爽快感に胸を躍らせ、殺戮と破壊はこんなにも楽しいものなのかと、心の底から湧き上がる悦楽をラーグは認めたくなくて必死に否定する。

「ダメだ。火を消せ！ 消すんだ！」

左耳を押さえて鍵に訴えるが、火は衰えるどころか勢いを増すばかり。自分が今している恐ろしい惨劇を目の当たりにしてラーグは叫び続ける。

「消えろ。頼むから、消えてくれ！」

第41話：コトツク家13

またラーグの脳裏に戦争の記憶が蘇る。

ローラン国の民を守るという使命を胸に向かった戦場。最初は死んでいる兵士を見て、早く戦いを終わらせて家に帰りたいと思い必死に戦った。次に助けを請う兵士を助けても、彼らはまた敵となつて目の前に現れる恐怖を知った。そして戦いを続けていくうちに、殺されるより殺した方がマシだと思うようになり、剣を振り下ろす前に生じる躊躇いは微塵も感じなくなった。

敵を殺す事は手柄を立てる事。副隊長になる昇級の喜びを知り、上を目指して更に戦い続けた。周りから副隊長と呼ばれ求められ答えていくうちに、神になったような気分になり優越感にも浸った。

戦いに明け暮れ邁進していたあの頃は、ラーグ自身にとってどれほど甘美で心地良い時間だったか。

その恐ろしくもおぞましい感情は、アルランドの戦いの時にラーグの中に生まれた。ラーグは親友ジェイローを亡くしてやっと自身の愚かさに気づいたが、時既に遅く、アルランドの街全と敵味方を無差別に燃やし尽くしてしまったラーグに国王は英雄の称号と褒美を送り、人々はラーグを見るたびに賞賛を口にする。ラーグにとつては、どんなに祝福が籠もった言葉でも、己を呪う呪詛としか思えず、罪悪感と死の恐怖に苛まれて上げ下す毎日が続いた。その苦しみから救ってくれたのはオフエーリアだったのに。オフエーリアも今は灰になってしまい姿形は残っていない。

「イヤだ。やめてくれ。こんな思いをするのは、もう沢山だ。イヤだあー」

ラーグは体を輝かせながら、この身から放出される魔力を拒絶したい一心で叫んだ。しかし、ラーグの思いに反して体内から発動する火の魔法は魔力を増すばかりだった。

第42話：湖の畔3

ラグは気がついた。気がつくといつも暗闇の中にいるのだが、今は既に目蓋に光を感じている。酒を飲まなくなっただけなん日経ったただろうか。もう二日酔いで頭が痛む事もない。ラグは目を開けた。

ちょうど地平線に太陽が昇り湖面を照らしていて、湖面はダイヤを散りばめたようにキラキラと輝いている。

その輝きの中にオーカスは立っていた。オーカスは相変わらずきちんとした身形で湖面を眺めている。ラグが起き上がると、オーカスは振り返りラグに視線を移した。

「魔法通信でローラン城と連絡を取り、名も無き土地を迂回してリ―地方へ向う事を伝えました。ローラン国は相変わらず平穩のようです。昨夜は、いつもより酷くうなされていたようですが、大丈夫ですか？」

ラグはオーカスの言葉を無視して、手早く身支度を終える。

オーカスは、なかなか心を開かないラグの態度を見て、ラグに気付かれないように小さな溜め息をついた。

ラグは黙々と動き、焚き火跡へ行き何かをするが、どうする事もできないのでオーカスと呼ぶ。

「おい。火をつけてくれないか。昨夜話したから分かっていると思うが、俺は魔法が使えん」

「あ、朝食がまだでしたね。今火をつけますね」

オーカスはラグの隣に腰を下ろして、剣の魔法器を使って昨夜の燃え残りの木に火をつけた。

朝食は早朝にオーカスが雷の魔法を使つて獲つた魚。本当は昨夜のうちに魚を獲るつもりだったが、旅の疲れもありオーカスは早々に寝てしまったので、今朝は早めに起きて湖で魚を獲ってきたのだ。その時のラグはまだ眠っていたので、オーカスの今朝の行動には気づいていない。

第43話：湖の畔4

ラグは焚き火の前に来たオーカスの横顔を見た。長い睫毛にバニラ色の肌。薄めの唇はほんのりと淡い桜色をしている。少年とも少女ともいえる中性的な顔のつくりは、オーカスがまだ十代であるという証なのだ。ただし、今日に限って目が充血していた。

「俺のせいで眠れなかったのか？」

「いえ。睡眠はきちんと取りましたよ」

ラグは焼けた魚を一度受け取ってからオーカスに返した。

「お前が先に食べる」

「いいですよ」

「いいから、食べ！」

オーカスが断ると、ラグはオーカスの前に焼けた魚を置いた。

ラグは立ち上がって旅支度を始める。

「ラグ殿は食べないのですか？」

「あとで食べる。残しておいてくれ」

そう言ってラグは、オーカスが食事をしているうちに、自分の分とオーカスの分の旅支度をすませてしまった。

一仕事を終えて戻ってきたラグに、オーカスは焼けた魚を渡す。

「ラグ殿。私の分まで旅支度をして頂き有難うございます」

「気にするな」

ラグはぶつきら棒に返事をする。と地竜に跨った。

オーカスも急いで地竜に跨りながら聞く。

「ラグ殿。もう出発するのですか？ 魚は食べないのですか？」

「今から食べる。寝るとき以外、休まず移動して北へ向うんだろ？」

ラグは地竜を歩かせながら焼けた魚を頬張った。

不言実行という言葉がある。ラグは黙々と動いて自身の旅支度はもちろん、オーカスの旅支度もする。剣の腕が立つとはいえ魔法使い特有の華奢な体格をしているオーカスにとって、ラグが率先して

肉体労働をしてくれるのは有り難い限りなのだが、ご機嫌とりというより鍵の話題から逃げているように思えて、オーカスは縮まらないラグとの距離に疲れを感じてまた小さなため息をついた。

第44話：リー地方1

ラグとオーカスは湖を後にした。行き先はリー地方。

オーカスが昨夜ラグに説明したとおり旅は約二週間続き、その間、言葉数が少なく物事に無関心なラグの様子は相変わらずで、ラグの左耳にあるイヤークフが鍵なのかどうか？ そうだとしてもなぜラグが鍵を持っているのか？ 事の真相を探るために、オーカスは旅をしながら静かな趣でラグの様子を注意深く観察していた。

ラグとオーカスは目立つ事を恐れ、小さな田舎町を選んで食料を調達しながら名も無き土地の東側を通り迂回して北を目指して移動していた。

リー地方に入ってから農耕が盛んな土地というだけあって田や畑が目につくようになってきた。

オーカスは、歩を進める地竜の上でバランスをとりながら地図を広げる。

「もうここはリー地方のようです」

ラグは田畑の先にある地平線を眺めながら言う。

「田や畑ばかりだ」

「古代文字で書かれた文献によると、賢者リーは再生と錬金の魔力により、何も無い大地からあらゆる物を創造する事ができたそうです。リー地方の農耕が盛んなのは、賢者リーの魔力が今も大地に残っているからだといわれています。戦争になる前は、ローラン国にも農作物を出荷をしていたんですよ」

オーカスは指をさす。

「地図によると、リー家の屋敷はここから更に北にあるので、あっちのようです」

地竜に行き先を指示して頭の向きを変える。

ラグはオーカスについて行きながら言う。

「畑、田んぼ、畑、田んぼ。似たような景色ばかりなのに、よく地

「図一枚で判るな」

オーカスはにこにこしながら言った。

「私もこの土地は初めてなので、リー家の屋敷にたどり着く自信はないんですよ」

「はあ！？ お前、分かって進んでいるんじゃないのか。地図を持っているから分かって進んでいるもんだと思っていたぞ」

オーカスとラグのポケツツコミを、地竜は真面目な表情で聞いている。

第45話：リー地方2

「リーの土地は初めてですからね。地図を見ながら進んでいるのですが、こつも景色が同じだと、私もどこで曲がつていいのか判断が難しくて」

のん気なオーカスに苛立ちを覚えたラグは周りを見ながら言う。

「こついう時はだな。すれ違った人に道を尋ねればいいんだ」

ラグは早速農作業をする人を見つけて声を掛けた。

「手を止めさせてすまんが、リー家の屋敷へ行きたい。どう行けばいい？」

ラグに声を掛けられた農民はちょうど畑でとれた野菜を荷台に載せている最中だった。地竜に跨り近づいてきたラグとオーカスを見ながら作業を続けていたが、ラグの言葉を聞いたとたん農民の顔色が見る見るうちに青ざめていく。

「あんたら。リー家の屋敷に近づいたらいかん。もう何人もがあとこで行方不明になつとる。リー家の屋敷には、魔物が住んどるつちゆう噂だ」

オーカスはユーフォリアに生息している生物を思い浮かべながら聞く。

「魔物つて大蛇ですか？ それとも竜の類ですか？」

「生きて戻ってきた者がおらんで、魔物がなんなのか知つとる者はおらん。確か半年位前だよ。魔物が出るようになったのは。リー家が襲われて皆殺しになつてからだ」

それを聞いて今度はラグの顔色が変わり、ラグは農民に詰め寄るようにして聞く。

「そのリー家の屋敷はどこだ？」

農民は手を横に振りながら言う。

「あんたら。リー家の屋敷に行くつもりなら、やめときな。命がいくつあつても足りやしない」

リー家の場所を教えない農民に対して、いつも無関心なラグが珍しく感情を露わにして気を荒くしている。

「つべこべ言つてないで、さっさと答える。俺は、リー家の屋敷はどこだ？ と聞いているんだ！」

ラグの言葉に農民は怯えた表情をする。

「ひええ。この旦那も魔物みたいに怖いのお」

農民がラグを怖がって身を縮めて言わないので、オーカスは懷から銅貨を一枚出して、農民に見せた。

「怖がらせて申し訳ない。これでリー家の屋敷がどこなのか教えてくれませんか？」

第46話：リー地方3

農民はラグの顔色を見ながら、怖々とオーカスに手を差し出した。「リー家の屋敷はあっちです。暫く行けば蛻の殻になった屋敷が見えるはずです」

「有り難う。怖い思いをさせてすまなかったね」

オーカスが農民の手に銅貨を置いているうちに、ラグは地竜を走らせてオーカスより先にリー家の屋敷へ向かう。

「待って下さい。なぜそんなに急ぐのですか？」

オーカスも急いでラグを追いかけた。

農民の言つとおり、暫く地竜を走らせた先にリー家の屋敷はあった。

到着したラグは、地竜の手綱を引いて屋敷の周りを回る。

リー家は、貴族だけに屋敷はそれなりに大きく、壁や柱には細工が施された浮き彫りがある。しかし今現在は、襲われたという農民の話のとおり、屋敷の窓ガラスは割れており、庭は雑草が生い茂っていた。

その雑草の間から崩れた塀と穴が開いた屋敷の壁が見えてくると、ラグの表情が険しくなった。無意識に口から言葉が漏れる。

「ここもなのか」

追いついたオーカスがラグの横に地竜を並ばせる。

「酷い有り様ですね。賊はあそこから進入したのでしょうか？」

オーカスは壊れた塀を指さしてラグを見るが、ラグは口を横に結んで何も言わない。険しい表情を壊れた塀に向けるだけである。

ラグは暫く屋敷を眺めていたが、突然地竜の頭の向きを変えた。

「宿を探すぞ」

珍しいラグからの言葉に、オーカスも地竜の頭の向きを変えて、ラグについて行く。

「あ、はい。でも急になぜ？」

「なんで俺に聞く？ 到着したら宿に泊まると言ったのはお前じゃないか」

「そうですけど」

オーカスは急に機嫌が悪くなったラグに渋々ついて行く。

そんな二人を、屋敷の中から静かに見ている白い影があった。

白い影はラグとオーカスの腰にある剣を見て言う。

「また来たのね」

声からすると、女性のような声だ。

白い影は庭に出ると雑草に隠れながら崩れた塀まで移動して、去って行く二人を見送った。

第47話：白い影1

焼けただれて骨が見えている顔、以前は美しかったオフエーリア。結婚式の時、神の御前で永遠の愛を彼女に捧げると誓ったのに、ラーグはそのオフエーリアから逃げていた。

ラーグが今走っている先に光は無い。黒い闇が続くのみである。「なぜ私は逃げているのだ。私はオフエーリアを愛しているのに」ラーグは叫んでから逃げたがっている自分の足の動きを止めた。振り返って追いかけて来るオフエーリアを待つ。

「オフエーリア。もう私は逃げない」

「ラーグ」

オフエーリアはラーグの胸に飛び込んだ。

ラーグは冷たいオフエーリアの体を抱き締める。

「オフエーリア。愛してる」

「ラーグ。私も愛してる」

オフエーリアの顔から滴り落ちている血がラーグの服につく。それでもラーグがオフエーリアを抱き締めていると、今度は地面から手が伸びてきてラーグの足や手を掴んだ。

「副隊長。見捨てないで下さい」

「私たちを置いて行かないで下さい」

無数に伸びてきた手がラーグの体を掴む。手もとても冷たい。成仏できずに苦しむ死者の思いがラーグに伝わるが、その思いは戦いの記憶となってラーグの心を侵食し、忘れたくても忘れられない戦いの惨劇の恐怖に身の毛がよだつのを我慢して、ラーグはオフエーリアを抱きながら言った。

「ああ。置いて行ったりはしない。私はもう恐れない。ずっと皆と一緒にいる」

ラーグの言葉のあと、地面は冷たい沼に変わり、ラーグの体が沼に沈んでいく。

沼から昇る腐敗臭は吐き気がするほど気持ちが悪い。ラーグはオフェーリアの体を強く抱き締めて、顔をオフェーリアの肩に押し当てた。今もなおオフェーリアから仄かにコロンの香りがする。その匂いを吸い込みながら、ラーグは沼の中へと沈んでいった。

第48話：白い影2

ラーグは思う。これで楽になれる。と。

ラーグの体は冷たい沼の中にどんどん沈み首まで入った時、闇の中に白い影が現れた。

「ラーグ！」

力強い男の声はラーグに届くが、ラーグはその声の主を見ようともしない。

「ラーグ。何をやっている」

白い影は沼の中に手を入れてラーグの腕を掴む。

「ラーグ。それはオフエーリアでも、君の部下でもない」

白い影はラーグを地面から引き上げた。

ラーグの腕の中にいたオフエーリアは、ラーグの手から滑り落ち、沼の中で悲痛の叫び声をあげる。

ラーグは白い影の手を払いのけて抵抗する。

「何を言う。すぐそこにオフエーリアがいるのに」

沼を見ると、オフエーリアがラーグの名を呼んで泣き叫び、その周りを無数の手がうごめいて副隊長と呼んでいる。

「私は皆の所に行かなければならないんだ。手を放してくれ」

白い影はラーグを上へ引き上げながら言った。

「あれはオフエーリアでも君の部下でもない。よく見る。君にはその能力があるはずだ。邪悪なるものを退ける神聖な火の鍵の継承者としての能力が」

その言葉のあと、ラーグを掴んでいた白い影は急に広がり、周りの闇を消して光に変えていく。

沼の中では、オフエーリアと部下たちが光に晒され、ラーグを呼んでいた声が光を恐れる畏怖の声に変わり、オフエーリアの姿は溶け出して、ドロの体を持つ魔物へと変貌する。

白い影の言った事は真実だったのだ。

ラーグは自分の腕を掴んでいる白い影を見た。

「あなたは、一体……」

ラーグは見るが、そこに腕を掴んでいた白い影はなかった。ラーグは光を掻き分けるようにして進み白い影を探す。

「どこにいますか？」

立っているとも、浮いているとも分からない光の中。泳ぐようにして、ラーグは白い影を探し回った。

第49話：リー地方の宿屋1

気がついてすぐラグは目蓋に光を感じて目を開けた。

やはり窓際にはきちんと身形を整えたオーカスがいて外の景色を眺めている。

ラグが起き上がると、オーカスは外の景色からラグに視線を移す。だが、今日はいつもの朝と違っていた。

オーカスが口を開く前に、ラグが口を開いたのだ。

「おはよう。昨夜はよく眠れたか？」

ラグは眠そうな表情をオーカスに向け、窓から入ってくる光に目を細めながら大きな欠伸をした。昨日のラグは、リー家の屋敷を見てからかなり機嫌が悪かったのに、今朝は至って穏やかである。どういいう心境の変化だろうか？

オーカスは、ラグの変わり様に驚いて、今のラグがどういいう状態なのか分析をするためにラグを凝視してしまい、ラグに返事をするのを忘れてしまっている。

「俺は眠れたかと聞いたんだが？」

「あ、はい。よく眠りました。途中、ラグ殿のうなされ声で眼が覚めましたが、眠れたと思います」

オーカスは、意外なラグの態度に驚いているだろう自分の表情を隠すために、急いで笑顔を作った。

「今朝も魔法通信でローラン城に連絡を取りました。リー家の屋敷の状態を伝えたところ、仕方が無いので次の鍵の継承者の所へ移動してもよいとの事です」

昨夜もラグはうなされていたのだが、突然の変化にオーカスはラグへの心配を忘れている。

ラグは支度をしながら言った。

「そうか。魔法が使えない俺のお守りをさせて悪いな」

第50話：リー地方の宿屋2

オーカスは嬉しくなつてラグの隣に並び、衣類を手渡したりして、ラグの支度を手伝う。

「私は何人もの部下を束ねる隊長ですから、一人の面倒をみるくらい、どうって事ありません」

「そういえば、お前は現役の隊長だったな。俺より小さくて筋肉もそれほどないのに」

ラグはオーカスの頭に手を置く。

「十七歳で、複数属性の魔法を使いこなす。もしかするとシーライト軍最強の魔法使いになれるかもしれん」

「なれるかもじゃなくて、私はシーライト軍最強の魔法使いなんです。そんな訳ないか」

オーカスは言ってから笑うと、ラグも釣られて小さく笑った。初めて見たラグの笑顔。オーカスの驚きは、その後も暫く続いた。

昨日のラグはリー家の屋敷を見てから機嫌が悪く、宿に着いてからは殆ど話さず考え込み、オーカスは更に近寄りがなくなったラグを扱いかねていたが、朝は一転して機嫌の良いラグの態度が嬉しくて、オーカスは軽いステップを踏みながらラグについて回っている。支度を終えたラグとオーカスは、宿の主人に宿代を支払うと外に出た。

宿の近くには市場があり、宿の前の通りを店の主人や行商人など仕入れ目的の人々が行き来している。

オーカスは地竜の世話をしていた少年に銅貨を渡すと地竜に跨った。

ラグも地竜に跨る。そしてまた、ラグが先に口を開いた。

「すぐ近くに飯屋がある。そこで朝食を済ませたら、またリー家の屋敷に行くぞ」

「え!？」

第51話：リー家の屋敷1

本日は、ラグからの発言が多い。

オーカスは、またリーの屋敷に行くと言っていて驚いた表情をする。

「リー家の屋敷は、誰も住んでいないので行っても無駄だと思いますよ。ローラン城の指示通り、次の鍵の継承者の所へ行きましょう。そのほうが確実です」

もう驚きを隠すための作り笑顔はしない。手綱を引いてオーカスは地竜を歩かせる。

ラグも地竜を歩かせながら言う。

「リー家の屋敷に出るといふ魔物が何か知っておきたいんだ」

「どうして魔物にこだわるのですか？ それに急に隊長みたいに仕切りだして」

オーカスは地竜を操りながら膨れっ面で言うが、ラグの返事が無いのでまた無視なのかと思いラグを見る。

ラグは手綱を握り黙って前を見ている。オーカスの予想どおり、いつもの無口なラグに戻ってしまった。

その後、ラグとオーカスは近くの飯屋で一緒に朝食をとるが、その時もオーカスとラグの会話は無く、ラグから言葉があったのは食事が終わってから「行くぞ」の一言だけだった。

ラグは店を出て行く。

「あ、はい」

突然のラグからの言葉にオーカスは遅れ気味の返事をして、ラグを追いかけるようにして店を出た。

ラグとオーカスは地竜に乗りリー家へ向かう。

やはり二人の間に会話は無く、二匹の地竜の土を踏む足音だけをしている。

オーカスはつまらなさそうな表情をして地竜の背で揺れていたが、リー家の屋敷が見えた時に急に地竜が嘶いいて立ち止まった。

第52話：リー家の屋敷2

オーカスは、バランスを崩して落ちそうになり、とっさに体を前のめりにして地竜の鞍に掴まった。声を掛けても地竜が言う事を聞かないため、オーカスは地竜から降りた。

隣を見れば、ラグの地竜も立ち止まって歩こうとしない。上ではラグが地竜の尻を叩いて前へ進ませようとしている。

「なぜ止まる？ さあ、行くんだ」

オーカスは地竜の首を撫ぜた。

「どうして歩かないのですか？」

「くるるん。くるるん」

地竜はオーカスの言葉に反応して鳴くが、オーカスが手綱を引っ張っても前に進もうとしない。

ラグはアメシスト色の目をリー家の屋敷に向けて言う。

「きっと、あの屋敷に昨日いなかった魔物とやらが来ているんだ。

こいつらはそれを感じ取って進もうとしないんだろう」

ラグは地竜から降りた。

「仕方無い。歩いて行くか」

なんの迷いも無く道を進むラグをオーカスは追いかける。

「ちよつと待つて下さい。私は、シーライト將軍から、鍵の継承者の護衛を仰せつかっているのです。一刻も早く次の鍵の継承者の所へ行かなければならない身で、魔物に関わっている暇はないのです」

「だったら、お前一人で任務を遂行すればいいだろ。俺はお前と違って軍人でもなんでもないからな。好きにさせてもらう」

ラグはオーカスに背を向けて地竜を置いて歩いて行く。

「ラグ殿」

オーカスが呼んでも、ラグはどんどん歩いて行く。オーカスは、大きく呼吸をして息を吐いてから、ラグの左耳についているイヤークフを見ながら言った。

「仕方が無いですね」

第53話：リー家の屋敷3

オーカスは二匹の地竜の首を同時に撫でる。

「お前たち。私が迎えに来るまで、ここでいい子にしていして下さいね」

「くるるー」

「ぐるぐる」

二匹の地竜の返事を聞いてから、オーカスはラグを追いかけた。

「ラグ殿。私も行きます。同行させて下さい」

「勝手にしろ」

ラグは、横目でチラリとだけオーカスを見ると前にある屋敷を見ながら歩いた。

リー家の屋敷は、田畑に囲まれている。庭には噴水があり花壇には花が咲いていただろうが、今は庭の手入れをする者はなく、背丈ほどある雑草が生い茂り、噴水は鳶が絡まっていて、溜まっている水は黒く濁っていた。

ラグは壊れた塀を跨いでリー家の敷地内に入った。

オーカスも後に続いて敷地内に踏み入る。

「これじゃあ、私たちが賊みたいですね」

そう言うオーカスの前で、ラグは剣で雑草を切り、切られて茎がささくれ立っている地面を踏んで一步一步と足を進ませている。

オーカスは、汗が滲んでいるラグの顔を見ながら言った。

「ラグ殿。こんなに生い茂った雑草を剣で刈りながら進むのは時間がかかりますので、私が魔法で雑草を一掃しましょう」

オーカスはラグの前に立って剣の魔法器に手を当てる。だが何も起こらない。

まだほんの数秒しか経っていないのに、ラグは待ちくたびれてオーカスに言った。

「お前は何をやろうとしているんだ？」

「ちょっと待って下さい。土属性の魔法は、発動に少々時間がかかるんです」

「魔法の発動は、明日になります。っていつんじゃないだろうな？」

第54話：リー家の屋敷4

ラグの冷やかしを、オーカスは気にもせずじつと雑草を見続けている。

暫くして雑草が揺れ動いた。揺れ動く雑草の背丈が低くなり、ラグの足元から雑草が土の中に飲まれていき、幅約1メートルの道が作られていく。

剥き出しの地面が道となつて屋敷まで伸びると、オーカスは意識の集中を解いて一息ついた。

「ふう。これくらいでいいかな」

ラグは感心する。

「魔法で地面を耕し、重力をかけて地面を踏み均して固くするとは、農民顔負けだな。シーライト将軍に見限られたら、ここの田畑を耕して余生を送るといい」

オーカスへの冷やかしも忘れてはいない。

「私の余生を勝手に決めないで下さい。さあ、中へ入りますよ。私はラグ殿の魔物見物を早く終わらせて、次の鍵の継承者の所へ行きたいのですから」

オーカスはラグに腹を立てながらラグより先に歩いて割れた窓から邸内に入った。

邸内は思ったほど汚れておらず、家具などは片付けられているものの、リー家の人々が暮らしていた生活感がまだ残っている。

オーカスは床の埃に足跡を残しながら周りを見て歩く。

「魔物が出ると聞いていたので、屋敷の中は荒れ果てていると思いました、思ったより綺麗ですね」

「襲われて半年しか経ってないし、魔物が出るって事で人が近寄らないからだろう」

ラグも部屋などを覗きながら屋敷の奥へと入って行く。

オーカスは廊下の途中で倒れている白骨化した死体に近づく。

第55話：リー家の屋敷5

「他の死体と同じ服を着ているところを見ると、屋敷の使用人でしょうか？」

「だろうな」

ラグは死体を避けて更に奥へと進む。

オーカスは大きな扉を見つけて駆け寄る。

「ここはリビングでしょうか？」

扉を押して中に入って行く。

ラグも後続き、中にあるテーブルとその上にある皿を見ながら言う。

「みたいだな」

オーカスは身を屈めてテーブルの下を覗く。

「ここにも死体が」

大きなテーブルの下に白骨化した死体がある。

ラグもテーブルの下を覗き見る。

「それは子供だな」

「ドレスを着ているので、きっと女の子ですね」

オーカスはラグを見るが、ラグは答えない。それどころか、ラグの顔色が青褪めている。

「ラグ殿。どうしたのです？ 顔が真っ青ですよ」

ラグは、胸を大きく動かしてゆっくりと呼吸をする。

「大丈夫だ。俺の事は気にするな」

更にリビングの奥にある暖炉の傍には二体の子供の白骨化した死体があり、その横には大人と思われる男の死体があった。今も男の死体は剣を握っている。

オーカスは、ラグを気にしながらも男の死体に近づいた。

「高貴な服装からして、この男はリー家の者で、あの子たちの父親でしょうか？」

見れば、ラグは目に涙を浮かべている。

ラグは、涙が流れ出す前に瞳を閉じた。

「きっとこの子たちの父上だ。我が子を守るために最後まで戦ったのだろう」

ラグは静かに言った。品の良い貴族のように。

第56話：リー家の屋敷6

オーカスの頭の中で、英雄ラーグのシルエットが浮かび、目の前のラグと重なる。

「ラグ殿……」

オーカスが見守る中、ラグは瞳を開いて三回ほど瞬きをする。涙は無くなったが瞳はまだ潤んでいてアメシスト色に艶立っている。その目でラグは辺りを見回しながら言った。

「どこかにこの子たちの母上がいるはずだ。探さねば」

オーカスは記憶を巡らす。

「確か王宮書庫にあった資料によると、現在リー家の鍵の継承者は、リー家の長女で三児の母親のはずです」

「鍵の継承者が長女で母親。余りにも似過ぎている」

呟いたラグの言葉を、オーカスは聞き取れずまた聞き返す。

「え？ 今なんと？」

ラグはアメシスト色の目を見開いて、オーカスに聞こえるように少し大きめの声で言った。

「まだ母親の死体が見つかっていない。この子たちの母親を探すんだ。二手に別れて、ほかの部屋を見て回るぞ。分担したほうが一緒に回るより早いからな」

オーカスは聞き取れなかった言葉がなんだったのか知らないまま返事をする。

「そうですね。分かりました」

ラグとオーカスは、リビングを出て二手に別れた。

白い影がリビングの中に現れた。影はリビングの中を移動して廊下に出て二手に別れたラグとオーカスを交互に見る。

「やっぱり鍵を求めて来たのね。懲りもせず次から次へと。許さないわ」

白い影は、長いストレートヘアでスマートドレスを着た女性の

姿になると静かに消え去った。

第57話：リー家の屋敷7

白い影の存在に気付いていないラグとオーカスは母親を探して各部屋を見て回る。

屋敷の惨状を見る限り母親が生存している可能性は低い。だが、未だに死体が見つからないのは、生きているからではないかと、オーカスの胸中に淡い期待が過^よぎる。

ラグも必死に各部屋を見て回っていた。

「母親が、子や夫を置いて逃げるはずがない。まだこの屋敷のどこかにいるはずだ」

ラグは廊下に出て叫ぶ。

「鍵の継承者よ。俺たちは敵じゃない。助けに来た。出て来てくれ。頼む」

だが、不運にも白い影はラグの所にはいなかった。白い影はオーカスの後を追っていたのだ。

そとうは知らないオーカスは、女性の白骨化した死体を順に調べていく。

「どれも使用人の女性ばかりですね。でも、使用人の女性の死体が多いという事は、この先に……」

オーカスは、推理の是非を我が内に問いながら廊下の先を進む。そして、その奥の豪華な扉のある部屋を見つけた。

「もしかしてここが」

扉を開けると、部屋の奥に大きな肖像画がある。

描かれているのは30歳前後の女性。中国風に黒髪を結い上げ髪飾りをつけて、チャイナドレスを着て羽の扇子を左手に持ち椅子に腰かけている。

オーカスは肖像画を見上げて名を呼んだ。

「カレン・シーセン・リー。王宮書庫の資料にあった、土の鍵の継承者」

部屋の中を見る。天幕のあるベッドや大きな鏡のついた化粧台があり、奥にある部屋は衣裳部屋になっている。全て埃が被っているが、まだ格調高い趣が残っている。

第58話：リー家の屋敷8

「きっとここが三児の母親であるカレン・シーセン・リーの部屋。でも、リビングにもこの部屋にもいないとなると、彼女はどこに？」
オーカスが次の場所を探すため、部屋の出口に向かおうとして体の向きを変えた時、目の前に白い影が現れた。

白い影は長い髪を振り乱して言う。

「殺す！ 生かして帰すものか！」

オーカスは、反射的に後ろに飛び退いて腰の剣を抜いて構えた。

「お前が魔物か？」

白い影は言う。

「魔物は、死をなんとも思わず、戦いに明け暮れるお前たちのほうだ」

同時に床に小さい魔方阵がいくつも浮かび上がり、魔法陣の中心から剣と盾を持ったゾンビが次々と現れた。

オーカスは、剣を構えながら剣についている魔法器を作動させる。

「このゾンビは、土属性の魔法生物。弱点は火の魔法。ならば出でよ。炎の鳥フェニックスよ」

オーカスの剣から燃え盛るフェニックスが現れ、室内を舞ってゾンビを燃やして倒していく。しかし、現れるゾンビの数は多く、フェニックス一体で全てのゾンビを倒しきれない。

「上位の魔法生物を何体も作り出し操るとは、なんて強大な魔力だ」
オーカスは剣にも火の魔力を宿してゾンビを切り倒していく。だが、どんなに倒しても床にある魔法陣からゾンビが次々と現れるため、前に進めず白い影に近づく事ができない。

「あなたは一体何者ですか？ なぜ私を襲うのです？」

「お前が家族を殺しに来た侵入者だからだ」

第59話：リー家の屋敷9

「家族を殺しに来た！？ 違う。もう屋敷の人々は死んでしまつて今は」

オーカスはゾンビを倒しながら説明をするが、白い影は声を大きくしてオーカスの声を消してしまう。

「死んだのは、お前が殺したからだ！」

興奮した白い影の魔力により今度は壁や天井から蔓が伸びてきてオーカスの手足に巻き付く。

「わっ！」

蔓はオーカスの手足を引つ張り持ち上げてオーカスの体を壁に磔はりつけにした。

オーカスは手足に巻きついた蔓を引き千切れないものかと抵抗しながら説明を続ける。

「屋敷の人を殺したのは私ではありません。私は鍵の継承者の護衛に来たのです。カレン・シーセン・リー。これほど強大な土属性の魔力を持つあなたは、鍵の継承者のカレン様なのでしょう？」

オーカスの言葉に、白い影は更に興奮し、その魔力は屋敷全体を揺らす。

「やはりお前は鍵を求めて来たのね。絶対に許さない！」

その揺れは、別の部屋にいたラグ自身も揺らした。

「なんだ、この揺れは？ 何が起こっているんだ？ もしかしてあいつの身に何かあったのか！？」

ラグは来た道を急いで引き返す。その速さは尋常ではない。廊下の角を曲がる時に移動速度がおちて姿が見える以外は姿が擦れて見えない。

「おい、どこだ？ 返事をしろ！」

何回か叫んでいるうちに、ラグの声がオーカスに届く。

「ラグ殿。私はここです」

ラグは呼ばれて、扉が開けっ放しになっている部屋を覗いた。
「ここか？」

第60話：リー家の屋敷10

入ってすぐ大きな肖像画が目に入る。美しい女性が描かれているが、部屋の中では剣と盾を持ったゾンビが蠢き、蔓が波打って動いている。

「一体何が始まっているんだ？　おい、どこだ？」

「ラグ殿。私はここです。上を見て下さい」

オーカスに言われてラグが見上げると、オーカスは出入り口の上の壁に磔はりつけにされていた。

壁は蔓が茂りオーカスの手や足に巻き付いている。

「お前は、何をやらかしたんだ？」

「私じゃありません」

オーカスが答えているうちに、ラグの目の前に白い影が現れる。

「許しも無く、この部屋に入るな！」

白い影はラグに襲い掛かるが、ラグは白い影の手を避けて素早く移動して部屋の奥へ進む。オーカスを助ける機会をうかがうラグに今度はゾンビが襲いかかるが、ラグの動きは早く、ゾンビの剣は空振りをしてしまう。

オーカスは上から言う。

「多分、あの白い影は土の鍵の継承者です。名前は、カレン・シーセン・リー。ラグ殿。どうかあの鍵の継承者に、私たちが敵ではないと説明をして下さい」

ラグは踏み込んだ瞬間に消えるように移動して次々とゾンビを切り倒していく。

「何悠長な事を言っているんだ。お前はこの状況を見て、説明で事が済む相手かどうか判断がつかんのか？」

ラグは剣を持ってゾンビや蔓を切りまくっている。そう。ゾンビや蔓はラグの移動速度について行けないのだ。

白い影もラグを襲うが、やはりラグの動きの早さについていけない

い。白い影の怒りは更に増す。

第61話：リー家の屋敷11

「こうなれば、床を沼に変えてお前の動きを止めてやる」

白い影は床を沼地に変えた。

これでラグの足は泥に減り込み、移動速度が急に落ちたラグはゾンビに囲まれてしまう。

「くっ。足が重い」

ゾンビの間から伸びてくる蔓を払い除けるようにして剣で切り落としているラグに、白い影は沼の表面を滑るようにしてラグに近づく。

「鍵を求めるお前がいけないのだ。思い知るがよい！」

白い影がラグの首を掴もうとした瞬間、ラグの姿が消えた。

「どこへ行った？」

ラグは素早い動きでゾンビの腹を蹴り、身を翻して白い影の肩に乗り、肩を踏み台にジャンプをして、何も無い空中を一蹴りして、オーカスのいる壁の蔓に掴まったのだ。

「おのれ、私を踏み台にするとは」

悔しがる白い影。

ラグは剣を口にくわえて蔓をよじ登ると、オーカスの隣に並んだ。

「おい。蔓を切るぞ。動くなよ」

「はい」

ラグはオーカスの手に巻き付いている蔓を切った。

壁の蔓が波打ってラグを襲うが、手が自由になったオーカスが魔法器から火の魔法を発動してラグの周りにある蔓を焼いて一掃する。
「私はもう大丈夫です。ラグ殿。魔法で援護します。戦って下さい。」

「じゃあ、ほかの蔓は自分でなんとかしろよ」

すぐにラグは飛び降りて、下にいる白い影やゾンビと闘い始める。
手が自由になったオーカスは魔法器に触れて、火の魔法を蔓やゾ

ンビに投げつけてラグの援護をし、タイミングを見計って自分の足に巻き付いている蔓を火の魔法で燃やし切った。足が自由になったオーカスは下に飛び降りる。

第62話：リー家の屋敷12

「沼を私の魔法で凍らせます。足元が硬くなれば動きがもつと楽になるはずです」

オーカスは氷の魔法を使い沼を凍らせてラグのために動きやすい足場を作っていく。

後方支援でオーカスが火の魔法を使い蔓やゾンビを一掃するので、ラグに白い影を攻撃するチャンスが幾度となく巡ってくるようになった。

ラグは白い影に近づき剣を振る。

白い影はラグの剣から逃げていたが、何度目かのラグの剣が左横腹をかすめた時、白い影は左横腹を押さえ歯軋りをしたあとにラグに右の掌を見せた。

「お前ら如きにやられる私ではない」

白い影は新たな土魔法を使って空中に巨大な石を発生させた。魔力によって空中に浮かぶ巨大な石をラグに投げつける。

オーカスは魔法器に触れ巨大な石に対抗する火の魔法を発動する。
「危ない！ 炎の盾よ」

ラグとオーカスの頭上に部屋いっぱい輪を広げる魔方陣が現れ、輪に炎が燃え盛り盾となって巨大な石を受け止めた。

しかし、炎の盾は石の動きを受け止めるのが精一杯で、巨大な石は炎の盾の上に載ったままになっている。

「土の魔法の弱点は火の魔法なのに、どうして石は火の熱で溶岩にならない？」

オーカスは火の魔力を高めるために魔法器に触れて意識を集中する。

白い影は必死に戦うオーカスを見て嘲笑^{あざわら}った。

「お前は、元々土属性が弱点の雷^{いかすち}の魔法使い。魔法器を使い雷^{いかすち}の魔力を火の魔法に変換しても、本質が雷^{いかすち}の属性である以上、火の魔法

は雷を帯びてしまい、土属性に勝てなくなるのよ」

第63話：リー家の屋敷13

戦いながら話を聞いていたラグは驚く。

「あいつ。マルチな魔法使いじゃないのか!？」

巨大な石を受け止めている火の盾に守られながらラグは戦いを続け、後方支援をしているオーカスを見る。

オーカスの表情に全く余裕が無い。目は釣り上がり眉間にシワが寄っている。

「私の魔法を見破るとは、鍵の継承者だけの事がありますね。それなら、私の魔力をもっと高めて、上級の火の魔法をあなたにぶつけばよいだけの事。理論的には可能はず!」

オーカスは火の盾の横に火の剣を作り出す。

「もつと火の魔力を練り上げ、剣の刃を鋭く尖らせて高温にすれば、いかに鍵の魔力で作られた巨大な石といえど、溶岩になって融け落ちるはず。行け! ファイアソード!」

オーカスは火の剣を白い影に飛ばした。

白い影は両手を広げてもう1つの巨大な石を作り上げ、その石に土の魔力を注ぐ。

「いくら火の魔力を高めようと、雷いかずちの魔法使いの攻撃が土属性の私に効くはずがないと言っておるのが、まだ判らぬのか!」

オーカスが飛ばした火の剣は巨大な石に突き刺さるが、土の魔力に負けて火の剣は粉々に砕け散った。その衝撃はオーカスの体を通り抜ける。

「くっ……」

全身を揺さ振られるような衝撃を受けて脳震盪のうしんどうを起こしたオーカスは集中力が途絶え、オーカスが触れていた魔法器から魔力を帯びた光が消え去った。

同時に火の盾が消えて、ラグとオーカス目掛けて巨大な石が落下する。

第64話：リー家の屋敷14

ラグは瞬間移動をしてオーカスを抱えと、また瞬間移動をして間一髪で巨大な石の下から飛び出した。

巨大な石は落下して凍っていた沼地に減り込んだ。

オーカスはラグ腕の中で手を伸ばす。

「すい……ません。もう……鍵の魔力に……対抗する……魔法があり……ません。ラグ……殿……だけでも……逃げ……」

だが、手がラグに届く前に、オーカスはラグの腕の中で気絶した。上級魔法の連続使用により体力を消耗し過ぎたのだ。

今まで何かと面倒をみてラグを支え、事があれば魔法を使い、剣を持って果敢に戦っていたオーカス。ラグの剣を止めるほど腕の立つオーカスが、今はラグの腕の中で瞳を閉じてぐったりとしている。自分を支えてくれた大切な人がいなくなるのはもうイヤだと、ラグの脳裏に死んでいった者たちの姿が浮かび、腕の中にいるオーカスに次々と重なっていく。最後にオフエーリアの姿が重なった時、ラグは背中を曲げてオーカスの胸に額を落とした。

「オフエーリア……」

ラグはオーカスを抱えたまま跪く。

白い影は身を屈めたラグに近づいた。

「仕留め損なったが、もう逃がさぬ」

ラグの左耳のイヤークフが淡く光る。それに呼応してラグの体も淡く光る。

ラグはオーカスをそつと下ろした。

「もう見捨てたりはしない」

白い影は動きを止めて、急に様子が変わったラグを警戒する。

「何を言っている？ 気でも狂ったか？」

ラグは自分の剣を拾い立ち上がった。

第65話：リー家の屋敷15

「鍵の魔力は、民を守るためにあるのではなかったのか？」

ラグの言葉が貴族の口調に変わっている。

白い影は蔓を操りラグを襲う。

「知ったような口を利くな！」

蔓はラグの体に巻きつくが、巻きついた所から燃えて灰になっていく。

ラグは白い影に近づく。

「母上は、私にそう教えてくれた」

ゾンビもラグを襲うが結果は同じで、ラグに剣を振り下ろしたゾンビは急に燃え上がって灰になっていく。

白い影は怒りで髪を逆立てながら言う。

「火の魔力を身にまとうお前は何者だ？」

ラグの剣を握る手に力が籠もる。

「私は……。私は……」

「ええい。来るな！ 私に近づくな！」

白い影は、ラグを取り巻く火の魔力に恐れ戦いて、空中にあった巨大な石をラグに飛ばした。

石を見上げるラグの剣にも火の魔力が宿り淡く輝く。ラグはその剣で巨大な石を突き刺した。

「私の名は、ラーグ・フルフォンド・コトツク。賢者コトツクの末裔にして、火の鍵の継承者！」

ラグは巨大な石を切り裂いた。

真っ二つに切り裂かれた巨大な石はラグの左右に落ちた。切り口は高熱を帯びて赤い溶岩に変わり、溶岩は流れ落ちて凍った沼から湯気が立ち昇る。

白い影はラグの言葉を聞いて悲鳴を上げた。

「ローランの火の鍵の継承者が目の前に！？ そんなはずは……」

白い影の悲鳴でオーカスは気がついた。体力の消耗が激しくて体がだるいが動けないほどではない。オーカスはゆっくりと起き上がって、体を輝かせているラグを見た。

「あれは、最上位のスピリット級の魔力。鍵の魔力の輝き」

第66話：リー家の屋敷16

ラグを包む淡い輝きは、ラグの体を離れて白い光となって男の姿を象った。かたち

ラグに似た輪郭を持つ光は、白い影に言った。

『賢者リーよ。何故心なにゆえを乱し荒ぶるのか？』

物腰の落ち着いた中年とも老人ともとれる男の声が室内に響く。

その言葉により、全てのゾンビと蔓の動きが止まる。辺りは一斉に静まり返った。

白い影の動きも止まり、逆立っていた髪は静かに下りて垂れ下がる。白い影は、男の姿をしている白い光の問いに答えた。

『賢者コトツクよ。誤解するな。私は守っているだけだ』

白い影の返事に対して、白い光の声は強く響く。

『傷つける事は、守る事にあらず！』

白い影も対抗して声を響かせる。

『傷を欲しがる者が我が前に立てば、傷を負うのは致し方ない事！』

オーカスは二人の賢者の会話を聞いて驚く。

「賢者のスピリットが二人も現れるなんて」

賢者リーは賢者コトツクの言葉を聞き怒りを露わにするが、賢者コトツクは至って冷静に賢者リーを宥め諭していく。

『リーよ。思い出すのだ。あの時の我らの誓いを。大地に恵みをもたらし、民を、我が子をあらゆる禍から守り』

白い光となっている賢者コトツクの言葉のあとに、白い影の賢者リーが言う。

『友の身に危険が及ぶ時は助け、我ら鍵の魔力を持つ者は、常に力の均衡を保ち、平和を願い静かに暮らす。皆と交わした誓い、どれほど時間が経とうとも忘れるものか』

第67話：リー家の屋敷17

賢者リーは白い手を伸ばし、賢者コトツクの光の手を握った。

『私を助けに来てくれたのですか？』

『なにゆえ
何故、友の私に聞く？』

賢者コトツクの言葉のあと、急に会話が途切れ、また静寂が辺りを包む。

白い影と光は動きを止めて、しばらくの間手を握り合ったまま、静かに向かい合って立っていた。

賢者たちの間で何が起きているのだろうか？

ラグとオーカスが、時が経つのを忘れて二人の賢者に注目をしていると、賢者リーの声が再び響いた。

『ならば真実を告げ、友であるあなたに願ひましょう。我が愛しい子、カレンを助けて欲しいのです』

『その願い、受け入れるが、本当にそれでよいのだな？』

『はい。私は、火の鍵の導きに従う事に致します』

白い影は頷く。そして一瞬だけ真の姿を現す。顔は肖像画のカレンにそっくりの女性だが、緑の黒髪は結っておらず腰より長い。チャイナドレスを着た賢者リーは、微かに微笑んで涙を流したあとに姿が薄くなり、完全に消え去った。

同時に、部屋は何事も無かったかのように戦う前の状態に戻る。

賢者リーが消える寸前に、土の鍵の魔力である再生の魔法を使い全てを元の状態に戻したからだだった。

白い光の男は、事の終わりを確認するとラグの体内に戻った。

今度はラグの中で賢者コトツクの声が響く。

『ラーグよ。賢者リーの願いどおり、カレンを助けるぞ』

ラグは急に言われて戸惑う。

『助けるって、どうやって？』

またラグの体内で、賢者コトツクの声がする。

『我が炎は清めの炎。カレンが静かに眠れるように、今より我が魔力を使い、汚れたこの地を清める』

「それは？」

ラグが言った直後に、ラグを中心にして大きな魔方陣が床に浮かび上がる。魔法陣は幾重にも輪が作られていき、輪の中に古代文字と幾何学的な模様や図形が形成されて、魔法陣はどんどん大きくなっていく。

「……もしや！」

言ってからラグは急に走り出した。途中、床に座り込んでいるオーカスを拾うようにしてお姫様抱っこをして駆けて行く。

第68話：リー家の屋敷18

オーカスはラグの腕の中で揺れながら言う。

「ラグ殿。いや、ラーグ殿。私を抱えて走らずとも下ろして下されば、私も自分の足で走りますが？」

「お前の足じゃ遅過ぎる」

ラグの首に手を回して抱きついていているオーカスに、ラグは必死の形相で言う。いつの間にか物静かに話す貴族口調のラグは消え、いつもの冷やかしばかりを口にするラグに戻っている。

オーカスはラグの吐く息を身に受けながら言う。

「さつきより体力も回復しておりますので走れると思いますけど」

ラグは瞬間移動をして一番近い窓を潜り草が生い茂る庭に躍り出る。

「だから」

「だから？」

オーカスはラグの腕の中で大きな疑問符を掲げる。

ラグは、また瞬間移動をして噴水の傍に着地する。力いっぱい必死で逃げるラグの声が唸り声になる。

「今からここはあー、一瞬にしてえー、燃え尽きるのぉー。俺のぉー、火の鍵のぉー、魔力でえー」

「えええええー！」

オーカスが叫んだ瞬間、リー家の屋敷は強烈な光に包まれた。

敷地内のものは一瞬にして燃え尽き、そのあとに起こった爆風ともいえる熱風に押されて、ラグはオーカスを抱えたまま吹っ飛んだ。熱風は、空気の塊となってラグの背中に直撃する。

ラグは熱風を受けた衝撃で全身の運動神経が一時的に麻痺してしまい、思わず空中でオーカスを手放してしまった。

「うわっ！ しまった。すまん。オーカス」

「ちよっと待って。手を離さないで下さあー」

オーカスは更に勢いがついて、お姫様抱っこの恰好のままラグの前方へ飛んで行った。

ラグとオーカスは、飛ばされた距離は違ったものの、同じ田んぼに突っ込むようにして落ちた。

もちろんオーカスのほうが遠くに飛ばされている。

稲の苗を植えたばかりの田んぼだったため、二人は水浸しの泥まみれの姿になったが、軟らかい泥のお陰で打撲程度の軽傷で済んだのは幸いといえるだろう。

第69話：土の意思1

午前中に起こったリー家の屋敷全焼事件の噂はあっという間に周辺に暮らすリーの農民に広がった。

屋敷の隣に畑を持っている農民は口を開けて黒い焼け跡となったリー家の敷地を見ていた。

視界を遮るようにして建っていたリー家の屋敷が燃えてなくなり、今は焼け跡の先にある田畑が見えている。

農民は黒く広がる広大なリー家の焼け跡を呆然と眺めていた。

そこに近所の畑の持ち主がやって来て、驚いた表情で屋敷の黒い焼け跡を見た。

「あれ？ 地主様の屋敷が無い。黒い地面しかないがね」

屋敷の隣に畑を持っている農民が焼け跡を見ながら話し始めた。

「二人の剣士様が、魔物を退治するために地主様の屋敷に入ったそうなの」

「ほー」

「屋敷の中には、そりやあ強い魔物がおつてな。魔物は火を吐いて屋敷ごと剣士様を吹っ飛ばしたそうなの」

「あいやあー。吹っ飛ばしたのか！」

「そうしたらよ。魔物の住む屋敷も無くなってしまったもんだから、魔物は仕方なくよそへ引越したんだとさ」

「あれまあー」

「これで平和が戻ったんだけど、やっぱり屋敷を修復せねばならんちゅうことで、地主様の弔いついでに、親戚の偉い人がまたここに屋敷を建てるんだとさ」

「そりやあ、よかった」

「本当に良かったよ」

昼が過ぎて、ラグとオーカスはどこまで本当なのか分からない農民の噂話を耳にしながら、広大な焼け跡と化したリー家の屋敷跡に

来ていた。

当然、体についた泥は洗い流し服も着替えが済んでいる。

オーカスは、黒い焼け跡の上をラグと一緒に歩いていた。

「まだ探し物があるってどういう事ですか？　もう全てが燃えてしまつて壊れた塀しか残っていませんか？」

第70話：土の意思2

ラグは焼けた黒い地面を見ながらゆっくりと歩く。

「ここにはまだカレンがいる。捜せ。と、俺の中にいるコトツクの爺さんが言うんだ」

「コトツクの爺さん……」

オーカスは暫く考えて賢者コトツクの事かと認識する。賢者コトツクが捜せと言っているのかもしれないが、黒い焼け跡は真つ平。何も無いのは一目瞭然で分かる。捜す気の無いオーカスは、暇を持て余してラグの周りを歩きながら言った。

「亡骸を捜すにしても、こうも跡形も無く燃えてしまつては、骨すら残っていないと思うのですが？」

「俺もそう思う」

オーカスはラグの目の前で立ち止まった。

「珍しく意見が合いましたね」

ラグは笑顔のオーカスと目が合った瞬間、視線を外して横を向いた。間を取り繕うために、急いで捜す振りをして地面を見る。

「そんな事で一々喜ぶな」

「すぐに怒る。貴族の身分がバレて少しは大人しくなると思いましたが、短気な性分は全く直りませんね」

オーカスは膨れっ面になってラグに背を向けた。何気なく見た焼け跡の先に小さな光が見える。

「ん？ あれはなんだろう」

「何か見つけたのか？」

ラグはオーカスの横に並び、オーカスが見ている先を見る。だが、何も見えない。

「何も無いぞ」

オーカスは指をさす。

「あそこですよ」

「どこだ？ 見えんぞ」

「どうして見えないのですか？」

オーカスは光の場所まで駆けて行き、立ち止まって声を上げる。

「あー！」

「何かあるのか？」

ラグも小走りでオーカスの所へ行く。

オーカスはしゃがんで黒い地面から小さな物を拾い上げた。それを掌に乗せる。

ラグはオーカスの掌に載っているものを見る。何かのリングに見える。

オーカスは摘まんで持ち上げた。

「これは土の鍵です」

第71話：土の意思3

「土の鍵！？　これが？」

ラグはつい輪の中を覗いてしまう。

「古代の文献にあった絵とそっくりです。間違いなく再生と創造の象徴、癒しと錬金の魔力を秘めた、土の指輪だと思います」

オーカスは土の鍵の発見に感動しながら指輪を左の中指に填める。ラグは止めようとして手を伸ばす。

「待て。指に填めたら俺の左耳のように取れなくなるぞ」

ラグが言っているうちに、オーカスは中指の根元まで指輪を押し込んだ。

「大丈夫です。鍵には意思あつて。ほら。鍵の継承者じゃないと取れてしまうんですよ」

オーカスはラグの目の前で指輪を抜いて見せる。

「そうなのか……」

ラグは、確かに強い意志で口うるさく言う爺さんが自分の中にいるなと思いつながら、オーカスが持っている指輪を手にとった。

指輪は少々幅があり、純金のような金属で表面は磨かれて鏡のようにラグの顔が映っている。

ラグも試しに中指に指輪を填めようとするが、輪が小さくて入らないので、指を変えて左の小指に指輪を填めてみた。ぴったりと吸い付くように指輪が填まる。

オーカスは、ラグが填めた指輪を見ながら言った。

「土の指輪って凄いですね。屋敷を一瞬にして燃やし尽くした火の鍵の魔力でも燃えずに残っているんですから」

ラグは夢中になって左の小指にある指輪を触っている。

ラグの様子が変なので、オーカスはラグの顔をうかがった。

「どうしたのですか？」

「指輪が取れん」

オーカスはラグの小指にある指輪を引つ張る。

「そんなはずはないでしょう」

「いててててえ」

オーカスが加減無く指輪を引つ張るので、ラグは呻いて痛みを訴える。

「お前は、どういう引つ張り方をするんだ？ 痛いだろ！」

ラグの手はオーカスの手よりも大きくて広い。手の温度はラグのほぅが温かかったりする。

第72話：土の意思4

オーカスはラグに大声で言われても臆す事なくラグの手を握り、小指にある指輪を触っている。

「変ですね。ラーグ殿は火の鍵の継承者で、継承者違いなのに、指輪が抜けないなんて。指輪を填めてみたくて無理に押し込んだのではありませんか？」

ラグは違う所に反応する。

「ラーグと呼ぶな。ラグだ」

「ラグでもラーグでも、どちらでもいいではありませんか。それより、早く指輪を取らないと」

オーカスは指輪を回してみる。

指輪は小指を軸にして素直に回転するが、抜こうとすると何かが引っ掛かっているかのように抜けない。

ムキになってオーカスが指輪を触っていると、ラグの中で賢者コトツクの声がした。

『賢者リーからの伝言だ。ここはカレンの遺体があった場所です。カレンの遺品を見つけてくれて有り難う。土の鍵は次の継承者に渡して下さい。それまでは今の指輪の持ち主であるコトツクの末裔と行動を共にします。との事だ』

ラグは残っている右手で顔を覆って溜め息を吐いた。

「そういう事か」

爺さんの声より女性である賢者リーの声で言っただけだと男心に思っていたりもする。息を吸い込んでから、オーカスに賢者コトツクの伝言を伝えた。

伝言を聞いたオーカスはラグの左手を握りながら指輪に訴えた。

「ええー、そんなあー。なんで私の指にしてくれないのですか？」

土の鍵があれば、雷の魔法使いである私の弱点が無くなり、強力な土の鍵の魔力が使える雷の魔法使いになれるのに。魔法が使えない

ラグを選ぶなんて……」

うらめしいとラグを見る。

ラグは左手をオーカスに委ねたままふて腐れた。

「知るか」

このオーカスの嫉妬は、指輪をリーの継承一族に返すまで続くのだが、今のラグには知る由も無い。

その日のうちにサザーランド国王に一報が届く。リー家の屋敷全焼。魔物退治に向かった剣士二名の消息不明。土の鍵、未だ見つからず。と。

第73話：ラーゲ・フルフォンド・コトツクのテーマソング（前書き）

読んで頂き有り難うございます。

皆様のご温情のお陰で無事に序盤が終了しました。

心ばかりのお返しではありますが「ラーゲ・フルフォンド・コトツクのテーマソング」を選んでみました。

歌詞の文字数：英和含めて約1700文字です。

下記のアドレスは、ダウンロードに光回線100Mbpsで約3分かかります。

携帯の方は画像をご覧頂けないのでご了承下さいませ。

次話から中盤が始まります。

今後どうか宜しくお願い致します。

第73話：ラーゲ・フルフォンド・コトツクのテーマソング

ラーゲ・フルフォンド・コトツクのテーマソングとして選んだ曲です。

偶然だったのですが、歌っているSarah Brightmanさんが、雪鈴がイメージしているオフェーリアの雰囲気と同じだったのには驚きました。顔は違いますが、髪の長さまでほぼ同じです。巻き毛にするともっとそっくりになるかな。

Running

Sarah Brightman

<http://jp.youtube.com/watch?v=5qL-WZCTM8&feature=PlayList&p=FB841DBED8921641&index=26>

138

I was sad and I was silent
In shadow of my soul
Ever seeking the horizon
For promises untold.

I dream of silent oceans
And I sing of waters blue
With the crossing of angels
Brought forth to guide me through

To a distant shore so welcoming

where I was free to roam
In a land of ancient mystery
That I could call my own

[Chorus:]

This is me and you
And we are running
To change the world
Where hope is shining through
Gaias green and blue
And we are running
To save the world
That were about to lose

We'll be running
Watch it coming
Green is shining through
Love is rising
Worlds colliding
Green is shining through

[Repeat chorus]

Can you hear the distant beat
ing

Of passion born of old
Reaching out to far horizons
Of prophecy untold

I will wander through the des
ert

I will seek you in my hand

In the silence of shadows

In palaces of sand

Then a voice called from the

wilderness

Whose spirit held the key

To a world and soul united

Forever strong and free

Runningの和訳

私は魂の背後に悲しみを隠し、沈黙を守っていた
ただ秘密の約束のために地平線を目指していた

私は静かな海の夢を見て

青い海のことを歌う

私の進むべき道を示すために天使たちが横切る

それは私を手放しで歓迎してくれる遠い海岸線

私が自由に歩き回れた場所

古代の神秘の土地

私が自由に出来る場所

それは私とあなた

2人で走っている

世界を変えるために

希望が光輝くように

大地（地球）は緑と青で覆われている

私たちは走っている

世界を救うために

まさに私たちが失おうとしている世界を

私たちは走るのだ

それが近付いてくるのが見える

緑が光輝いている

愛が生き返ってきている

世界は混乱しているけれど

緑は光輝いている

あなたは古来からある情熱の鼓動が遠くから聞こえないの？

遠くにある秘密の予言の地平線に手を伸ばしなさい

私は砂漠を歩き通すだろう

私は手探りであなたを捜し求めるだろう

影の静寂の中で

砂の宮殿の中で

その時、野生の叫びが聞こえた

その魂が世界と魂を1つにして

限りのない強さと自由を得る鍵を握っているのだ

第73話：ラーゲ・フルフォンド・コトツクのテーマソング（後書き）

なおなお

雪鈴は、二連（エレキ？）ギターを弾いている人から不思議な雰囲気を感じてなりません。

第74話：白いテーブルがある庭

ラーグは花々に囲まれた噴水が見える庭にいた。白い椅子に座り、白いテーブルを挟んだ向かいには、異国の服を着た中年の男が座っている。その男がラーグに言った。

『何かと年寄り扱いをするが、私は爺さんではない』

聞いた事がある落ち着いた声と、ラーグと同じ灰色の髪とアメシスト色の瞳を持つ男性は、賢者コトツクのようなようだ。

ラーグは貴族特有の品のある話し方で返事をした。

「そうでしたか。年寄り扱いをして申し訳ありません」

ラーグの服装は、コトツクの伝統に基づいた正装になっている。その服装はどことなく中年の男が着ている異国の服と似ている。

二人が座るテーブルに賢者リーがアフタヌーンティーを持って来た。やはり緑の黒髪は結っておらず腰より長い、耳下の髪の間からは耳たぶと同じ太さで縦長の豪華なイヤリングが見え隠れして賢者リーの動きに合わせて揺れ動いている。彼女はアフタヌーンティーをテーブルに置いて言った。

『カレンは、私と共に賊に立ち向かい勇敢に戦いました。カレンが殺されたあとも、私はカレンのために戦い続けました。コトツクの貴方たちが来ても』

賢者リーは、椅子に座りってからカップに紅茶を注いで、賢者コトツクとラーグに紅茶を配る。その後、賢者リーは日に焼けていない白い手を動かしティーカップを持ち上げて紅茶を口に含んだ。

『あの時の私は、カレンの死を悲しみ、カレンの家族に降りかかった不幸を呪い、狂っていたのかもしれない』

賢者リーはティーカップを受け皿に戻す。

『私は、貴方のお陰でコトツクに会うことができました。何か恩返しをしたいのですが』

賢者リーは、オニキス色の瞳で同情の眼差しをラーグに送る。

『貴方の苦しみは、どう癒して差し上げればよいのですか？』

「私の苦しみ……」

ラーグは賢者リーが言った言葉を繰り返してから、賢者リーと賢者コトツクを交互に見た。

いつの間にか二人の後ろに、顔が焼けただれたオフエリアと、背中に剣が刺さった部下のジェイローが立っている。

ラーグは思わず立ち上がった。後退りして椅子の背もたれを掴む。いけないことだと分かっているも足は勝手に逃げようとして動く。

「見捨てるつもりはなかった。気付いたら、私一人が生き残っていたんだ」

ラーグの呼吸は早くなる。

「私も、国や家族を守るために、必死に戦ったんだ」

ラーグは、泣きながら叫び始める。激戦を極め多くの者が死んだアルランドの地で助かり生き残ったという幸運が、ラーグにとつては大罪にも等しい杭となって心に刺さっているようだ。そして、アルランドの悪夢にうなされていたラーグを救った妻のオフエリアも黒い集団に殺されて今はいない。

賢者コトツクが錯乱するラーグに言う。

『落ち着きなさい。ラーグ。そんな状態では、また私と意思疎通が
できなくなる』

『落ち着くのです。ラーグ』

賢者リーも言う。

ラーグの呼吸は荒いまま続き、自分の膝に力が入らなくて変だと思った時、ラーグは意識を失った。

第75話：終わりになき痛み1

最近は気がつくといつも目蓋に光を感じる。そう思いながらラグは目を開けた。宿の窓際にはいつもの如く、茶髪を後ろでまとめて紐で結び、きちんと身形を整えたオーカスがいるのだが、その姿がオフエーリアだったので、ラグは飛び起きた。

「オフエ……！」

言い掛けて、振り返った顔がオーカスだったので、ラグは開けた口を閉じて、ついでに目も閉じた。

オーカスは外の景色を眺めながら、報告のためにローラン城に向けて魔法通信を行っていたのだろ。もう魔法通信が終わったのか、ベッドの上で首を項垂れて座っているラグに声を掛けた。

「また、うなされていたようですが？」

ラグは首を項垂れたまま言う。

「お前は、いつも朝の挨拶をしないな」

「あ、申し訳ありません。目覚めた時は、おはようございます。でしたね。いつもうなされていらつしやるので、心配になってしまつて、朝の挨拶を忘れておりました」

ラグは片目を開けて恐る恐るオーカスを見る。窓際にはオフエーリアではなく、オーカスがいます。ホッと胸を撫で下ろしてから両目を開けた。支度をするために上着を取ろうとして伸ばした左手の小指には土の指輪が填まっている。ラグは上着を取ってから小指の指輪を眺めた。

オーカスもラグの小指の指輪を見て言う。

「ラーグ殿が眠っていらつしやる間に、指輪が取れないものかと思ひ触ってみたのですが、やはり取れませんでした」

上着の袖に腕を通したところでラグの動きが止まる。

「ラーグじゃない。ラグだ」

言い切ってから上着を羽織り肩の位置を合わる。

オーカスは向き直って言う。

「どうしてラーグ殿とお呼びするいつも怒るのですか？ リー家の一件が終わりこの数週間、二人でいる時にすらラーグ殿と呼ばせて頂けないのはなぜですか？ 火の鍵の魔力を使い、賢者リーにも認められて土の指輪を手にした今、鍵の継承者の護衛である私の前で御身を偽る必要はないかと」

ラグは支度をしている手を止めた。窓際に立っているオーカスに急に迫り、オーカスの耳の横の壁に思いつきり手をついた。

第76話：終わりになき痛み2

オーカスの耳に、壁を叩いた音が響き、オーカスはビクついて硬直する。ラグの胸元のはめかけのボタンの間から、胸の筋肉が見え隠れしている。この至近距離で俊足のラグと闘えば、詠唱を必要とする魔法剣士のオーカスは間違いなく負けるだろう。脅されている錯覚に陥り、オーカスは突然心の中に湧いた恐怖心でラグが見れなくなり俯いた。だが、部隊をまとめる現役の隊長としてのプライドもあり、奥歯を噛み締めると再び顔をあげてラグを見た。

ラグはオーカスを見下ろして睨んでいる。オーカスと目が合うと犬歯を見せて大声で言った。

「ラグだ。何度も言わせるな！」

オーカスの青い瞳が怯え始める。

ラグは、ハッと気づいた表情をすると壁から手を放した。オーカスから視線を外してベッドを見る。

「すまない。お前を怖がらせるつもりはなかった」

ラグは、オーカスから離れて、途中だった支度の続きを始めた。

「いえ。私の方こそ、事情を知らずに差し出がましい事を言ってますませんでした」

ラグは剣を腰に挿しながら言う。

「俺は、英雄のラーグに戻りたくないんだ。戦場で友を失い、家族も守れなかった俺が、王から与えられた英雄の称号を持っているなんて、いい笑い者だからな」

アルランドの英雄と謳われた男も、全てを失ってしまえば気の小さいただの男に成り下がるという事だろうか。

オーカスは、ラグの背中に孤独な英雄の末路を感じて胸を痛めた。「以前、シーライト将軍も似たような事をおっしゃっていました。王から与えられたマジックナイトの称号は、多くの尊い犠牲を払って得た称号だと」

これがラグの慰めになればと思い、オーカスは言葉を続ける。

第77話：終わりなき痛み3

「犠牲となった人々の思いが、今も敵味方関係なく自分の身に押し掛かってくる。その重圧に耐えかねて苦しむような事があっても、死んでいった者が守ろうとした国や人々の平和な暮らしを約束できるその時まで、マジックナイトとして將軍の道を歩まなければならないと」

またラグの動きが止まり、今度は急に鼻で笑い出だす。

「ふっ、ふふふ。魔法が使えない俺と、魔法で巨大飛空艇を落とすシーライト將軍と一緒にするな。比べる相手が違い過ぎるだろ。腹立ちを通り越し、呆れて笑えてくる。それに何度も言うが、俺はラグだ」

ラグは、鼻で笑ったままの表情でオーカスを見た。

「な。オーカス？」

オーカスは、急に笑い出したラグの笑顔が理解できない。

「ですから、私はきちんと訂正をして、ラグ殿と呼んでいるではありません」

オーカスはムキになるが、ラグが言おうとしている意図をやっと理解した。

「今、私をオーカスと呼んだ。お前じゃなく、オーカスと。1ヶ月以上一緒に旅をしておりますが、オーカスと呼ばれたのは、これで二回目です」

オーカスは笑顔になった。

オーカスと目が合ったラグは赤面する。

「そんな事を一々数えるな」

オーカスは喜んでリズムをつけて呼ぶ。

「ラグ　ラグ　ラグ」

オーカスは隊長とはいえ、まだ子供っぽさが残る17歳。リズムをつけてラグを呼ぶ姿がエルフのようで、愛らしく見えたりする。

ラグは、急に近くなったオーカスとの心の距離に照れて、その照れを必死に隠そうとして動揺している。

第78話：終わりなき痛み4

「意味も無く、俺を何回も呼ぶな」

ラグはオーカスから視線を外すと、逃げるようにして部屋を出て行ってしまった。

ラグがぶつきら棒になるのは照れ隠しだと知ったオーカスは、更に喜んで「はい」と返事をしながらラグに続いて部屋をあとにした。ここは、リー地方から東へ数週間地竜に揺られて移動した所にある中規模の街である。

ラグとオーカスが泊まっている宿は、リー地方にあった田舎宿に比べると、ベッドが柔らかくて備え付けてあるテーブルや椅子は造りの良いものとなっている。

ラグとオーカスは宿代を払い外に出た。

宿の前には地面に伏せて眠っている地竜がいる。

オーカスは地竜にもたれながら地図を広げた。

「次の鍵の継承者は、サザーランド国のケルティック地方に住んでいるのですが、実はケルティック地方の中心にサザーランドの王都があるのです。ご推測かと思いますが、鍵の継承一族であるケルティック家は代々サザーランド国王に仕え、ローラン国の王宮書庫の資料によると、鍵の継承者は王の主治医として仕えている事が多いようです」

ラグは地竜の背に荷物を載せながら言う。

「そいつに、鍵の継承者の護衛のため敵国ローランから来ました。と言ったら、問答無用で、頭に注射を打たれそうだな」

オーカスは笑うが、すぐに真面目な表情になって言う。

「ローラン王都の図書館にあった古代の文献も読んだのですが、ケルティック家は水の鍵を継承している一族で、鍵の魔力によって水質変化はもちろん、体内の血流に影響を与え、体調異常や、即死させる事も可能のようです。水の鍵については情報が少なくてこれくら

いしか分かりませんでした」

頑張つて調べた甲斐がなかったとモチベーションが下がり気味の
オーカス。

第79話：終わりなき痛み5

ラグは、オーカスを励ます事もなく、いつもの冷やかし半分の口調で言う。

「どの道、即死させるだけの魔力があるなら、護衛はいらんだろ。敵のサザーランド国王に代々仕えている一族っていうのも気に入らん」

オーカスは地竜に乗り尻を叩いて眠っている地竜を起こす。立ち上がった地竜の上で揺れながら、オーカスはどこまでも真面目な口調で言った。

「しかし、シーライト將軍から仰せだった任務なので、私はケルティック家の鍵の継承者に会わなければなりません」

ラグは、地竜に跨って地竜を立たせながら反論する。

「ダメだ。ケルティック家に行くという事は、敵の本拠地に行くって事だぞ。王の主治医かもしれんケルティックの奴に会えば、俺は耳と小指を切り落とされ鍵を奪われる可能性だってある。そんな危険な所へ行けるか。俺なら王が外出する日が来るまで、近くの酒場で暇を潰して待つね」

オーカスはラグの地竜に自分の地竜を寄せて言う。

「確かにサザーランド国王は敵だと思いますが、鍵には意思があります。悪事に手を貸すとは思えません」

ラグとオーカスの心の距離は近くなったが、近くなれば形の無い心でも摩擦は起きる。

ラグは、オーカスとの意見の食い違いを鬱陶しく思い、意志を曲げないオーカスの態度に腹を立てた。

「だったら勝手にしろ。俺は絶対にケルティック家へは行かないからな」

こうしてラグとオーカスは意見が合わないまま数日かけて東にある王都へ向かい、王都に入ってからラグとオーカスは、王都の中

心に位置する国立公園の広場で待ち合わせるということで、ラグは酒場へ、オーカスはケルティック家へと、別々に行動することになった。

第80話：サザールランド王都1

オーカスはケルティック家に向う。

「身元を明かさなければ危険なんてないのに」

ラグと別れたばかりのオーカスは、考えの合わないラグの不平不満を口にしていた。身の危険があると言ってケルティックの屋敷の門すら見ようとしない気の小ささと、気に入らない事があるとすぐに酒を飲んで紛らわすラグの行いに疲れを感じていた。

ケルティック家の屋敷は王宮の隣にあった。ただし、広大な敷地同士が隣接しているため、王宮とケルティック家の屋敷はかなり離れているように見える。

オーカスは管理されて綺麗な花々が咲く公園のような敷地を回りこんでケルティック家の屋敷へと地竜を移動させた。

ケルティック家に近づくにつれ、巨大な大理石を削って作られた柱が見えてくる。屋敷は4階建て。それを支える長くて太い柱は、加工するのに相当な資金が必要だったろう。

4階までの高さがある大理石の柱を見ているオーカスの瞳に、古代から続くケルティック家の富と繁栄の軌跡が映る。

もう暫く地竜を進めると柱と同じ大理石で作られた門があるのだが、ケルティック家の屋敷は門を潜り広大な庭園を抜けた先にあった。

とりあえずオーカスは門の前に来た。ケルティック家の屋敷はまだ遠くにあり眺める事しかできない。ケルティック家の門番と目が合い、オーカスは観光客を装い愛想笑いをしてみせる。門番と話ができる距離にいるのだが、ラグの冷やかしが気になり、鍵の継承者に会ったための口実も思いつかない。オーカスは広大な敷地と奥ある立派な屋敷を見て立ち去ることしかできなかった。

「部隊での行動と違って、単独行動は心細いですね」

溜め息を吐きながら地竜の上で揺れているオーカスを、ケルティ

ツク家の屋敷の4階の窓から眺めている金髪の男がいる。

オーカスはそれに気づかないまま、ラグと待ち合わせている国立公園の広場へ向かった。

第81話：サザールランド王都2

国立公園の東に王宮の立派な建物が見えている。

オーカスは広場へ行くと適当な木に地竜を繋ぎ、芝生に腰を下ろして魔法で作った蝶をラグへ飛ばした。自分が国立公園にいる事を知らせるためだ。もしラグが来てケルティックの一族に会えなかったと知ったら、きっとそれ見た事かとラグは笑い飛ばすだろう。ラグからの冷やかしを想像してオーカスの心の中にある砂時計は虚しさで歯痒さの砂粒を落とし心の底に降り積もっていく。

「一人の私は弱いな」

悔しさ半分、情けなさ半分を感じて落ち込んでいると、地竜がオーカスに擦り寄って来た。

「くるるん」

地竜はオーカスの手の匂いをしきりに嗅ぐ。その仕草を見てオーカスは立ち上がった。

「何か欲しいのですね。そういえば昼ご飯がまだでしたね。ちょっと待って下さい」

オーカスは積み荷を見るが、旅立つ予定が無い事もあって積み荷の中には食料が積んでいない。オーカスは、鼻でつついて食べ物を催促する地竜の首を撫でた。

「近くの店で何か買ってきますので、ここでいい子にして待っていて下さい」

「くるるん」

地竜は頭を摺り寄せてオーカスに甘えていたが、別の気配を感じて頭を上げた。横から差し出された果物の匂いを嗅ぐ。

果物を差し出したのはラグより背の高い男だった。髪は赤色で瞳の色はエメラルドと同じ緑、褐色の肌にベスト、その下にカーゴパンツをはいて、腰の両脇から二本の短剣の柄が見える。後ろが見えないから分からないが、後ろに二本の短剣が固定してあるようだ。

オーカスは急いで地竜の手綱を引く。

「よその人の食べ物を食べたらダメですよ」

「くるるーん」

地竜は匂いだけでもと、男が持つ果物に鼻先を向ける。男はにっこりとしながら果物を地竜の口先に運んだ。

「別にいいですよ。ほら、お食べ」

地竜はさっそく男が持つ果物に噛り付く。

第82話：サザールランド王都3

喜んで果物を食べる地竜を見てオーカスは男に会釈をした。

「有り難うございます。でもよかったですか？」

男は地竜の首を撫でながら言う。

「ああ。余りものだから。ここには観光か何かで来たの？」

オーカスとはっさに思いついた答えを言う。

「はい。観光で来ました。戦争も終わりで最近は落ち着いてきたので、旅をしているいろいろ見て回ろうと思ひまして」

男は慣れた手つきで地竜をあやしなから言う。

「ならちようどいい」

「え？」

「俺はニツク。このサザールランドの王都でガイドをやってる。食事付きで、その都度チップをくれれば、行きたい所に案内するし、そのほかなんでもサービスするぜ。君の夜のガイドも喜んで引き受けるよ」

ニツクは素早く、そして優しくオーカスの腰に手を回す。

「王都を観光する間、俺を雇わない？」

ニツクの声はラグよりも優しくオーカスの鼓膜の奥に響く。

オーカスは「雇います」と首を縦に振りそうになるが、任務を思い出してニツクの腕からスルリと逃げた。

「いえ。私は地図を持っていますし、連れもいるので結構です」

「連れてって友達？ それとも愛人？」

「愛……」

オーカスの顔が真っ赤になった。

ニツクはオーカスの新鮮な反応に興味津々の表情を浮かべる。

「もしかして、まだ経験が無いのかな。あんだ。貴族に見えるんだけど、同性とも経験が無いの？ 貴族の剣士様は、異性と経験する前に同性と。って、相場が決まっているんだが」

オーカスは赤い顔を引きつらせながら言った。

「私の、つつ、連れは愛人ではなく……。私には、そういう習慣もありません」

かなり動揺してオーカスが舌を噛みながら言っていると、オーカスの目の前に大きな左手が現れた。手はオーカスの胸を押してオーカスを後方へ移動させる。その小指には金色の指輪が填まっていた。

「悪いが、こいつの連れは、俺だ」

ラグが現れてオーカスの前に立った。

第83話：サザーランド王都4

改めてニックと比べると、やはりラグの身長は少し低い。ただし、肩幅はラグのほうがあり、元軍人だったこともあってラグの体がかく見える。ニックの年齢はラグと同じくらいか。

ニックはラグを上から下まで見てから言った。

「愛人ではなく、保護者がいたんだ」

「そういう事だ」

ラグは二匹の地竜の手綱を持つとオーカスを連れ、ニックに背を向けて歩き出した。

ニックは去って行くラグの背を見ながら呟いた。

「俺としては、ワイルドっぽいあんたのほうが好みなんだけど」

そうとは知らないオーカスは、ラグと肩を並べて歩きながら言う。

「ラグ。酒臭いです。それに香水の匂いまでさせて」

「久し振りに飲んだんだ。匂いくらい我慢しろ。お前も二十歳を過ぎれば、女を両脇に抱えて酒を飲むようになる」

「私はそんな事はしません」

オーカスは膨れっ面になりながらラグが引いていた地竜に跨る。

ラグも地竜に跨りながら聞く。

「で、鍵の継承者に会えたのか？」

「会えませんでした」

オーカスの膨れっ面は続く。

「だらうな」

ラグは勝ち誇ったように笑みを浮かべる。

オーカスはラグの横顔を見て余計に腹を立てた。

「ですから、今夜は王都の宿に泊まります。先に言っておきますが、敵国におりますので酒は程々にして下さい。それでは、私は宿の部屋をとりに行ってきます」

オーカスは膨れっ面のまま地竜を走らせる。

ラグは地竜の尻を叩いてオーカスを追いかける。

「俺はまた酒が飲めなくなるのか？ 冗談じゃない！」

オーカスの耳にラグの声は届いていたが、ケルティック家の鍵の継承者に会えなかったのが悔しくて聞こえない振りをして地竜を走らせた。

第84話：サザーランド王都5

ラグとオーカスは宿屋の看板を見つけると地竜から降りた。

オーカスは宿屋の建物を見ながら言った。

「鍵の継承者に会えるまで、暫くここに滞在しましょう」

サザーランド王都の滞在を決めたオーカスは、隊長というプライドが手伝ってケルティックの誰かに会えるまでは移動しないと意地になっているようだ。

ラグは地竜から積み荷を下ろしながら言う。

「朝昼晩の食事に酒をつけてくれるなら、俺はいくらでも滞在するぞ」

オーカスは、酒好きのラグを見て呆れた表情になって荷物を持って宿屋に入る。宿の主人に鍵をもらい、部屋に入ると荷物を下ろした。

ラグもオーカスの横に荷物を下ろす。

今もラグから香水の匂いがする。オーカスの鼻に入ってくる甘い香りは、嫌な香りではないのだが、なんだか腹が立ってきて、オーカスは苛立ちながら口を開いた。

「やっぱり酒はやめて下さい」

「はあ!？」

ラグは剣を壁に立てかけた恰好で振り返る。

「さつきは程々にしろと言ったじゃないか。なんで言う事がコロコロと変わるんだ？ 今日のお前は変だぞ」

オーカスの表情は怒っている。

「私は、女性を両脇に抱えて酒を飲む事を許した覚えはありません」
「店の女が酌をするぐらいいいだろ。それになんてお前が俺に指図をするんだ？」

オーカスは酌をしてもらう程度だったのかと思いつつ言った。

「私はシーライト將軍から鍵の継承者の護衛をするように仰せつか

っております。ラグを護衛をする立場上申し上げれば、酔っている時のラグは、極端に剣の動きが悪くなる。もしその時にサザーランド兵に囲まれてもしたら逃げられなくなります。酌をする店の女性だって刺客の可能性がないこともない」

第85話：サザーランド王都6

ラグは笑った。腹を抱えて笑い、笑い疲れたとばかりにベッドに腰掛けて言う。

「か細い腕で酌をするあの女たちが刺客だって？　ありえん」

「魔法器が使えないラグはご存知ないかもしれませんが、魔力は女性のほうが強いのです。魔法器を持つ腕の太さも関係ありません。賢者リーを思い出して下さい。魔法生物を何体も作って操りながら、植物も生成し操り、更に巨大な石をいくつも作って操る。店で働く女性だと思って侮っていると、そのうち寝首をかかれますよ」

ラグは小言に鬱陶しさを感じ、早く終わらせたくて、仕返しついでに嫌味を込めて返事をした。

「分かりました。オーカス隊長殿のお言葉は、謹んで承らせて頂きます」

酔っ払いの言葉だと分かっているにも、ラグの言い方が癪に障る。

オーカスは腹立ちを収められずまた苛立つ。

「とりあえず、私は何か食べるものを買って来ます。ついでなのでここで飲めるようにお酒も買ってきましょう」

オーカスは、暫くの間ラグの顔を見たくなかった。ラグと一緒にいれば自分ばかりがラグの心配をして損だと思ったからだ。

オーカスが買い物のために部屋を出てドアを閉めようとすると、ラグが閉まりかけたドアを押さえた。

「俺も行く」

ラグはオーカスが気づかないうちに立ち上がってオーカスの後ろを歩いていったのだ。

オーカスはラグの顔を見ずに言う。

「買い物くらい一人でできますから、来て頂かなくて結構です」

ラグはオーカスを追い越しざまに言った。

「俺が一緒に行きたいんだ」

剣を腰に挿しながら先に歩いて行く。オーカスの足音がしなのでラグは振り返った。

オーカスはまだ怒った表情をしている。

オーカスの機嫌が良くならないのでラグは言葉を付け足した。

「もう一人でケルティック邸へ行くな。買物もだ。でないと、俺の酒が増える事になる」

ラグは歩き出した。横目でチラリチラリとオーカスを見て顔色をうかがっている。オーカスが何も言わないので痺れを切らしたラグがまた口を開いた。

「なんだ？ まだ他に何かあるのか？」

「いいえ。何も」

「なら行くぞ」

最近のラグは言葉数も増えて感情が表に出るようになってきている。

ラグの背を見ながら歩くオーカスは少し笑顔になった。

第86話：サザーランド王都7

ラグとオーカスは宿屋の主人に出掛ける旨を伝えたと外に出た。王都で暮らしている上流階級の人々が高価な服を着て地竜や魔法器に乗って移動している。乗り物として移動している魔法器も煌びやかに装飾が施されていて高価そうだ。

オーカスは王都らしい雰囲気を感じながら地竜の手綱を握る。そこにニックが現れた。

「どちらに行かれるんです？ よかったら案内しますよ？」

ニックはオーカスの地竜に寄り添って歩き、営業スマイルをする。呆氣にとられるオーカス。

ラグは手早く地竜を操ってニックとオーカスの間に割り込んだ。

用心棒のようにアメシストの瞳を鋭く光らせてニックを見下ろした。「俺たちをつけて来たのか？」

ニックは愛想笑いをする。

「つけて来たって？ イヤだなあ。そんな言い方をしないで下さいよ。こっちはガイドの仕事なんですから」

「ガイド？」

先ほどオーカスをニックから引き離れたラグは、オーカスとニックの会話内容を知らない。

オーカスはラグに説明をする。

「ほらさつき、ガイドを雇わないかって言われたのです」

「そうだったのか」

ニックは、ラグを相手に自分の売り込みを始めた。

「俺はサザーランド国公認のガイド証を持っておりますので、王宮の庭園を案内する事もできるんですよ。どうです？ 俺を雇いませんか？」

「王宮に入れるなら……」

ラグは言い掛けて急いで言い直す。

「いや。いい。俺たちは、ただの観光だから王都の歴史ある建物が見物できればそれで充分だ」

ラグは断るつもりで言うが、ニックは言葉巧みにラグを口説く。

「なら、ケルティック邸を見に行かれてはいかがですか？ 一番古い建物で、ここケルティック地方の名前の由来にもなっているんですよ」

それにオーカスが食いついた。

「ケルティック邸内に入れるのですか？」

「もちろん。王都の観光名所の一つになっておりますので、ガイド証を持っている俺と行けば入れます」

オーカスはラグを見る。オーカスの表情はすぐにもケルティック邸へ行きたいと言っている。

第87話：サザーランド王都8

ラグはオーカスと目を合わせてからニックに言った。

「今からでもいいのか？」

「ええ。いいですよ。とりあえずガイド料などを説明しますから、俺と一緒に昼の食事でもしましょうか？」

言つとニックは早速ラグとオーカスを手ごろな飯屋に案内した。

質の良い食事に手ごろな値段が気に入ったラグとオーカスはニックの話を快く聞き、特にニックという酒飲み仲間ができたラグは喜んでニックの話を聞いた。もうラグとオーカスに、ニックのガイドを断る理由は無く、食事が終わるとニックの案内でケルティック邸へ向う事になった。

ケルティック邸に到着し、ニックはオーカスがよく知っているケルティック邸を示して説明をする。

「こちらがケルティック邸です。サザーランドでは一、二を争うほど建物が古く、代々王宮の要人を排出してきただけあって、建物の作りは堅固で格調高いものになっております。特に4階建ての屋敷を支えている大理石の柱が有名で、大理石を切り出し当時リー地方にいた上級クラスの土の魔法を使う匠を何人も雇って加工をし、屋敷を守る防御魔法も無数に施されておりまして、現在はケルティック家の富と繁栄の象徴になっております」

ニックは説明しながらオーカスが乗る地竜の手綱を引いて移動する。

「この大理石でできた門が公用の出入り口になっており、俺たちガイドもここからの出入りを許されております」

ニックは門番にガイド証を提示して中に入った。

ラグとオーカスもあとに続いて中に入る。ニックに促され二人は地竜から降りた。

「ニックさん。ケルティック卿に会う事はできますか？」

「へ？」

オーカスの質問が突飛だったため、ニックは返事ができない。

ラグは質問の内容を少し変えて言った。

「邸内を見学させてもらっている時に、ケルティック卿とすれ違う事はあるのか？」

ニックはそういう質問だったのかと頷く。

「ああ。有名人を一目見たいのですね。残念ですが、將軍職に就か
れていたケルティック卿は、1年前の戦争で戦死され、現在会う事
はできません。ほかにご兄弟が二人、姉妹が三人おりますが、王宮
内の職についている要人で現在は王宮に住んでいらつしやるため、
やはり会う事は不可能です。あ、ケルティック將軍のブロマイドな
らありますよ」

第88話：サザーランド王都9

「ブロマイド!？」

同時に驚くラグとオーカス。

ニックは腰にあるポーチからケルティック將軍のブロマイドを何枚が出した。

「生前のケルティック將軍はともハンサムで、まだ決まった相手もおりませんでした。サザーランド王都ではアイドル的存在だったので、こうして彼のブロマイドがあるんですよ。買います?」

「俺はいらん」

ラグは即答で断る。

「私は買います。できれば全身が写っているのが欲しいです」

オーカスは懷から財布を出した。

ラグは意外だと驚く。

「おい。なんで買うんだ?」

「欲しいからに決まっていますでしょう」

オーカスはさらりと返事をして購入したブロマイドを懷にしまった。

その後、ニックはケルティック邸の客間や庭園を案内し、アフタヌンティーが楽しめると言って、ラグとオーカスを庭園のテラスに誘導した。

オーカスはニックの誘導に素直に従って椅子に座る。

ラグは椅子に座らず白いテーブルを見ている。

オーカスは不思議に思っテラグに声を掛けた。

「ラグ。どうかしたのですか?」

ラグは、この白いテーブルが夢の中で見たものと同じだと気付いたのだ。周りを見回せば風景も夢の中で見たのと同じ。ラグは、ニックの前で驚きの声を出す訳にいかず、震える手で椅子を掴むと腰かけた。

「なんでもない。歩き疲れただけだ」

「ならいいのですが」

オーカスは、それならば次の事をと、先ほど購入したプロマイドを懷から取り出した。

ニツクは二人が席に着いたのを見て「ここで待っていて下さい」と言つてアフタヌーンティーを取りに行く。

ラグはオーカスが見ているプロマイドを覗き込むようにして見た。
「お前は、同性のそういうのが好みなのか？」

第89話：サザーランド王都10

オーカスは呆れて笑う。周りを見て人氣が無いのを確認してから言った。

「いいえ。彼が鍵の継承者だったのか調べているのです。ケルティック家の鍵は水属性で青いブレスレットだと古代の文献にあったので、將軍の腕にブレスレットがあるか見ているのです。ブレスレットをしていないところを見ると、ケルティック將軍は鍵の継承者ではないようですね」

オーカスはラグにケルティック將軍のブロマイドを渡す。

ラグはブロマイドを見た。ラフな姿、水を象徴する青い模様が施された鎧を身に着けた姿、競技を楽しむ姿、どれも白い肌と金髪が目立つハンサムな顔立ちである。サザーランドの女はこういう男に惹かれるのかと思いつながら、オーカスの言う青いブレスレットを探すが、どのブロマイドにもブレスレットは見当たらなかった。土を踏む音がして、ラグが顔を上げると、アフタヌーンティーを持ったニックの姿が目に入る。ラグはオーカスにブロマイドを返した。

ニックはティーセットをテーブルに置きながら言った。

「早速ケルティック將軍のブロマイドを見えていますね。なかなかのハンサムでしょう。將軍の戦死が王都に知れ渡った時、女たちは泣いたもんです」

それからケルティック將軍の女性遍歴や武勇伝を聞く事になったが、將軍が鍵の継承者でないと知ったラグとオーカスにはどうでもいい話ばかりだった。

ケルティック邸を出て、水の鍵の手がかりが王宮にしかないことを知り意気消沈のラグとオーカスは宿屋に戻ろうと思い、ニックに本日のガイド料と夕食代を手渡した。

ニックは料金を受け取りながら言う。

「もしかして今日はこれで終わりですか？ まだ日も高いので別の

所を観光できますよ」

オーカスは脱力気味に言う。

「いいです。旅の疲れが残っているので、早めに帰って休むことにします。ニック。今日は有り難う」

ニックはラグに言う。

「なら時間外で料金はタダって事にしますんで、今から一杯、一緒にどうです？」

「いや。今日は朝から飲んでいるからやめておく」

ラグはニックの酒の誘いを断った。

ラグとオーカスはニックと別れて宿に戻った。

第90話：サザーランド王都11

部屋に入ってからラグとオーカスは言葉を交わさず時間ばかりが過ぎた。

ラグはシャワーを浴びて1日の汗を流し終わり、シャワールームから出てきてからは、上半身は何もまとわずにズボンだけはいて、ベッドに腰掛けて濡れた灰色の頭髪をタオルで拭いている。

オーカスは、ラグがシャワーを浴びている間に魔法通信を行ってローラン国と連絡をとっていたようで、窓際に立って外の景色を眺めていた。

「おい」

「あの」

日が沈み、ラグとオーカスは同時に呼び合う。そして同時に言う。

「何か？」

「先に言え」

こうなると、元々口数が少ないラグが先に言う事はない。

オーカスは少し間をおいてから口を開いた。

「水の鍵の継承者は、魔法攻撃が得意なケルティック將軍だと思っ
ていました。当てが外れて残念です」

ラグは頭を拭いていたタオルを肩にかけてから言う。

「その將軍に兄弟や姉妹がいるってガイドが言っていただろ」

「ええ。でも敵国の要人という事もあり、我が国の資料には鍵の継
承者の名が記されてなくて」

「それなら、俺やリー家のように、継承者が親という可能性もある
な」

「家族の誰が鍵の継承者でも、王宮に住んでいたら会うなんて無理
です」

オーカスは、窓にもたれて日暮れ時の外の景色を眺めながら会話を続ける。外から監視されているとも気付かずに。

「ラグは何を言おうとしたのですか？」

「日が暮れたし腹が減ったから、お前と飯でも食おうと思ってな」

ラグは適当に頭髪を掻き分けてから上着を着る。

「では何か食べに行きましょう」

オーカスは歩き出した。

ラグも一緒に歩いてオーカスの背中を軽く叩いた。

「元気を出せ。チャンスはそのうちやってくる。リクナの酒場で飲んでいた俺のように」

オーカスは横に並んで一緒に歩くラグを見上げた。

「いつも茶化してばかりなのに、今は優しくして下さるのですね」

「まあ。鍵の事だからな。他人事とは思えん」

ラグもオーカスを見下ろした。

二人は部屋のドアの前で立ち止まった。

第91話：サザーランド王都12

「我が国にある鍵は二つ。土の鍵を手に入れ、水の鍵は目前だというのに、それが王宮の中だなんて、いくら私でも王宮の中には潜入できません」

オーカスはラグの腕を掴んで言う。

「このままでは任務を果たす事ができない。私はこれからどうすればよいでしょう」

「敵国の土の鍵が一つ手に入っただけでも大手柄じゃないのか？」

オーカスはラグの左手を持ち上げて小指にある土の指輪に触れる。「でも、土の鍵はラグの左小指にあります。土の鍵は魔法が使えないラグを選びました。ローラン城内の魔法競技にも負けた事がない私より、魔法が使えないラグを選ぶなんて。こんな悔しい思いをしたのは生まれて初めてです。そもそも、ラグは何も言わず私について来ました。どうしてですか？」

オーカスはラグの腕を掴んで泣き出す。静かに泣きながら言葉を続ける。

「コトツク邸を失い、火の鍵を持つラグなら、ローラン国王の下へ行けばそれなりの待遇を得られるではありませんか。それなのに、貴族の身分を捨てただの剣士に成り下がり、命に関わる私の任務に付き合っただけで敵国に潜入するなんて」

「俺はな……」

言いかけて、オーカスの涙を見るのが辛くなったラグは、オーカスを自分の胸に寄せてそっと抱き締めた。

「俺の家族を殺した奴らの服にはサザーランド国の紋章があった。俺は家族の仇を討つために、お前についてここまで来たんだ」

ラグの告白に、オーカスは顔を上げた。

ラグもオーカスを見る。オーカスの青い瞳から流れる涙を親指でそっと拭いながらラグは優しい口調で話し続けた。

「でもな、軍人の時に平気でローラン城に出入りをしていた俺も、敵国の王宮を見ると怖じ気づいてしまっただろう事もできん。悔しだけが込み上げてくる。任務を全うしなければならぬ隊長のお前なら、なお更悔しいだろう」

オーカスは、ラグの胸にすがって自分の情けなさに涙を流した。

第92話：サザーランド王都13

ラグは、腕の中にいるオーカスの頬に伝う涙にそっと触れて拭っていく。

オーカスは顔を上げた。ラグに心を預け慰めを求めて甘え、涙を拭うラグの手に自分の手を添えて瞳を閉じた。

弱冠17歳のオーカスの肌はきめが細かくてバニラ色をしている。頬に触れた時の感触はマシュマロのようにふわりとして軟らかい。ラグの親指の横にあるオーカスの唇は吐息のような嗚咽を漏らし、奥にある舌がゆっくりと動いてラグを誘っているように見える。

ラグは優しい言葉をかけながら、オーカスの唇に引き寄せられている自分に気付いた。こいつは少年。男だぞ。と。

「そろそろ夕食を食べに行くぞ。俺は、腹が減って仕方が無い」
ラグはオーカスから離れた。手にはまだオーカスの軟らかい頬の感触が残っている。

軍にいた頃、泣いた仲間を励ました事は何度もあった。抱き合って男泣きをした事もある。しかし、頬にある涙を指で拭うのは女にしかした事が無い。男の涙を拭ったのはオーカスが初めてで、自らの意思で引き寄せて抱き締めてもいる。女ならいざ知らず、なぜ男のオーカスを抱き締めて頬に触れ、そして。

ラグは部屋から出たところで壁に手をついた。壁は硬くて冷やりとしている。熱が増す手を冷やしながら亡き妻に助けを求めた。

「オフエリア」

思い出の中にいるオフエリアは笑顔だが、背景が燃え盛るコトツク邸に変わるとオフエリアの顔は焼けただれて醜い姿に変貌する。

「私は、どこまで堕ちて行くのだ？」

元来の貴族口調で呟きながらラグが壁に手をついてもたれている

と、オーカスが心配そうな表情をしてラグの体を支えた。

「大丈夫ですか？ すいません。現役の隊長であり、鍵の継承者の護衛をしなければならぬ私が不甲斐ないばかりに、ご家族を失って間も無いラグの心情を考えもしないで負担をかけるような事をしてしまつて」

「いや。違う。お前のせいじゃない」

またオーカスを抱き締めそうになって、ラグは踏み止まった。心の中でオフエリアの名前をなんども繰り返す。オフエリアが亡くなったのは数ヶ月前。目の前の少年を抱き締めてしまうのは最愛の妻を亡くしたショックが原因だと答えを出してから、ラグは壁を突き放し勢いをつけて歩き出した。

「とにかく食事だ。行くぞ」

「はい。そうですね。何かおいしいものを、お腹いっぱい食べましょう」

オーカスは落ち着きを取り戻したようで、早めに歩くラグに歩調を合わせて宿屋を出た。

第93話：サザーランド王都14

二人は暫く歩き普段より高級な飲食店を選んで一緒に夕食を食べた。高級な飲食店を選んだのは辛い事を忘れるためと、ラグの好きな美味しい酒があればというオーカスの配慮のためだった。

しかしラグは思い出してしまった過去の悲惨な光景を酒で紛らわせるような事はしなかった。

オーカスも水の鍵を手に入られない現実に敗北感に似た思いを抱いていたが、もうラグの前で取り乱して泣く事はなかった。

最初は言葉が少なかったが、触れ合うほど互いの距離が近くなっていた二人は、食事が進むにつれ会話が多くなり、店を出る頃には宿で抱き合った事も忘れて二人は雑談に夢中になっていた。

帰り道は二人にとつととても楽しい時間だった。

何気ない話にラグは笑って答え、オーカスはラグの気さくな一面を知り、全てを失う前のラグ本来の姿を見たような気がして、ラグのために今の時間が少しでも長く続くようにと、オーカスは心の中でユーフォリアの神々に祈った。

しかし、どうしても鍵の宿命は棘のある鉄線となってラグの体に巻きついてくる。

笑顔で話す二人の帰り道に、謎の集団が待っていたのだ。

服装がバラバラなのを見ると金で雇われた傭兵の集まりのようだ。覆面の無いその顔は、全員がオーカスとラグに注目をしていた。

オーカスとラグは、無関心を装い通り過ぎようとするが、集団は二人の前に立ち憚った。

「the keysか？」

「なんだ？ 訳が分からん」

ラグはオーカスの肩を抱いて押して歩く。

集団はラグとオーカスを取り囲んだ。

オーカスは静かに手を動かして魔法器に触れる。

集団は一斉に剣を抜いた。全員の剣に魔法器がついている。ラグは一瞬にしてオーカスの横から消え去った。同時に集団の何人かが、魔法を発動させることなく、ラグに斬られて倒れた。ラグの動きはとても早い。

第94話：サザーランド王都15

オーカスも遅れてはいない。自分の周りに雷の魔法陣いかずちを作り、周囲にいた魔法剣士に雷を浴びせる。

集団は思った以上に人数が多かった。倒された仲間の屍を踏み越えてオーカスとラグを取り囲み攻撃を繰り返す。

場所が王都という事もあり、事を静かに終わらせて宿へ帰りたいラグとオーカスは思うように戦えず、不利な状況に追い込まれ逃げ道を探しながら戦い続ける。

その戦いの最中にニックが現れた。集団の中に飛び込み、片足を軸にターンをして両手にある短剣で相手を斬っていく。短剣は腿や腕、脇の下や首などを通り確実に相手の動脈や静脈を切断していく。斬られた相手は血を噴き出して倒れ、出血多量の即死状態だ。

集団は戦いに慣れているようで、ニックの戦闘を即座に分析して戦闘方法を変更してきた。集団はオーカスたちの動きに合わせて三つに分裂した。ニックを取り囲んだ集団は、ニックが身のこなしの軽い両手の短剣使いという事で、ニックの行動範囲を狭めて動きを封じ、至近距離で魔法攻撃をしてきた。

ニックは攻撃を避けたり水の分身を作って身代わりにしながら戦い、集団の動きを目で追って冷ややかに笑うと、両方の短剣に備わっている魔法器を作動させた。

「今のうちに逃げた方がいいんじゃない？」

集団はニックの笑顔を見て気付く。ニックを取り囲み追い詰めたのではなく、ニックの戦法によって誘き寄せられたのだと。

集団が気付いた時には既に手遅れだった。地面や空中に円が現れ、揺れる波紋となって魔法陣は広がりを見せ、牡丹模様の呪文の曲線を描く。

魔法陣に捕らわれた敵は逃げようとするが足を動かしたとたんに即死した。

ニックはその後も踊っているような軽快なステップで魔法剣士を倒して進みオーカスと背中合わせになると、呼吸を整えながら短剣を構えた。

「ちよつと、俺のお客さんを襲わないで欲しいな」

オーカスは、ニックの背が自分の背に当たるのを感じながら言った。

「ニック。どうしてここに？」

ラゲも瞬間移動をして、オーカスとニックの二人に背中を合わせる。

「もうガイドの仕事は終わったはずだろ？」

第95話：サザーランド王都16

「ガイドの仕事って、夜のほうがハードなの」

ニックは両手の短剣を淡く輝かせて目の前の魔法剣士と戦う。

オーカスは飛んで来た魔法の属性を瞬時に把握して、弱点になる反属性魔法を投げつける。

「まだ夜のガイドを諦めてなかったのですね」

「何！ 夜のガイドだと？ それは、どういう事だ？」

ラグは斬りかかってきた魔法剣士の剣を受け止めてから斬り倒す。ニックから詳しい話を聞きたいラグは、瞬間移動で魔法剣士の間を縫うようにして走り抜け、一人で残りの魔法剣士を全て倒してしまっ

た。オーカスは周囲を警戒するが、もう新たに敵が現れる事はなかった。

ニックは、ラグの見事な戦い振りに称賛の口笛を鳴らす。

「すげえな。あんた。魔法を使わずに複数を同時に倒せるのか！」

ラグは剣を手早く鞘に収め、身元を確認するが、どの魔法剣士も身元が判るような手掛りは無かった。手掛りが無ければ、残るは気になる事を言ったニック。ラグはニックに歩み寄り襟首を掴んだ。

「おい。夜のガイドってなんだ？ 奴らに俺たちの居所を教えたのはお前か？ いくらで俺たちを売ったんだ？」

オーカスが仲裁に入る。

「違います。ラグ。ニックから手を放して下さい」

ニックはラグに揺さ振られながら言う。

「俺はこの子に夜のガイドをしてやろうかと」

「なんだと！」

言葉の途中で、ラグはニックを殴った。

ニックはよろけて倒れた。

オーカスはニックに駆け寄って言う。

「ラグ。乱暴はやめて下さい。この人は私たちを助けてくれたのですよ」

ラグは拳を握ったまま言った。

「このガイドの野郎は、お前の少年の体が目的で助けたんだ」

「それは昼間に言われたので知っています」

「言われただと。なんですぐ俺に言わないんだ！」

ラグの拳に力が入り震えている。

第96話：サザーランド王都17

ニックは殴られた左の頬に触れ顎を動かしながら立ち上がる。

オーカスはニックの体を支えながら言った。

「私を子ども扱いしないで下さい。私はそこまでラグに守られなければならないほど弱くありません」

ニックは言い合いをしているラグとオーカスの間に入った。

「ちよつと待つて。大きな誤解をしてる。俺はこの子より、あんたのほうが好みなんだ」

オーカスを下がらせてラグの前に立った。

ラグの怒りは一気に頂点に達した。

「貴様！」

ラグはまた拳を繰り出す。

今度のニックは、ラグの拳を右手のみで掴んで受け止めた。余裕のあるニヒルな笑顔を浮かべて、瞳はラグを愛しそうに見つめている。男口調だが、先ほど殴られた左頬を押さえている仕草は女っぽい。

「恰好いい人に惚れちゃうのは仕様が無いでしょ。そのハンサムな顔と逞しい体で、俺の前に現れたあんたが悪い」

その横でオーカスが驚きの声を上げた。

「ラグが好み！ ええええ！！」

ニックは赤い髪を揺らし、緑の瞳でにつこりとする。

「俺は、あんたみたいなワイルドな男が好きな訳」

ラグはニックに掴まれた拳を振り払った。身を翻して去って行く。

「オーカス。帰るぞ。薄気味悪い奴に構ってられるか」

「あ、はい」

オーカスはニックを見るがすぐにラグを追いかけて行く。

ニックが触れている左頬が淡く光り腫れが治っていく。魔法でラグに殴られた頬を治療したようだ。顎を動かして腫れのひき具合を

確認すると、去って行くラグとオーカスに言った。

「連中は、居所を突き止めた。宿に戻ったらすぐに旅立つんだ」

オーカスとラグは立ち止まる。

「お前は一体」

ラグは振り返るが、もうそこにニツクの姿はなかった。

オーカスは、ニツクの立っていた場所を見つめながら言った。

「音も立てず、足跡も残さずに消えてしまっなんて、ただのガイドではなさそうですね」

「敵か味方が分らんが、とにかくあいつが言ったとおり急いで戻るぞ」

「はい」

ラグとオーカスは、急いで宿に向った。

第97話：サザーランド王都18

オーカスは走りながら先ほどの戦闘を思い出してニックを分析する。

「ニックの戦い方は訓練されたアサシンそのものでした。即死魔法の成功率もほぼ100%。二つの魔法器を同時に使っても、平気でいられる体力と精神力は、強い魔力を持ったアサシンだと思います」

ラグは急ぎ足で宿に向かいながら言う。

「俺は、殺傷能力を持った奴にケツを狙われたんだな」

「あははは」

オーカスは急に笑い出し、ラグはオーカスにも怒る。

「笑い事じゃないぞ」

「だって、あの人の好みがラグだったなんて」

オーカスが笑っていると、ラグは無言で走りオーカスから離れてどんどん先を走って行く。

「思い出したくもない」

「ラグ。待って下さい」

オーカスは笑いながらラグを追うようにして急いで宿に向かった。二人が宿に到着すると、既に宿の前に剣士の死体がいくつも転がっていた。

「宿も襲われたか」

警戒して腰の剣を抜くラグの前に、また魔法剣士の集団が現れた。オーカスは、剣を握り魔法器を作動させる。

「先ほどの戦いで、彼らの戦闘パターンは分析済みです。ここは私一人で大丈夫ですので、ラグは部屋にある荷物を取りに行ってください」

「分かった。頼んだぞ」

ラグが走り出した時、集団は急に倒れた。

「なんだ？」

ラグは立ち止まる。

オーカスは集団に駆け寄った。

「即死魔法を受けたようです」

「って、事は」

ラグが周囲を見回すと、あのニックが宿の玄関から出て来た。

「お二人さん。遅いって」

ニックの背には氷の羽でできた翼がある。ニックは空を飛んで先回りをしたようだ。

第98話：サザーランド王都19

オーカスが言う。

「それは氷の魔法。血流を凍らせる事ができるから即死魔法の成功率が高いのですね」

ニックはオーカスに意味有りげに微笑んでから、ラグの足元に荷物を投げた。

「部屋にあつた荷物を全部持ってきた。地竜に載せて、一刻も早くここから逃げるんだ」

「礼は言わんぞ」

ラグは荷物を持ち上げ、手早く地竜に載せて飛び乗る。

オーカスも急いで支度をして地竜に乗る。

そのオーカスの後ろにニックが跨った。

「げ！ 貴様！！」

ラグが怒って言うよりも早く、ニックはオーカスが握っている手綱を握って地竜を走らせた。

ラグは地竜の尻を叩いてオーカスとニックが乗る地竜を追いかける。

「おい。こら！ 待て！！」

恐ろしい形相で追いかけてくるラグに、ニックは愛を込めた投げキッスをしてからオーカスに言った。

「悪いけど、俺も逃げないと命が危ないんだよね」

オーカスは地竜に揺さ振られながら言う。

「あなたを巻き込んでしまつてすいません」

「いいつて。巻き込まれたっていうより、俺が飛び込んだって言うたほうが正解だから」

「え？」

ニックはオーカスの前に左腕を出す。褐色の肌の上に何も無いが、ニックが呪文を呟くと腕にサファイア色のブレスレットが現れた。

針金状の青い金属がミサンガのように編んである。

「あ！ 水の鍵。あなたが鍵の継承者の？」

オーカスが首を動かして背にいるニツクを見ると、ニツクはエメラルド色の瞳でウインクをして挨拶をした。

「そう。俺が水の鍵の継承者。ニコラス・グラン・ケルティック。今までどおり、ニツクと呼んでくれ」

間近で見るニツクの顔は、髪と肌の色が違う以外はケルティック將軍に似て甘いマスク。ニツクが好きなのがラグだと分かっているも、間近でニツクを見ているオーカスの頬は赤くなった。

その後ろで、まだ何も知らないラグは、

「どこへ行く？ こあらああ！！」

血走った怒りの眼を剥き出しにして、オーカスとニツクが乗る地竜をひたすら追いかけていた。

第99話：夢の中の庭園

花々に囲まれた噴水のある庭。

ラーグは、また白いテーブルがある椅子に座っていた。服はコトツクの伝統に基づいた正装になっている。

そう。ここはケルティック邸の庭園。

テーブルの反対側には、賢者コトツクと、賢者リーと、ケルティック將軍にそっくりの金髪の紳士が座っている。多分彼が賢者ケルティックなのだろう。

室内着のラフな服装をした金髪の紳士は紅茶を飲んでいたが、カップを置くとラーグに言った。

「初めまして。コトツクの末裔よ。ここでしか君と会話ができないのが残念です。賢者リーが、かなり骨を折って君を癒しているのだが、君は一向に回復する兆しが見えない。医師である私も君の治療を試みているが、あいにく私は水の魔法使いでね。相反する火の属性の君を直接治療すると、君の火の魔力によって私の水の魔力は殆ど相殺されてしまつてね。我が身に返ってくる相殺時の反動も大きく、君の治療に困難を極めている状態です。完治させられない私を許して下さい」

ラーグは、話の筋が全く分からない。

「私の治療つて、どういう事ですか？」

「君の表層意識にいる、これだよ」

賢者ケルティックが中指と親指で指を鳴らすと、オフエーリアとジェイローが現れた。二人は血まみれで全身の肉が腐ってただれている。

酷い腐敗臭と目を覆いたくなるほど肉組織が見えている二人に、

ラーグは悲鳴をあげ椅子から立ち上がって言う。

「許してくれ。私は、私は……」

賢者リーは取り乱すラーグを見て言う。

「賢者ケルティック。鍵の魔力を使っても癒しが効かないのは初めてで、どうすればいいか分からないの」

賢者コトックも言う。

「一時的に会話はできたのだが、今では全く会話ができん、いつになれば私との会話が可能になるのか」

金髪の紳士、賢者ケルティックはまた指を鳴らす。

するとラグの目の前にいたオフエーリアとジェイローは突然消えた。

ラーグは肩を動かして呼吸を荒くしながら言う。

「消せるなら、なぜもつと早く消してくれないのですか？ もつと早くに消してくれていたら、私はこんなにも苦しむことはなかったのに」

賢者コトックは言う。

「ラーグよ。真実から目をそらすことは、解決にはならん」

賢者ケルティックも言う。

「目をそらそうとも、見えないようにしようとも、目の前にあることに変わりはないんだよ」

ラーグの両腕を見えない何かが掴む。ラーグの腕が指の形に凹み、そこに血がつき滴り落ちていく。

「どういう事だ？」

今度は、ラーグの耳元でオフエーリアの声とジェイローの声が聞こえる。

「助けて」

「見捨てないで」

姿は見えないが、オフエーリアとジェイローはラーグの腕を掴んでいるのだ。

ラーグは、腕を掴まれ逃げれなくなって大声を上げる。

その声は庭園中に響き渡り、賢者リーが悲痛の表情を浮かべて、錯乱するラーグを見ている。

「かわいそうなラーグ。どうすれば貴方を癒して差し上げることが

できるの」

賢者たちが見守るなか、ラーグは大声を上げ続け、ついには意識を喪失してしまった。

第100話：林の中で1

ラグは気がついた。いつもの光を目蓋に感じる。最近この光を感じると、全身の緊張がとれて安堵感に包まれるようになった。そう思いながらラグは目を開けて起き上がった。横を向けば、いつもの如くきちんと身形を整えたオーカスがいて外の景色を眺めている。きつと魔法通信を使ってローラン国に報告をしていたのだろう。

オーカスはラグの目覚めに気がついて、振り返った。

「また、うなされていたようですが？」

ラグが起きた時にいつも聞く言葉なのだが、これも最近は心地良いと、ラグは思いながら口を開く。

「おはよう」

「おはようございます」

オーカスは笑顔でラグに朝の挨拶をする。

だが、ラグが幸せを感じた時間はここで終わる。なぜなら今はもう一人いるからだ。

「おはよ。ラグ」

ラグは聞きたくない声の響きを背中から受けて寢床から飛び出した。

「まだ、いたのか！」

オーカスと異なる低音ボイスは眠たそうにゆっくりと言う。

「酷いな。その言い方」

この声の持ち主は、ニック。今はラグの隣の寢床にいる。水の鍵を持つ彼は、昨夜襲われたラグたちを助けて一緒にサザーランド国の王都を逃げ出し、途中にあった林の中で野宿をして、ラグたちと共に一夜を明かしたのだ。

ラグは自分の支度を忘れて、剣を持ってニックの動きを警戒している。

「ケルティック家は代々サザーランド国王に仕えているんだよね？」

敵国の要人である貴様を信じられるか！」

「愛するラグを命懸けで助けたのに」

ニックは悲しそうな表情で剣を構えているラグを見つめてから、ラグを刺激しないようにゆっくりと動いて起き上がった。水の魔法を使い赤い髪の寝癖を直すと、掛け布団をめくって悩ましげなポーズをいくつかつけて自慢のブーメランプルーツをラグに披露した。そう。ニックはパンツ1枚しか身に着けていなかった。服はサイドテールブルに置いてある。

ラグは面食らい、ニックが醸し出しているアダルト男性の色気を受けて鳥肌を立てている。

ニックはマイペースにゆっくりと腕を動かし背伸びをして、褐色の体は更に様々なポーズをとって足腰のスジを伸ばしていく。ヨガのようなポーズをするのは、しなやかに動いて戦うアサシンの準備運動だったりする。

ラグは見るんじやなかったと後悔をして自分の支度をすることにした。

オーカスは、そんな二人を見てクスリと笑った。

「朝食の準備をしますね」

ラグは黙って支度を始めている。ニックのブーメランプルーツと男の色気を真に受けてシヨック状態で言葉が出ないようだ。

だが、ニックは違った。以前から二人と旅をしていたかのように、とても慣れた様子で返事をした。

「うん。オーカス。宜しく」

第101話：林の中で2

昨夜、急いで逃げ出した事もあって積み荷に食料は積んでなく、朝食のメニューはとても淋しいものとなっている。人数は三人に増え、当然朝食の一人分の量も少ない。

オーカスはすまなそうに盛り付けて、ラグとニックに手渡した。「すいません。この辺りは木の実ぐらいしかなくて」

「アルランドでの食事に比べたら、木の実もご馳走だ」

ラグはオーカスから朝食を受け取って食べるが、ニックは嫌そうに朝食を見て言う。

「こんなの食べたくないな。土の指輪を使って朝食を作ってよ」

「はあ？ なんの冗談だ？」

ラグは、ニックに襲われないように距離をとりつつ手早く食事を終える。

ニックは朝食を置いて言った。

「あんたのキー・スピリッツだって言ってるだろ？ 土の鍵の魔力を使えば、簡単に食物を生み出せるって」

「キー・スピリッツってなんだ？」

ラグは、ニックの言う事が分からない。

「あんたの左小指にある指輪だよ。土の鍵の継承者なら賢者リーの声が聞こえるだろ？」

「いや。聞こえん。夢でなら賢者リーと話したことはあるが」

「夢？」

ニックが困惑した表情になる。

オーカスがニックに説明をした。

「ラグは、火の鍵の継承者なのです。左耳についてるあのイヤークラフが火の鍵なのですが」

オーカスが示したイヤークラフを見てニックは驚く。

「火の鍵の継承者が、なんで土の鍵を継承してるんだ？ てか、そ

んなの物理的に無理だ。俺たち keys は、賢者の末裔ごとに定められた属性を持つて生まれてくる。属性は絶対に変えられないから別の属性が生まれる事はない。それに鍵には意思があつて同じ属性の者しか選ばないはずだぞ」

オーカスは言う。

「土の鍵がラグを気に入つたようで、ラグの左小指から抜けないのです」

「マジかよ！ 継承者が二つの鍵を継承するなんて、秘宝の歴史始まつて以来の出来事だぜ。しかも賢者リーに気に入られるなんて、俺のラグへの愛はどうなるんだ」

言つてからニツクは脱力した。

第102話：聞こえない導き

ラグは不快な表情をし、オーカスは苦笑いを浮かべる。

ニツクは脱力しながら言葉を続けた。

「賢者ケルティックが、キー・スピリッツの声が聞こえないラグに伝えてくれ。だと。コトツク、リー、ケルティック、そしてシーライトの四つの地が交わる空の彼方に秘宝は存在する。だとさ」

キー・スピリッツの声を聞き、導きに従う。それは生前キリエラが行っていた事。ラグはキー・スピリッツと会話をしていた母の姿を思い浮かべ、何もできない自分に対して表情を歪めた。

その横でオーカスは考える。

「賢者ケルティックは、私たちに「四つの地が交わる空の彼方へ行け」と言ってるのでしょうか？」

「だろ」

ラグは最小限の返事をして旅立つ準備を始めた。機嫌が悪くなる
と口数が減るラグの無口病が再発したようだ。

ニツクはまだ朝食を目の前にして座っている。

「やっぱり食べたくない。見た事のない木の実を口に入れるなんてイヤだ」

オーカスは朝食を片付けながら言う。

「通りがかった町で食料を調達する予定がありますので、その時にニツクの好きな食べ物を買いましたよ」

ニツクは、オーカスの手を握った。

「オーカス。感謝するよ。君が女性なら俺の三番目の奥さんにしたいくらいだ」

「三番目の奥さん！？」

そういえばケルティック家は代々一夫多妻の家族構成だったとオーカスは資料にあった情報を思い出す。ニツクは妻帯者なのだろうか？

無言で地竜に荷物を載せていたラグは、手を握り合っている二人に気付いた。ラグの心から劣等感が消え去り、代わりに煮えたぎる熱いものが込み上げてくる。

「いつ俺たちの寝首を掻き切るか分からん奴のために食料を買うな。貴様は飢え死にしろ！」

ラグはオーカスに言ったあと、ニツクに荒い言葉をぶつけた。

賢者ケルティックが言う四つの地が交わる場所は、草木が育たない荒野が広がっている。土地は痩せていて作物が実らないため、当然町も村も無く、人も住んではない。

ラグたち三人は、キー・スピリッツの導きに従って何日もかけて地竜で移動し、その荒野にたどり着いた。戦争による戦いはここでも行われ、荒れた地にはシーライト将軍が魔法で落としたという飛空艇の破片があちこちに散らばり、ラグの背丈ほどある金属板が地面に刺さっていたりする。

第103話：名も無き土地1

オーカスは地竜に乗って移動しながら言った。

「最近、この辺りにはスクラップ屋が住み付き、廃材を売って生活をしているそうです。「名も無き土地」と呼ばれているこの土地に、そのうち町の名前がつくかもしれませんね」

ニックはオーカスの後ろで赤い髪を揺らしながら言う。

「なら、名前を考えればいいんでないの。「交わりの地」ってどうよ？」

間髪を容れずにラグが怒り口調で言った。

「貴様が「交わりの地」と名づけたら、しゃれにならん。ゲイで極彩色の偽ガイドに名前をつけられた土地など誰が喜ぶか」

「才色兼備な俺を、極彩色呼ばわりとは、つれないおっしやりようだわ。あんたの連れは」

ニックはオーカスに泣きついた。

「貴様！ いい加減にしろ！ オーカスに抱き付くな！」

ラグはまた腹を立ててニックに暴言を吐く事になった。

雲一つ無い快晴の空。この空の果てに秘宝があると賢者ケルティックはニックに言ったようだが、それらしき物は何も見えないとラグは思う。

オーカスは辺りを見回す。

「ローラン国王に鍵と秘宝の情報を送ったら、秘宝探索の使者を派遣するので、名も無き土地で合流するようにと指示を受けたのですが、その使者はどこにいるのでしょうか」

ラグも散らばる破片を見渡しながら、いつもの冷やかしく口調で言う。

「目印として、胸のポケットに黄色いハンカチを入れておくように頼んでないのか？」

ニックも使者探しを手伝いながら言う。

「せめて待ち合わせの場所を指定しておかないと。こんなに広くては、すれ違うのも難しい」

「待ち合わせ場所を指定したら、お前がサザーランド国王に知らせるだろ」

ラグは、まだニックが信用できない。

ニックは諦め半分で言う。

「ラグが、キー・スピリッツと会話ができれば、俺の疑いが晴れるんだけど」

ニックは言っているうちに空を飛ぶグリフィンを見つけた。

「あ、あんな高い所で、グリフィンが飛んでるわ」

上半身は驚、下半身はライオンの姿をした、体長十メートル以上はあるかと思われるグリフィンが悠々と空を飛んでいる。

第104話：名も無き土地2

オーカスも空のグリフィンを見る。

「こんな砂漠地帯にも生息しているんですね」

ラグはグリフィンがくわえているものに注目する。

「あのグリフィンがくわえているのは、ひょっとして人じゃないか？」

ラグが言った時、グリフィンは急降下をしてラグたちの目の前に舞い降りた。

その時に起こった突風が砂を巻き上げ、ラグたちに吹き付ける。目に砂が入らないようにラグが手で庇を作ってグリフィンを見ると、グリフィンはくわえていた人を舌に載せてから飲み込んだ。

ラグは二人に叫ぶ。

「逃げる！ 人喰いグリフィンだ！！」

ニックはオーカスが握っている手綱を掴んで地竜の尻を叩く。

「ここに町ができないのはあれのせいじゃないのか？」

「その可能性大有りだ」

ラグは手綱を引いて地竜の頭の向きを変える。

地竜は前足を上げて地面を蹴って逃げ出した。

グリフィンは獲物を見つけた喜びで、声高々に鳴いて、大きな翼を広げラグたちを追いかける。地面すれすれに飛び、鷲の首を伸ばしてラグたちを捕食しようとするが嘴が届かない。グリフィンの瞳は双方の地竜を見比べて、移動速度の遅いオーカスとニックの二人を乗せて走る地竜の後ろ足を、ライオンの爪で引っ掛けた。地竜は横転し、オーカスとニックは地面に投げ出される。

「大丈夫か？」

ラグは地竜から飛び降りる。

オーカスは地面に落ちる前に魔法で体を浮遊させた。

「大丈夫です。こうなったら私の魔法で」

ニツクは身を翻して着地する。

「気をつける！ グリフィンが起こす風は強力だぞ」

グリフィンは降り立ち、地面の上で足踏みをしながら翼をばたつかせた。

グリフィンの強風を受けて、浮いていたオーカスは、紙切れのように吹き飛ばされる。

「わっ！」

「オーカス。体を丸くしろ！」

ラグが瞬間移動をしてオーカスが地面に叩きつけられる前に受け止めた。

「ラグ」

オーカスはホッとする。

第105話：名も無き土地3

ニックは腕に水のブレスレットを現した。淡く光るブレスレットをグリフィンに向けると、ニック自身も淡く光りだす。

オーカスはラグに支えられながらニックを見て言った。

「あの青いブレスレットが、水の鍵です」

ラグはニックの腕に注目する。

「さっきまで、あいつの腕に無かったぞ」

「普段は幻術で見えないようにしてるってニックが言っていました。古代の文献には、水の鍵の魔力は相手のステータス変化だと記されていました。ニックが水の鍵の魔力を使ってグリフィンに何をするのか、よく見ておいて下さい」

「あいつは初めて出会った時から、幻術の魔法を使いブレスレットが見えないようにしていたってことか？」

「そういう事です」

「何て奴だ！」

オーカスとラグが話しているうちに、ニックの集中力は高まり、ニックがブレスレットの腕を振った時、グリフィンの立っている場所を中心に、地面に水滴が落ちたような波紋が起こった。

グリフィンは苦しみ出す。

「古代の文献によると、水の鍵の継承者は範囲魔法を使います。範囲を指定した場所に波紋が見えるのが特徴で、その中にいるものはステータス異常になり、場合によっては即死させる事も可能のようです」

オーカスが言い終えたあと、グリフィンは苦しそうに口を開けて地面に倒れた。

ラグは動かなくなったグリフィンを見て、オーカスを連れて瞬間移動でニックに近づいた。

「死んだのか？」

ニックはブレスレットのある腕を下ろして言う。

「いや。気絶しただけ」

「なんで仕留めないんだ？ また人を襲うぞ」

ラグは止めを刺そうとして剣を抜くが、ニックは止める。

「待て。グリフィンにはハンターに渡せば高値で売れる」

「金より俺たちの命の方が大事だろ」

ラグの声でグリフィンが目を開けた。瞬きをして言い合いをしているラグとニックを見る。

第106話：名も無き土地4

オーカスが気付く。

「あの、グリフィンが」

ラグとニックは同時にグリフィンを見た。

ニックはグリフィンを見ているが、言葉はラグに対してだったりする。

「ラグの声がでかいから」

「仕留めないお前が悪い！」

ラグは怒ってニックに言うが、アメシストの瞳は身を起こすグリフィンを映している。

動き出したグリフィンを見ているオーカスは、恐怖で叫び声になってしまう。

「言い合いをしている場合じゃないですよ」

起き上がったグリフィンを背に三人は全速力で走り出した。

ラグは逃げながらニックに言う。

「ハンターに渡すために眠らせたんじゃないのか？」

「気絶だと言っただろ。あんたが騒がなければ、今頃は俺の魔法で眠ってたんだ」

「真つ黒な貴様の腹を棚に上げて、俺のせいにするな！」

オーカスが剣についている魔法器に手を当てながら言う。

「言い合いをしないで下さい。こうなったら私の魔法でグリフィンの動きを止めます」

グリフィンに雷を落いかずちとすが、羽から煙が上がるだけでグリフィンにさほど効いていない。

「やっぱり集中時間が短いと、強力な魔法が練れませんね」

「俺の金蔓に傷をつけないでくれ」

ニックが声を上げた時、グリフィンに光線が降り注いだ。

グリフィンは一気に燃え上がる。グリフィンは全く動かなくなり

音を立てて地面に倒れた。

「俺の金蔓が燃えていく……」

ニックはがっかりした表情で地面に座り込んだ。

ラグがオーカスに言う。

「今のはお前の魔法か？」

「いいえ。飛空艇から発射された光線です」

「飛空艇だと！」

ラグが空を見ると何隻もの飛空艇が浮かんでいた。飛空艇にはローランの国旗があり、飛空艇団の中央に王家の紋章を掲げた飛空艇が浮かんでいる。

軍を退役したラグには懐かしく、しかし戦争の辛かった戦いを思い出してしまうため見たくない光景でもあった。

第107話：名も無き土地5

オーカスは飛空艇を見上げながら言う。

「私の連絡を受けて、王直属の飛空艇団が来てくれたようです。これでもう安心ですね」

ラグは激戦だったアルランドの戦いを思い出して言う。

「飛空艇団を察知して、サザーランド国の軍がこなければいいが」
ここで両国の軍が睨み合いになれば、またここが戦場になる。ラグの胸に心配がよぎる。

ニックは立ち上がって言った。

「こんな大きな飛空艇が何隻も移動したらサザーランド国だって気付くだろ。こりゃサザーランド軍も来るぞ。悪いが俺は逃げる。戦いに巻き込まれるのはごめんだからな」

ニックは地竜に跨った。

ラグが叫ぶ。

「おい。それは俺の地竜だぞ」

ニックが逃げようとした時、地竜の頭に矢が刺さった。地竜はよろめいてニックを乗せたまま倒れる。

ニックは地竜から投げ出された。怒りが込み上げてくる。

「どういふつもりだ？」

ニックが起き上がり様にラグとオーカスを見ると、その後ろで着地する飛空艇が見えた。

飛空艇から声がする。

「今より君たちはローラン国の保護下に入る。この地はサザーランド国と隣接しているため、指示が聞けぬ者は不審者と見なし攻撃対象とする」

ニックは唾を吐いた。

「武力行使か。なんちゅう国だ」

「まだ国同士の争いは終わってないという事だ」

ラグは、またイヤなものを見てしまったと、地面に横たわる地竜から目を背けた。

着陸した飛空艇はかなりでかい。王家の紋章のある飛空艇から小型艇が飛び立ちオーカスの前に着陸する。

オーカスは地面に片膝をついて小型艇から出てきたローラン国王を迎えた。

「直々の出迎え痛み入ります」

ラグも自然と体が反応し地面に片膝をつけた。

小型艇から親衛隊を引き連れて出てきた王は軽装ではあるが鎧を身にまとい、ローラン国の紋章が刺繍されたマントを羽織っている。ローラン国王はブーツの飾りを鳴らしながら歩いてオーカスの前に立った。

「よくぞ我が命を果たした。シーライト将軍。大義である」

「はっ」

シーライト将軍と呼ばれたオーカスに、ラグは体の血が逆流するほどのショックを受けた。だが、自国の王の御前で頭を上げオーカスに聞き質す訳にはいかず、黙って地面を見続ける。

第108話：名も無き土地6

その後ろで親衛隊が小走りをする足音が聞こえる。

直後にニックが声を上げた。

「何をするんだ。放せ！」

ラグが後ろを見ると、ニックが取り押さえられている。ラグは王に進言した。

「恐れながら、あの者は襲われた我々を助けてくれた、いわば命の恩人。丁重に扱って頂きたい」

ローラン国王は満足な表情を浮かべて言う。

「久しいのう。ラーグ。アルランドの英雄としてそちに褒美を取らせたのが、昨日の事のように思える」

「退役をし、地方に下った私のような者まで覚えていて下さり、恐悦至極に存じます」

ラグは戦争の惨劇に怯えていた過去を思い出した。王の御前のため片膝をつけて頭を下げたままだったが、ラグの呼吸速度は早くなり、小走りでもしたかのように口から息を吐き出している。

ローラン国王はニックを見た。

「あの者は、サザーランド国のケルティック家の者だと、シーライト將軍より報告を受けておる。丁重に扱うが、もしもの事を考え、常に監視をつけることにした」

ニックは親衛隊に掴まれた腕を振る。

「だったら放せ」

ローラン国王は親衛隊にニックから手を放すように指示を出す。

親衛隊はニックから手を放した。

ニックは掴まれた手をさすって、親衛隊の足元にまた唾を吐く。

ローラン国王はニックに冷たい視線を送っていたが、またオーカスを見下ろした。

「シーライト將軍。鍵が4つ集まり、秘宝がこの地の空にあるとい

「う事だが？」

ローラン国王は秘宝を探して空と大地を見渡すが、1年前の戦争で打ち落とされた飛空艇の残骸しか見えない。

オーカスはローラン国王の顔色を伺いながら丁重な趣で答えた。

「水の鍵の継承者の話によると、この地の上空に秘宝があると、賢者ケルティックが伝えたそうです」

「まあ、よい。とりあえず、鍵を集め王家に伝わる儀式をここで行おう。それで上空に本当に秘宝があるのかが判る。そちたちも立つがよい」

王の言葉のあと、親衛隊が立ち上がったオーカスの下へ行く。

オーカスはタートルネックの中に手を入れて、オパールのように乳白色で虹色の艶があるペンダントを取り出した。それを黙って親衛隊に差し出す。

次に親衛隊はラグの下に行く。だが、ラグは立ったまま動かない。

第109話：名も無き土地7

ローラン国王は不審がつて聞く。

「どうしたのだ？ ラーグ。なぜ鍵を差し出さぬ？」

オーカスが言う。

「恐れながら、火の継承者は現在火の鍵と土の鍵を身につけておりますが、キー・スピリッツの声が聞けず、鍵もこの者から離れないのです」

「なんと！」

ローラン国王の目が好奇心でいっぱいに開かれ、ラグを見る。王はラグに近づいた。

「鍵は、英雄が好きとみえる」

ローラン国王は笑い声を短く漏らし、ラグの左耳に手を伸ばした。火の鍵であるイヤークフを触る。

ラグは言う。

「恐れながら、母につけられてから鍵が取れた事は一度も無く」

60歳を過ぎているローラン国王は、年若い火の鍵の継承者の苦悩を察したようで、それを気づかうために優しい笑顔を浮かべながら言った。

「案ずるな。余は生まれた時より全ての鍵を身につける事を許された者。王なのだ。体の力を抜け。アルランドの英雄ラーグよ」

ローラン国王がラグの左耳に触ると、イヤークフはするりと取れた。

ラグは言葉が無いものの驚きの表情に満ちている。

ローラン国王は続いてラグの左小指にある土の指輪も抜き取った。ラグは信じられないといった表情で指輪があつた左小指に触れる。次に親衛隊はニックの下へ行くが、ニックは親衛隊に鍵を渡そうとはしなかった。容赦は無いぞと親衛隊に魔法器を突き付けられるニック。

ローラン国王はそんなニックにも近づいた。

「賢者ケルティックの末裔よ。水の鍵は儀式を終えたらそちに返すゆえ、今は渡してくれぬか？」

ローラン国王はニックに手を差し出す。ニックは親衛隊が突き付ける魔法器を見ながら、イヤそうに腕からサファイア色の水の鍵を外した。

「脅されているとしか思えないんだが」

エメラルド色の瞳は警戒心に満ちている。ニックは、ローラン国王の顔を睨みながら水の鍵を手渡した。

第110話：名も無き土地8

ローラン国王はニツクの目の前で水の鍵を腕につける。そして土の指輪を填め、火のイヤークフを耳につけ、ペンダントを首に提げた。

「おお。賢者よ。これがキー・スピリッツの声なのか」

ラグに聞こえない賢者の声がローラン国王には聞こえるようだ。

「賢者よ。どうか我が国を救うべく願いを聞き入れ給え」

ローラン国王は一人歩いて飛空艇団から離れて行く。少し離れてからローラン国王は空に両手を掲げた。四つの鍵は輝き、その輝きはローラン国王を包む。その後、機械音声がローラン国王から響いた。

『現在、ノアに接続中。接続完了。ドクター・リーのプロダクトキーを送信。ドクター・ケルティックのプロダクトキーを送信。ドクター・シーライトのプロダクトキーを送信。ドクター・コトックのプロダクトキーを送信』

ラグはローラン国王の手の先にある空を見上げる。

「一体何が始まるんだ？」

暫くして空に黒い点が見え、それがどんどん近づいて大きくなり、黒い点は名も無き土地を覆い隠すほどの巨大な飛空艇となってローラン国王の頭上に現れた。

秘宝は、空一面に広がる巨大な飛空艇だった。巨大な飛空艇は音も無く静かに浮いている。

巨大飛空艇の登場で、その下で浮いている王直属の飛空艇団がとても小さく見えてしまう。

オーカスも見上げて言う。

「これがユーフォリアの秘宝」

「なんちゅう、でかさだ」

ニツクも巨大な飛空艇を見上げる。

巨大飛空艇は、飛空艇団を陰で被いながら移動するとローラン国王の頭上で静止した。

ローラン国王を招くように筒状の搭乗口がローラン国王の前に下りてくる。

ローラン国王は搭乗口に向かう。

オーカスが驚く。

「王よ。秘宝を求める時は、世界存続の危機のみはず。私に秘宝探索の命を下された時、秘宝の場所を探すだけだとおっしゃたではありませんか！」

ローラン国王に駆け寄るために走り出したオーカスを、親衛隊は捕まえて取り押さえる。

「シーライト將軍。落ち着いて下さい。でないと我らは」

「放せ。なぜ王をお止めしないのだ。神々の怒りが恐ろしくないのか？」

ローラン国王は登場口に手を掛けて振り返りオーカスを見た。

「そちが秘宝を探索しているうちに、議事も話が進み、秘宝が何か確認する事になったのじゃ」

「確認なんてとんでもない。秘宝に触れてはなりません。古の神々いにしえとの契約をお守り下さい。王よ！」

オーカスは叫ぶが、王は飛空艇なら大丈夫だと軽く手を挙げて巨大飛空艇に搭乗してしまった。

第111話：名も無き土地9

オーカスは暴れて親衛隊の手を振り解き、駆け出して巨大飛空艇に向かう。

親衛隊は、オーカスを囲んでオーカスの行く手を阻む。

オーカスは魔法器に手を掛けた。

「どけ！ これは將軍としての命令だ。私の邪魔をするな！！」

親衛隊を睨むオーカス。

ラグはシーライト將軍と呼ばれているオーカスを、映画俳優のように、手の届かない遠い世界の、別の人生を歩む者として見ていた。一緒に旅をしていた時は、とても近くにいたオーカス。今もオーカスまでの距離は10メートルも無い。なのに、シーライト將軍と知ったとたん、オーカスをとても遠くに感じるのは、なぜだろうか？ 動かなくなったラグを見かねて、ニツクが短剣を両手に持って親衛隊の輪の中に飛び込む。オーカスに加勢をするためだ。

支援のため小型飛空艇から駆けつけた親衛隊は、オーカスとニツクを止めるために、ラグにぶつかりながら通り過ぎて行く。

ラグは、ぶつかった勢いで二、三步前に進んだものの今も呆然と立ち尽くし、オーカスたちが争う様を傍観している。軍にいた頃、シーライト將軍を何回も見掛けているのに、なぜオーカスがシーライト將軍だと気付かなかったのか。考えれば考えるほど、復讐心で物事が見えなくなっていた自分がイヤになってくる。ラグは自分の意思で足を踏み出した。

「オーカス。シーライト將軍だと、なぜ言わなかった？」

オーカスはローラン国王を追うために親衛隊と戦っていたが、ラグの声に気が付いた。

「最初、何も言わなかったのは、ラグの方ではありませんか。私が話しかけても無視ばかりして」

確かにオーカスの言うとおりだとラグは思う。オーカスに出会っ

た頃は、復讐のために身分を隠して行動しようと心に決めていた。でも今は違う。謝りたい事や感謝したい事がいっぱいある。オーカスがオーカスであるうちに、自分の気持ちを伝えなければ、シーライト將軍に戻ったオーカスは手の届かない高い場所へ行ってしまう。だからこそ、今伝えなければならぬ言葉があると、ラグは思った。「俺は戦争で友を失い、家も家族も失い、毎晩夢に出てくる友と家族の断末魔の声に怯えながら、いつもサザーランドへの復讐ばかりを考えていた」

ラグは剣を抜いた。オーカスを囲んでいる親衛隊を一人ずつ刀背打ちにして歩き続け、オーカスに近づきながら言葉を続ける。

「今も復讐の思いは変わらない。だが、オーカス。お前はシーライト軍の陸の二十一部隊の隊長だと言って俺の所に来た。俺は復讐を果たさなければならぬのに、お前の事まで考える破目になって、お前のような十七歳のガキがシーライト將軍だと！」

ラグは声を荒げる。オーカスに謝罪と感謝をしたいはずなのに、込み上げてくる熱いものはなんなのか。ラグはまた荒い口調で言ってしまったと後悔の念に駆られる。

オーカスは風の魔法で親衛隊をまとめて吹き飛ばした。

「ラグは、火の鍵の継承者。鍵の継承者として、神々の怒りに触れる前に、ローラン国王をお止めしなければならぬのに、なんの話をしているのです！」

ラグは、自分を取り押さえに来た親衛隊のせいでオーカスが見えなくなつたので、目の前にいる親衛隊をぶん殴る。

「邪魔だ。どけ！」

ゆっくり会話ができない今の状況が歯痒くて、ラグは躊躇う事無く本音を曝け出してオーカスに聞く。

「オーカス。お前にとって、一体俺は、なんなんだ？」

第112話：名も無き土地10

「ラグ。先に王をお止めして下さい。話はそのあとでゆっくりと」
「あとにしたら、お前は將軍になって、俺の手の届かない所へ行ってしまう」

ラグは瞬間移動をして親衛隊の人集りを抜けた。もうラグの理性はなくなっていた。オーカスを求めてオーカスの前に立った。ラグはやっと気付いた。最初から素直にオーカスの傍にいればよかったのだ。と。

オーカスはラグに言う。

「私は賢者シーライトの遺志を受け継ぐ、雷いかずちの鍵の継承者なのです。ラグは賢者コトツクの遺志を受け継ぐ、火の鍵の継承者。今は継承者としての使命を果たす事を優先して下さい。諸々の話は後ほど」

ラグとオーカスは背中合わせになり親衛隊と戦う。
そこにニツクも加わって両手にある短剣の魔法器を発動させて戦う。

「あんたら。ローラン国王を追いかけないで、何やってんの？」

ニツクの声は、今のラグには届かない。

ラグは、戦っている最中のオーカスの腕を掴んで引き寄せた。

「それだけなのか？」

オーカスは腕を引つ張られてラグを見る。

「それだけって、他に何が？」

ラグのアメシスト色の瞳と、オーカスのアクアマリン色の瞳が絡み合った。

この瞬間、ラグの頭の中にオーカスと旅をした日々が浮かぶ。

「だから、俺にとってお前は」

ラグが言った時、ラグとオーカスの動きが止まった。互いを見つめ続ける。

親衛隊は今がチャンスとばかりに近づいてラグとオーカスを取り

押さえた。

ニックは捕まったらどんな扱いを受けるか分らないと思い、幻術魔法を使い姿を消して逃げ出す。

親衛隊はオーカスとラグを引き離れた。言い争う鍵の継承者を別々の小型飛空艇に乗せるため、ラグとオーカスの距離はどんどん離れて行く。

オーカスは黙って親衛隊に従うが、ラグは親衛隊の誘導に逆らいながらオーカスに向って叫んだ。

「オーカス。俺にとってお前は」

背を見せて歩いていたオーカスが振り返る。

「ラグ！」

「英雄殿。失礼する！」

ラグが余りにも暴れるため、親衛隊はラグを大人しくさせようとして魔法を使ってラグを気絶させた。

地面に倒れこむラグは、意識がなくなる寸前に、目の前に広がる闇を見た。

そしてまた、ラグは意識の中に蠢く過去と相見えるのである。

第113話：融合

闇はどこまでも続く。

ラーグはどこへ続くのかも知れぬ黒い道を歩いていた。

いつもの如く身を腐らせ悪臭を漂わせたジェイローとオフエーリアが現れてラーグを招く。

ラーグはもう二人から逃げなかった。ジェイローとオフエーリアに歩み寄る。

「私は、また大切なものを失ってしまった」

ラーグは泣きながらジェイローとオフエーリアにすがり付いた。泣きじゃくるラーグの体に、二人の血と、人肉の腐った悪臭がつく。

ジェイローは、泣き崩れそうになるラーグを支えながら言った。

「副隊長が私を見捨てずに来てくれた」

オフエーリアも言う。

「ラーグが来てくれた。嬉しい」

ジェイローとオフエーリアは同時に言った。

「これでやっとラーグの中で生きることができる」

ジェイローとオフエーリアは、ラーグの体の中に溶け込んでいく。ラーグは瞳を閉じて二人を迎え入れた。

ジェイローの体が先にラーグの中に溶け込み、次にオフエーリアの体が溶け込む。

「ラーグ。いつまでも愛しているわ」

最後にオフエーリアの声がラーグの心の中で響いた時、ラーグは瞳を開いた。

ラーグの目の前には、まだ闇が広がっている。

「そんな……」

ラーグは頭を抱えて苦しみ出す。

「本当に一人になってしまった。私は、死人しにんからも見放されてしま

ったのか」

ラーグは大声を出して走り出した。

「誰もいないのか？ 誰も？」

誰かを求めて走っても走っても、闇は続くばかり。

「これから一人で、私はどうすればいいんだ？ お願いだ。誰か答えてくれ」

ずっと闇の中を走り続けたラーグは、息が切れてきて、酸欠で足が動かなくなり、ついには地面に両膝をつけた。

「誰でもいい。誰でもいいから、私の傍にいてくれ。頼むから」

寒くもなく暑くもない闇。何の音もない。なのにラーグは自分の耳を塞ぐ。

「助けられくれ。ここから私を出してくれ。イヤだ。もうイヤだ」

ラーグは、闇の中で上を見上げ、見えているのか分からない闇の空を見ながら、己の救いを求めて叫び続けた。

第114話：独房1

ラグは目を開けた。白い天井が見える。目だけを動かすと、天井近くに小さな窓があるが、鉄格子がついている。ラグは起き上がった。壁は三枚。四枚目の場所には大きな鉄格子が壁の代わりになっている。

「懲罰を受ける兵士専用の独房に入れられるとは、俺はとんだ英雄だな」

意識が朦朧とするため、床を這って移動し、体を起こして壁に背をつけてもたれた。

「体がだるい。俺は眠りの魔法を受けたのか」

ラグは瞳を閉じる。今度は眠る事はなかったが、ラグの頭の中にシーライト將軍とオーカスの顔が交互に浮かんでくる。

「今思えば、あいつの茶髪と、獅子の毛と言われるシーライト將軍の髪の色は同じなんだよな。軍にいた時にシーライト將軍の顔をもっとよく見ておけばよかった。そうしたら、あいつを失わずにすんだのかもしれないのに」

瞳から流れ出た涙に気付かずにラグは瞳を閉じた。

暫くして足音と共に兵士がやってきてラグのいる牢の中に食事を置いた。その兵士はラグの顔をじっと見ていたが、ラグが瞳を開けて兵士を見たために、兵士は逃げるようにして立ち去った。

きつと独房に入れられた英雄が珍しくて見ていたのだろうとラグは思った。そう思うと、今度は独房にいる自分が滑稽になってきて笑えてくる。

「アルランドの英雄が独房入りとは。……ハハ……ハッ……」

最初は小さく笑っていたが、今まで歩んできた自分の人生が、山有り谷有り落とし穴有りだったと回想すればするほど笑えてきて、大切なものを多く失ってきたと涙も出てきて、ラグは仰向けに寝転がり顔の上に腕を置いて笑い出した。笑っている途中で鼻水をすす

ったりもする。

その笑いの最中にニツクの声がした。

「アルランドの英雄。ついに気が触れる。このネタをローラン国に売ったら、いくらになるだろう？」

ラグはゆっくりと身を起こした。見ればニツクはローラン兵士の服を着て鉄格子に手を掛けて立っている。兜を被っていない赤い髪のみまで。

「ニツク。どうやってここに？」

「幻術が得意な水の鍵の継承者の俺に、そんな質問をしちゃダメだつて」

ニツクはエメラルド色の瞳でにこやかに言う。

ラグは床に手をついてゆっくりと立ち上がった。受けた眠り魔法のせいで気だるさはあるが歩けない事もない。体の調子確かめながら足を動かして移動し、ニツクが掴んでいる鉄格子を掴んだ。

「ニツク。ここから俺を出してくれ。どうしても取り返したいものがあるんだ」

「取り返したいものって鍵？ それともオーカス？」

「それは……」

第115話：独房2

ニツクは土足でラグの心に踏み込んで来る。そんな彼は、敵国サザーランドの王宮の要人。きっとこの情報は敵国に筒抜けだろう。もしかしたら、これはニツクの罠で、また謎の黒い集団に襲われるかもしれない。だが、今の状況ではどうしてもニツクの助けを借りなければ独房から出る事はできない。

ラグは素直に答えた。

「両方だ」

ニツクは苦笑する。

「継承者として、鍵の奪還を優先しないのはよくないな。でも、愛するラグの頼みなら仕方ないか」

直後、ニツクの体が淡く光る。

ラグは、ニツクを見ながら不思議がった。

「鍵も無く、魔法器にも触れず、魔法が使えるのか。お前は？」

「あれ、鍵の継承者なのに知らなかったの？ 鍵は飽く迄も鍵。俺たち鍵の継承者は、鍵の守り人として、魔法器が無くても強力な魔法が使えるんだぜ。まあ、鍵があれば魔力が増幅されて強力な魔法になるのも確かだけどね」

ニツクは両手に水の輪を現す。

「ラグ。後ろに下がって」

ニツクは、ラグが離れるのを確認すると鉄格子に水の輪を投げた。

「ウォーター・カッター」

ニツクは軽業師のように両手で水の輪を操る。音速で回転する二つの水の輪は鉄格子を切断した。

ラグの足元に、切れた鉄格子が落ちる。

水の輪はニツクの手に戻ると蒸発して湯気となって消えた。

ラグは独房から出た。

「有り難う。ニツク。これでオーカスの下へ行ける」

ニックはラグに剣を渡す。

「言葉より、愛が欲しいな」

ラグは腰のベルトに剣を差し込みながら言う。

「悪いが、男に捧げる愛は無い」

ラグは歩き出すが、ニックがついてこないで足を止めて振り返った。

ニックは、まだラグが入っていた独房の前にいる。

「オーカスを助けたい気持ちは分かるが、ここは一先ず逃げよう。

オーカスも鍵の継承者だ。ここから逃げようと思えば一人で逃げられるはず。それにオーカスがどこにいるのか知ってるのか？」

第116話：再会1

ラグは、壁を見ながら歩く。何かを探しているようだ。

「ああ。判る。ここは軍人だった俺の古巣だからな」

ラグは歩いているうちに壁に書かれた数字を見つけた。

「あった。このエリア番号でどこに居るのが判る。オーカスの所まで最短距離で移動できるぞ。ニック」

ラグは戻って、独房の前にいるニックの腰に手を回した。

ニックは嬉しそうに、されど恥じらいながら言う。

「その、軍の飛空艇の中でラブシーンって、初めての体験っていうか。とても刺激的だと思うが、俺としては鍵を取り返してからゆっくりと時間をかけて、濃厚な快楽を味わいたいんだけど」

ラグは奥歯で苦虫を潰したような表情になった。

「勘違いをするな。今から俺の瞬間移動でオーカスの所へ行くんだ。かなり揺れるからな。その減らず口で舌を噛み千切らんように黙ってる」

怒鳴り口調で言ったあと、ラグはニックを抱えて床を蹴った。瞬間移動で飛空艇内を移動していく。

その移動スピードの早さに二人の姿は霞み、ラグが方向転換をするたびに、ニックが男特有の喉太い悲鳴を上げる。

艇内を見回るローラン兵士も気配を感じたり、ニックの悲鳴を聞いたりして辺りを見回すが、その頃には既に二人は移動したあとで、見ても何もみつからないため、ローラン兵士は仲間のじゃれ事と思っ込んで通り過ぎて行く。

そのお陰でラグはローラン兵士に見つからずオーカスのいる上官専用の部屋に到着した。

ラグはニックを手放しドアを開けて名を呼ぶ。

「オーカス！」

だが、部屋にオーカスがない。

ニツクは連続の瞬間移動に疲れて、近くにあったソファーに腰掛け、両腕を背もたれに投げ出した。

「別の部屋じゃないの？ それとも別の飛空艇にいるとか？」

「ローランの場合、階級や部隊ごとに搭乗する飛空艇は決められている。作戦もなく将軍が別の飛空艇に搭乗するなど、ありえん」

ラグはオーカスを探して部屋を見渡す。

飛空艇内の部屋だけあって決して広い部屋とはいえないが、上官用としてそれなりの高価な机や棚などがある。

ラグは棚の陰に隠れるようにしてある扉を発見した。ラグが扉に近づいた時、扉が静かに開いた。

扉からオーカスが顔を出す。ラグを目に留め、アクアマリンの瞳で数秒ラグと見つめ合ってから、ソファーに座っているニツクにも視線を向ける。

「どうしてここに？ ラグは落ち着くまで独房に入れておくと、親衛隊が言っていましたか」

扉から出てきたオーカスは、軽装ではあるがシーライト家の紋章があるマントを羽織り、板金で獅子の絵柄が浮き出たデザインの銀色の鎧に身を包んでいた。腰にはいつも挿していた細身の剣がある。獅子色の髪はもう後ろで留めてなく、緩やかなウェーブヘアとなつて肩を隠している。

第117話：再会2

ラグが軍人だった頃、遠くから眺めていたシーライト将軍がそこにいた。高貴な姿のシーライト将軍を見ても、ラグは跪くことなくいつもの名を呼ぶ。

「オーカス。俺たちの鍵を取り返しに行こう」

オーカスは静かな眼差しでラグを見る。そこにあどけない十七歳のオーカスの表情は無い。

「私は、秘宝探索の任務を終え、現在は將軍職に戻り、不在の間に溜まった仕事を片付けねばなりません。それに私は、將軍の立場でありながら乱闘騒ぎを起こした。ローラン国王より謹慎を受けた私はしばらく自由に動けませんので、謹慎期間中をうまく利用し仕事を片付けようと思っています」

ラグは、オーカスの肩にあるシーライト將軍としての銀色の鎧を掴む。その冷たさがオーカスの今の心境を表しているようで虚しさを感じるが、ラグは強い意識で心に湧く虚しさを振り切った。自分の中にある闇を払うために。

「オーカス。何を言ってるんだ。ローラン国王が秘宝を所持しようとしているんだぞ。神々の怒りに触れる前に、ローラン国王を秘宝から引き離さない」と

ラグに肩を掴まれても、オーカスは顔色一つ変えず冷静に答える。
「秘宝が巨大飛空艇だと判った今、ローラン国王のほかに王立研究所の研究員も巨大飛空艇内に入り、調査を行っています。何も起こらないところを見ると、神々はお怒りではない様子。もうローラン国王をお止めする必要はないかと思いますが」

オーカスがラグから目を反らして体の向きを変えた時、オーカスの肩を掴んでいたラグの手が放れた。

「オーカス……」

オーカスは静かに歩いて將軍専用の机に手を置いて椅子に腰掛け

る。

「ラグ。いや。ラーグ殿。私はあなたと旅をした日々を忘れた訳ではありません。私からの感謝の気持ちとして、私と共に秘宝探索を担い、ローラン国に秘宝をもたらしたアルランドの英雄ラーグ殿に褒美を取らせるよう、ローラン国王に進言するつもりです」

ラグの目の前で、どこまでも冷静に話すオーカスを、ラグはとても遠い存在に感じながら言う。

「俺が欲しいのは、褒美じゃない」

「なら、何が欲しいのですか？ 私の権限が及ぶ限り、なんでも用意させますが。そういえば、酒が好きでしたね。今後十年間、ローラン国内で飲む酒はタダにしましょうか？」

「違う。俺がここに来たのは、お前が必要だからだ」

オーカスは笑おうとするが、ラグの真剣な眼差しを受けてオーカスの表情がそのまま固まる。

ラグのアメシスト色の瞳はオーカスを捕らえて放さない。

オーカスのアクアマリン色の瞳もラグを求めていたが、オーカスは視線を外して机の上にあった書類の文字を見た。文字を読むが、ラグの声ばかりが頭に響いて書類の内容が頭に入ってこない。

ラグは机の書類を触っているオーカスに言った。

「俺にはキー・スピリッツの声が聞こえん。賢者シーライトはオーカスになんと言っているんだ？ 鍵を取り戻せと言っているんじゃないのか？」

第118話：再会3

オーカスの書類を持つ手が小刻みに震え出す。

「秘宝が見つかり、ローラン国王の手に委ねられた今、賢者シーライトが何を言っているかなど、今のあなたには関係の無い事です」

ラグはオーカスに歩み寄り机に手を置く。

「キー・スピリッツの声が聞こえん俺でも、賢者コトツクが今何を望んでいるか分かるのに、今のお前は、聞こえているはずの賢者シーライトの声を無視して、將軍の位にすぎりつき、事を無難に収めるために、マジックナイトの称号もただの飾りにしようとしている。ある意味、賢いな」

ラグは言ってから、オーカスの動かない表情に気付いて言い直す。「いや。相手が王だけに、どうする事もできなくなった自分を認めたくなくて、將軍職を隠れ蓑にして、キー・スピリッツの声から逃げているんだ。お前は！」

ラグに心情を言い当てられて、オーカスは顔色を変えて立ち上がった。人生経験の少ない十七歳という若さゆえに、表面を取り繕う事がまだできないのだ。

「ラーグ殿。私はオーカスとしてあなたと共に旅をしましたが、今の私は將軍としてあなたの前にいます。將軍である私をさげすむ言動は慎んで頂きたい！」

ラグは立ち上がったオーカスの手を掴んで引つ張る。

「お前が將軍だとしても、今の俺には関係ない。来い。オーカス」
「何をする！」

オーカスはニツクに言う。

「ニツク。ラーグ殿を止めて下さい」

ニツクはソファアに座ったまま言った。

「將軍の姿をして、オーカスの声で言われてもねえ……」

「ニツク。お前も立て。ローラン国王から鍵を取り返すぞ」

ラグはニックを呼びながら、言う事を聞かないオーカスを担ぎ上げる。

オーカスは、ラグの肩の上で手足をバタつかせている。

「將軍である私に許しもなく触れ、我が身を拘束するなど、無礼にも程があります」

ニックはラグの隣に立ち、ラグに担がれながら理屈を並べて抵抗しているオーカスを見て言った。

「思春期真っ盛りの息子を持つと苦労するねえ」

「ニック。お前も口を開けていると舌を噛むぞ」

ラグはニックの腰に手を回す。

「もしかして、また？」

ラグはニックの予想通り瞬間移動をして部屋を出た。二人を抱えていてもラグの移動スピードは艇内を見回る兵士の動体視力が追いつかないほど早い。

途中通路を移動しながら窓を見れば、ラグたちがいる飛空艇は、巨大飛空艇と一緒に宙に浮かんでいる。

ラグは巨大飛空艇へ行くために開いている窓から外に飛び出した。むしろん、下には雲海が広がっている。

第119話：再会4

ニツクの赤い髪は激しく波打っていた。耳には冷たい風がぶつかって低い音を轟かせている。

オーカスの獅子色の髪も上空の風に晒されて棚引いていた。ラグに担がれているオーカスは、雲海の切れ間から見える砂漠の上を歩く小さくなったローラン軍の兵士を見ながら声を上げる。

「飛行魔法が使えないのに外に出るなんて」

ニツクは体を震わせながら言う。

「空気が薄いし、寒いし。ここ、ベストしか着ていない俺には無理だって」

オーカスとニツクの悲鳴を聞きながら、ラグは何も無い宙を器用に蹴ってまた瞬間移動をする。もう少しで巨大飛空艇に飛び移れるという時に、ラグは集中を欠いて失速した。それを補うために手を伸ばすが、あと少しのところが届かない。今度は足を伸ばしてどうにか巨大飛空艇に届かないものかと頑張るが、約1メートル足りない。

「むう。もう少しなんだが」

ラグはオーカスとニツクを抱えながら落下し始める。

「ラグ。放して下さい。自分で飛びますから」

オーカスは、腰にある剣の魔法器に手を添える。

ニツクも体を淡く輝かせた。

「もう。何やってんの」

落下速度は徐々に早まり、急降下するラグを、オーカスとニツクが飛空魔法を使い浮上させた。

ニツクは氷の羽でできた翼を羽ばたかせて巨大飛空艇へ向かいながら言う。

「道を誤った息子の躰けには、親の勇気ある判断が必要だというのが、あんた勇気有り過ぎだって」

オーカスはラグに掴まって体を淡く光らせながらラグが落ちないように浮かせている。

「私たちが巨大飛空艇まで運びますから。ラグ。あなたはもう何もしないで下さい。でないと、今度こそ落下しますよ」

ラグは、オーカスとニツクのお陰で、なんとか巨大飛空艇にたどり着く事ができた。ラグは巨大飛空艇の上に座り込んで呼吸を荒くしながら雲海の先に見える先ほどまでいた飛空艇を眺めた。

「やればできるもんだな」

ニツクも座り込んでラグにもたれながら言う。

「最終的にやったのは俺たちだけだね」

オーカスもラグの肩に腕を載せてもたれながら言った。

「瞬間移動の勢いだけで飛ぶなんて、あなたはなんて無茶苦茶な人なんだ」

「行けると思ったんだが」

苦笑しながら言うラグを見て、オーカスとニツクが同時に言う。

「行けると思った!？」

オーカスが笑い出す。

「あははは……。そういえば、ラグは出会った時から無茶苦茶な人でしたね」

オーカスは、ラグと初めて出会った酒場でラグが白目をむいて倒れた時の事を思い出した。次に未成年の自分が酒場にはいけないと言って外で一緒に食事をしてくれた事や、田に落ちて一緒に泥まみれになった事、サザールランドの王都の宿屋で泣いた自分を慰めてくれた事など。オーカスは、なんだかんだ言っても、優しく接してくれるラグの表情を思い浮かべる。

「魔法が使えないのに、魔法使いの私を心配して。今だって飛べもしないのに、私のために飛んでくれて。ラグ……。私はあなたが大好きです」

ラグはオーカスとニツクにもたれながら言う。

「俺も……だ」

ニツクも言う。

「ラグ。愛してる」

雲海に浮く巨大飛空艇の上。和やかな雰囲気^{雰囲気}が三人を包んでいたが、暫くして、ラグはラグにとって、とても重要な事に気付いて口を開いた。

「その愛は、いらん」

それで、オーカスはまた笑い出した。

第120話：巨大飛空艇1

ローラン国王は巨大飛空艇の中で研究者たちと共に空艇内のシステムを調べていた。

現在いる場所は、巨大飛空艇の操縦ルーム。

巨大飛空艇の操縦ルームは、複数の画面とタッチパネルがあるだけというシンプルな構造になっている。

研究者はシステムの画面に現れた文字を見て言う。

「これらの文字は全て神々が使っていたといわれる古代文字です」

ローラン国王は親衛隊が設置した王専用の椅子に腰掛けながら言う。

「解読は可能か？ 無理ならキー・スピリッツの力を借りるが」

「文字は、現在ユーフォリアに現存する古代文書にあるものと一致しますので、ほぼ100%解読可能です」

ほかの研究者が画面に表示された古代文字を読みながら言う。

「この巨大飛空艇は何層にも分かれた広大な居住空間があり、その広さは1つの地方がすっぽり入るほどです。内部には魔法器によって輝く太陽や、降り注ぐ雨、その下には家や田畑があるようです。凄いですね」

「武装も光線砲など、我々の飛空艇にあるものとは変わりませんが、出力が我々の持つ光線砲の何十倍もあるようです。どうすればこんな強大な出力に耐えられる構造を作る事ができるのでしょうか。神々の英知は計り知れないとしか言いようがありません」

「問題は、この巨大飛空艇をどう動かすかです。現在我々の操作を一切受け付けません。まるで意思があるかのように勝手に動いています」

ローラン国王は、側近が用意した椅子に座ってくつろぎながら言う。

「賢者の声によると、鍵に選ばれた者が操縦できるらしい。それは

四つの鍵を身につけている余の事のようにだ」

ローラン国王はゆっくりと立ち上がる。

「どれ、余が操縦してみよう。余はどこに腰掛ければよいのじゃ？」
すると、壁の一部が扉として開いた。ローラン国王を招いている
ようだ。

親衛隊が先に入室する。

「危険が無いか、確認を致しますので少々お待ち下さい」

親衛隊はすぐ部屋から出て来た。

「恐れながら、この部屋は危険が無いどころか、何もございません」
ローラン国王も入室する。部屋はそこそこ広いが金属板の壁がある
だけで親衛隊の言うとおり何も無い。

「ふむ。本当に何も無い部屋じゃのう」
鍵から声がする。

「コクピット起動」

部屋の中央にリクライニング式の椅子が現れた。

「これに座れということか」

ローラン国王は椅子に座った。

「座り心地はなかなか良い」

その椅子から声がする。

「操縦者確認。システム起動。連結開始」

何も無かった壁や床から機械やコードが飛び出しローラン国王を
囲むと、コードがローラン国王の体に巻きついていく。

「これは何事だ！」

驚くローラン国王の口にコードが進入し機械が顔にまで貼り付い
て覆っていく。ローラン国王の全身を被いつくし、繭のような形に
なった時、巨大飛空艇は声を上げた。

第121話：巨大飛空艇2

ちょうどその頃、ラグたちは巨大飛空艇の上で侵入口を探していた。

ベストとカーゴパンツという薄着のニックは、上空の冷たい風に耐え切れずラグに抱きついた。

「寒い！ 俺を温めてくれ」

「来るな。やめろ！ 俺に抱きつくな！」

ラグはニックを突き放し逃げ回る。

巨大飛空艇の上は、真ッ平らでかなり広く、遙か先に地平線があるように見える。

ニックは逃げ回るラグを追いかけていたが、ラグは追いつかれそうになると瞬間移動をして逃げてしまったため、笑いながら見ていたオーカスにニックは抱きついた。

「寒い。オーカス。俺を温めてくれ」

「ニック。大丈夫ですか？」

オーカスは嫌がることなくニックの体を擦っている。

ラグの視線が抱き合っている二人に釘付けになる。

「ニック。オーカスに抱きつくな！ オーカスもオーカスだ！ なぜこんな奴に優しくする？」

「私には兄がいますのでスキンシップは日常的な習慣でした。ラグがそんなに怒るような事ではないと思うのですが」

朗らかに笑って言うオーカスに下心は全く無い。

問題はニックだけのようだ。

ラグはニックの腕を掴む。

「ニック。オーカスから離れる！」

「寒いから嫌だ！」

「いい加減にしろ！」

「嫌なものは、嫌だ！」

結局、ラグとニックが纏れ合う事になり、二人が言い合いをしていると、巨大飛空艇が唸り声をあげた。

「これが、神々が我々にもたらしたという秘宝なのか。素晴らしい。余はついに秘宝を手に入れたぞ。ふはははは」

巨大飛空艇から響いたのはローラン国王声だった。そのあとすぐに笑い声が響く。

ラグは空に響いた声を聞いて、驚きと不安に思わずオーカスを見つめよう。

「今の声は？」

「ローラン国王の声です。研究者と確認するだけだとおっしゃっていたのに」

オーカスは、途中だった侵入口探しを再会する。

ニックはしゃがみ足元の金属板を叩き始める。

「サザーランド国王が恐れていた事がついに始まってしまったか。もう悠長な事をしている場合じゃないぞ。よし、ここが薄そうだ」

ニックは両手に水の輪を現す。

「ウォーターカッター」

水の輪はニックの足元にある金属板に穴を開けた。

ラグは怒る。

「秘宝に穴を開けるな！」

「侵入口が見つからなければ穴を開けるしかないだろ」

睨み合うラグとニック。

そしてオーカスを含め三人の周りにある金属板が動き、機械の塊が顔を出す。

ニックはすぐに反応する。

「こりやヤバイ。アイスウォール」

氷の壁がラグたちを囲む。

顔を出した機械は一斉にアイスウォールに向かって射撃をする。細い光線がアイスウォールに当たるがアイスウォールの表面を削るだけでラグたちがいる中までは届かない。

ラグは氷の壁の向こうにある、狙いを定めて撃ってくる機械を見た。

「どういう事だ!？」

「ローラン国王にとって、俺たちは邪魔な存在という事さ。お、やっと穴が貫通したようだ。中に入るぞ」

ニックは迷わず穴に飛び込んだ。

オーカスも続く。

ラグは、まだ訳が分からないといった表情で穴に飛び込んだ。

第122話：巨大飛空艇3

中は金属で囲まれた通路になっている。壁の色は白だったり鋼の色だったりとまちまちだ。

ラグたちが中に入ると、侵入した穴は勝手にコードや金属板が伸びて塞がっていく。

ニックは言う。

「中は暖かい。生き返る」

「なぜローラン国王は俺たちが邪魔なんだ？」

ラグの問いに、ニックは通路を進みながら答えた。

「俺たちも人として個別に別れているが、巨大飛空艇にアクセスすることが出来る鍵だからさ。サザーランド国王は、数年前にローラン国王が秘宝を狙っているという情報を手紙で入手していた。真意を確かめるため、ローラン国王に手紙を送ったら、ローラン国王はサザーランド国王が秘宝を狙っているとして戦争を仕掛けてきやがった」

オーカスはニックと共に歩きながら言う。

「そんなはずはありません。最初に襲われたのは我が国の街アルランドです。サザーランド国は幾度となく侵入を繰り返し、我々は長き日々をかけてアルランドで戦い続けたのですから」

「その前に、アルランドと隣接していたサザーランドの街が襲われている。將軍のあんたに知らせてないだけさ」

「そんな。ローラン国王が私を謀るなんて」
たはか

オーカスは驚愕の表情が隠せない。

ラグはニックと歩きながら怒りが籠もった声で言った。

「なら聞くが、サザーランドはなぜ俺の家族を殺した？」

「それは俺たちサザーランドがやった事じゃない」

「家族を襲った黒い奴らの服にはサザーランド国の紋章があったぞ」

ニックは驚き、目を見開いてラグを見る。

「サザーランドの紋章！？ 嘘だろ。サザーランドにも王直属の特

殊部隊はあるが、黒い服じゃない。コトツク家を襲う命令も出して
いない」

「じゃあ一体誰が俺の家族を襲ったんだ？」

ラグが言った直後に、ラグたちに突然光線が降り注いだ。

「危ない！」

オーカスは魔法器に触れ雷いかずちの魔法でエネルギーフィールドを作り
光線を屈折させて撥ね返す。

機械は撥ね返ってきた光線を受けたものから壊れていくが、それ
以上に機械は次々と壁から出てきて光線を出してラグたちを襲う。

三人は物陰に隠れ、ラグは光線を出している機械の様子をうかが
った。

「これじゃあ光線の集中豪雨だ」

「私が雷魔法でエネルギーフィールドを作って皆を囲みますから、
その中に入って移動しましょう」

オーカスは三人がすっぽり入るエネルギーフィールドを作った。
三人が移動するさまを、ローラン国王は体に繋がった機械により
感じ取り把握していた。

「秘宝の中なら簡単かと思っただが、the keysを、そう易々
と始末する事はできぬか。ならば」

ローラン国王の指にある土の指輪は輝き、ローラン国王の指示に
従う。

今度は、床から金属の体を持った兵士が現れてラグたちを襲う。

ラグたちは、オーカスが作り出しているエネルギーフィールドで
守られた身で戦う。

ニックはウォーターカッターを投げて金属兵士の体を切断して倒
していく。

オーカスは魔法器を使い雷魔法いかずちで金属兵士の動きを止めて火の魔
法の熱で兵士をまとめて溶かしていく。

ラグは瞬間移動で兵士に近づいて剣を振り下ろすが、剣が鈍い音
と共に折れて刃が宙を舞って床に落ちた。

「こいつら硬過ぎて、斬れん」

金属兵士の剣を奪い取り、また剣を振り下ろすが、剣の刃が金属兵士の体に当たって火花が散るだけで、金属兵士を倒すことができない。

第123話：巨大飛空艇4

オーカスは言う。

「ラグ。危ないので私の近くにいて下さい」

ニックも言う。

「魔法が使えないあんたは、俺たちの陰に隠れていてくれ」

金属兵士は更に増え、オーカスを作るエネルギーフィールドの中にも金属兵士は現れる。

「どうやって隠れるんだ？ 俺の足元からも現れるんだぞ！」

ラグは我武者羅に剣で何回も金属兵士を叩いた。金属兵士は叩かれた所を凹ませながらラグに近づく。

ニックはウォーターカッターで、ラグが戦っている金属兵士を倒して、足元から現れた金属兵士をも倒していく。

「次から次へと、きりがねえ」

「壊しても溶かしても、一度床になって、また金属兵士として再生してきますからね」

オーカスも額に汗が滲んでいる。

次に壁から白い霧状のものが吹き出る。

「ぶはあっ。なんだこれは！？」

ラグは鼻と口を手で覆う。

ニックが水の壁を作り、毒ガスを遮断するためにラグたちを囲んだ。

「今度は毒ガスを出してきやがった」

「ガスを少し吸い込みました」

オーカスが胸を押さえてよろめいた。

霧状のガスは白いカーテンとなって三人の視界を狭くしたため、金属兵士の居場所を把握するのが難しい。

金属兵士は気付かれないように静かにオーカスに近づいた。水の壁でゆらゆらと揺れているオーカスの姿に狙いを定め剣を刺した。

オーカスは気配を感じ体の向きを変えた瞬間に胸を貫かれた。

「あつ。かはつ……」

オーカスが口から血を吐いて床に両膝をつけた。

「オーカス！」

ラグはオーカスの胸を刺している金属兵士の腕を掴んで動きを止める。

ニックは新たに作ったウォーターカッターを投げてオーカスを刺している金属兵士の腕と体を切断した。

ラグはオーカスに駆け寄る。

「やられたのか？」

剣はオーカスの銀の鎧を貫通しオーカスの体に刺さっていた。

ニックも駆け寄り、オーカスの剣が刺さっている胸を見た。

「完全に急所を貫かれている。剣は抜くな。抜いたら多量の出血でオーカスは即死だ」

ラグはぐったりとしているオーカスの体を支える。

「俺の声が聞こえるか？」

「ラグ。大丈夫です。私はまだ動けます」

オーカスはラグに支えられながら剣の魔法器に触れ、エネルギーフィールドを維持しながら周りを囲む金属兵士に火の魔法を浴びせて倒していくが、オーカスの意識がだんだん薄れていき、オーカスはラグにもたれるようにして倒れた。

第124話：巨大飛空艇5

そして、三人を光線から守っていたエネルギーフィールドが消えた。

「オーカス。オーカス！」

呼びかけるラグの体が淡く輝く。

ローラン国王に繋がったシステムは、熱エネルギーを検測した。

「17エリアにて、スピリット級の熱エネルギーを感知。ただちに隔壁遮断による防御体制をとります」

「何！」

ローラン国王に、体を輝かせるラグの映像が届いた時、ラグの輝きは太陽光並みの高熱エネルギーとなって周囲に広がった。

ラグの周りを囲んでいた金属兵士や機械の塊は熱エネルギーにより一斉に溶けだす。

巨大飛空艇の先端の左側面で爆発が起こり、開いた穴から噴煙が立ち昇る。

ラグは体を輝かせながら顔を真っ赤にして唸り声を上げた。

「うおおお」

ラグの足元には、古代文字が刻まれた魔方陣が浮かび上がっている。

金属兵士は次々と床から現れるが、魔方陣から発せられる高熱により赤味を帯びて溶けてしまったためラグたちに近づく事ができない。爆発で開いた穴からは、風が吹き込み煙は渦を巻いている。

ラグはオーカスを抱きニックを掴み、瞬間移動をしてその場から消え去った。

システムはローラン国王に告げた。

「目標物を見失いました」

「逃げたか……。まあいい。どこへ逃げようと我が手の内。目標物の搜索を実行せよ」

ローラン国王はシステムに命令した。

ラグは瞬間移動を繰り返して、目に留まった扉の前で立ち止まった。腕の中には胸に剣が刺さっているオーカスがいる。その腕にニツクも掴まっている。ラグは疲れて肩で呼吸をしながら言った。

「扉がここにあるが開かない」

ニツクは通路の前後を見て警戒しながら扉に触れた。

「いや。必ず扉は開く。俺たちはそのための鍵を体内に持っているんだから」

ニツクが扉や扉の周囲の壁を触っているうちに、壁の一部が光った。

「ドクター・ケルティックのプロダクトキーを承認」

機械音声と共に扉が開く。

ラグはオーカスを抱いて扉の中に入った。

ニツクも後に続く。

ラグにとつて、ここがどなのか、もうどうでもよかった。とにかく安静が必要なオーカスを床に降ろした。

「オーカス。大丈夫か？」

オーカスは意識を失っていて返事が無い。

剣はオーカスの胸を貫いているため背中から刃が突き出ていてオーカスを仰向けに寝かせることができない。

ニツクはオーカスの背から出ている剣の刃をウォーター・カッターで切断した。

ラグはそつとオーカスを寝かせた。

第125話：巨大飛空艇6

ニックはオーカスの胸の傷口を見る。

「水の魔法でオーカスの応急処置をする。ラグ。オーカスの鎧を外すを手伝ってくれ。剣は出血が酷くなるから、まだ抜くなよ」

「分かった」

ラグとニックは慣れない手つきで、オーカスから鎧を外し、その下のタートルネックの服のチャックを下げた。

赤い髪 of ニックが、エメラルド色の瞳に影を落として真面目な表情で言う。

「剣は防弾チョッキの下にある鎖帷子まで貫いてオーカスの胸に刺さっている。とりあえず防弾チョッキと鎖帷子も脱がすぞ」

「ああ」

ラグとニックはオーカスの防弾チョッキを脱がした。ニックの手が止まる。

「もしかして」

「どうした、ニック？」

ラグはオーカスの状態を心配して聞く。

ニックはオーカスを凝視していたが、再び手を動かす。

「いや。とにかく応急処置が優先だ。鎖帷子を脱がさないで」

二人がオーカスの鎖帷子を脱がしたところで、今度はラグの手が止まった。ラグのアメシストの瞳にオーカスの姿が映っている。

ニックの口から呟きとなった言葉が漏れる。

「やっぱり、この子は……」

オーカスの鎖帷子の下から現れた白い肌。その胸には鍛えられた筋肉とは違う膨らみがある。

ラグは、剣が刺さった痛々しい胸を見て言った。

「女だったのか……。オーカス」

床に両手をついて啞然とするラグの隣で、ニックは冷静に手を動

かして、水魔法を使いオーカスの診断を行う。

「剣は胸骨を切断し、肺を貫通、心臓への血管と食道の器官も切断している。普通なら即死しているところだ」

「よくそんな状態で……。なぜ大丈夫だと言ったんだ？　なぜ俺たちに、助けを求めない」

ラグは、オーカスの意識が無いと分かっていると言わずにはいられない。

「治癒の土魔法を使っていればなんとかなると思い、耐えていたんだろう。背中へ抜けている剣が脊髄を傷つけていないのが不幸中の幸いか。止血は俺の水魔法でなんとかできるが、細胞組織の再生と修復は土の上級魔法でないとどうすることもできん」

ニツクは、オーカスの胸を見つめて動かないラグに言う。

「おい。聞いているのか？」

「聞いている。聞いているが、ここで土魔法を使えるのは、意識の無いオーカスだけなんだ」

ラグはオーカスの額にかかっている毛を整えながら続けて言う。

「もう大切な者を失いたくないのに、なぜ俺の傍にいる奴はこうも傷付くんだ。せめて亡霊でもいい、賢者リーがいてくれたら、オーカスを治してやることができるんだが」

ラグは涙声で唸り、床を拳で叩いた。

第126話：巨大飛空艇7

その時、ラグの体の中で賢者リーの声がした。

『私の名を呼んだという事は、keysになる覚悟ができたという事でしょうか？ 賢者コトツクの末裔、ラーグよ』

ラグは顔を上げる。

「賢者リーなのか！」

ニツクはラグを見る。

「どうした。ラグ？」

「賢者リーの声が聞こえる」

「賢者コトツクじゃなくて、賢者リーの声が聞こえる！？ 火の体質が土の声を聞くななんてありえん」

ニツクは水魔法を使いラグの腕に触れてラグの体内を調べた。

ラグの体の中で賢者リーの声は今も響いている。

それはラグの腕に触るニツクにも伝わった。

「頼む。賢者リー。オーカスを助けてくれ」

『keysになる返事は頂けないようですね。さて、あなた自身の治療がすんでいないうちに、ほかの者を治療するのは賛成できませんが、あなたがこのリーに初めて向けた誠実なる願い。私は、ユーフォリアの土の意思を持って、叶える事に致しましょう』

オーカスの体が淡く光りだす。オーカスの体に刺さっている剣は原子レベルで変化を起こしてオーカスの血肉に変わり、損傷した細胞を修復していく。

ニツクはラグの体内を調べつつ、体が修復されていくオーカスを見ながら言う。

「どうやらラグの体内にあるナノマシンのメモリーに、ドクター・リーのプログラムがコピーされているようだ。それがドクター・コトツクのプログラムになんらかの作用をもたらせて、あなたは火の体質でありながら土の、それも上級魔法が使えるみたいだ」

ラグは自分の両手を見て言う。

「俺は、何もしていないんだが」

「無意識に魔法を使っているのか」

ニツクが、こりゃ先が思いやられるなと思っていると、ニツクに賢者ケルティックの声が届いた。

『ラーグは戦闘ストレス反応を伴った心的外傷後ストレス障害者だ。現実逃避・アルコール依存・食事障害・不眠・集中力低下により、思うように魔法が使えん。賢者リーの癒しと、私の体調変化の魔法を用いて治療しているが回復は芳しくない。現在は、雷の鍵いかずちの継承者の存在のみがラーグになんらかの影響を及ぼし、アルコール依存・不眠・食事障害を軽減させ、火と土魔法までも発動させている』

ニツクはラグを見た。

「オーカスが將軍だろうと誰であろうと、あんたはオーカスの保護者なんだな」

心配そうな表情でオーカスを見ているラグ。全てを失ったはずの灰色の髪をした男は、気付かないうちに大切なものを見つけていたようだ。

賢者リーによる土魔法の治療は順調に進み、約10分ほどでオーカスの傷の治療は終了した。

オーカスは目を開ける。最初に視野に入っただのは、髪の赤いニツクだった。

「ニツク……？」

「よう。目が覚めたか」

次にオーカスはラグを見る。

「ラグ」

第127話：巨大飛空艇8

「オーカス。大丈夫か？」

「はい。大丈夫ですが、ここはどこですか？ あんなにいた金属の兵士たちは、どうなったのですか？」

起き上がりながら言うオーカスは、肌寒さを感じ自分自身を見て小さな悲鳴を上げた。自身を抱えこむようにして膨らみのある胸を覆い隠す。

オーカスの女性的な素振りを、ニツクはじつと見つめる。

「なかなか良い眺めだね」

「見るな！」

ラグはニツクの目を手で覆った。同時にオーカスに背を向ける。

「すまんオーカス。見るつもりはなかったんだ」

オーカスの上半身を散々見てしまったラグの頭の中には、既にオーカスの色気めいた姿が鮮明な状態で存在している。

オーカスは恥じらいながら身支度を始めた。

「軍に入った時から、女性だとばれる時がいつか来ると覚悟をしておりましたが、いざされると恥ずかしくて情け無いものですね」

ラグは頭の中にあるオーカスの裸体と睨み合っていたが、オーカスの言動に違和感を感じ振り返った。

「お前は情けなくないぞ。 ！！」

「きやつ」

鎖帷子を着ていたオーカスと目が合い、ラグはまた背を向けた。

「……すまん」

オーカスは急いで防弾チョッキに手を伸ばす。

「いえ。気にしないで下さい。私はローラン国を守らなければならぬ將軍の身。もうこういう事には慣れておかないと」

ラグの記憶に、鎖帷子から白い肌が透けて見えるオーカスの姿が加わり、ラグは鼻血が出そうになりながら言う。

「オーカスは情け無いんじゃない。任務を全うしようとする、いい奴なんだ。俺が保証する」

もっとオーカスの励みになる言葉はないものかと思案するラグの後ろ姿を見て、オーカスは嬉しそうに言った。

「ラグ。有り難う」

ニックは、ずっと黙っていた。ラグに顔を掴まれ目隠し状態なのに嫌がりもせず動かずにじっとしている。いや、じっとしている訳ではない。凝視しているのだ。ラグの指の隙間から見えるオーカスの動きを。

ニックの頭の中にオーカスの裸体が動画として記憶された事を、ラグはまだ気付いてはいなかった。

第128話：ゆりかご1

ローラン国王の体内には今もコードが入り込みローラン国王の神経と繋がっている。生きているかのように脈動する金属は全身を包み、ゆりかごの形となってローラン国王の体を支えている。

巨大飛空艇のシステムは、ローラン国王の意のままに動き、一瞬にして消えたラグたちを探していた。

「この巨大飛空艇と一体化し、艇内で起こっている事は我が身の一部のように分かるというのに、なぜシーライト將軍たちを見つけれないのだ」

金属に覆われて表情が分からないが、悔しそうなローラン国王の声が脈打つ金属の中から聞こえてくる。

その頃、ラグはニックと共に、鎧をまとったオーカスを連れて次の部屋へと進んでいた。

「ここは、光線砲の機械も、魔法生物も、出てこんな」

ニックも言う。

「なぜか分からないが、暫くこの中を移動したほうが安全みたいだ」
今ラグたちは細長い通路を歩いている。壁には一定の間隔で画面があり、古代文字によって何かの情報を常に表示していた。

オーカスは文字が流れる画面を見ながら歩く。

「移動するのはいいのですが、私たちは確実にローラン国王に近づいているのでしょうか。確かに今は攻撃を受けていませんが、ローラン国王の居場所も分からず、ここがどこなのかを把握しないで進むのは危険だと思うのですが」

傷が癒えたオーカスの体調は良さそうだ。

ラグは画面の間にある機械を一つ一つ見ながら言う。

「無我夢中で移動して飛び込んだ部屋だから、どこなのかさっぱり分からん」

ニックは自分の体内に響く声を伝える。

「賢者ケルティックが、ここは研究室だと言ってる」

ラグは機械にそっと触れながら聞き返す。

「何の研究室だ？」

「さあ」

ニックが首を傾げる横で、オーカスが画面を見て言った。

「画面内にある古代文字によると、人の代わりに働いていた人工物が保管してあるそうです。このボタンで人工物がある部屋へ行けるみたいです」

オーカスがボタンを押すと隣の部屋へ続く扉が開いた。

ラグは覗いて危険が無いのを確認すると中に入った。

ニックも中に入り、オーカスもニックに続いて入った。

中はとても広い空間になっていて円筒のガラスケースが整列していくつも並んでいる。そのガラスケースには液体が入っていて、液体の中に人間が裸のまま様々な恰好をして入っていた。液体に浸かっている人間は胸を動かして今も呼吸をして眠っている。

ラグは適当にガラスケースを見ていたが、急に叫び声をあげた。

「母上！」

ラグはガラスケースに駆け寄る。

キリエラにそっくりの灰色の髪をした女性が液体に入っている。

その女性は瞳を閉じて意識は無いが、液体の中で呼吸をして生きていた。

第129話：ゆりかご2

ラグは食い入るように見ていたが、キリエラとの違いに気付いてガラスケースから手を放した。

「そっくりだが、若過ぎる」

オーカスはガラスケースの横にある画面を見て言った。

「この女性は、製造番号コトツク01 224となっています」

ニツクがラグに言う。

「神々は、神の姿に似せて俺たちを作ったそうだが、それがこれなんじゃないのか」

ラグが隣のガラスケースを見ると、ラグにそっくりな灰色の髪の男性が液体の中で眠っていた。

「今度は俺にそっくりだ」

「ラグより若くて素直そうだ」

ラグがニツクを睨んでいる横でオーカスは、ガラスケースの横にある画面を見て言う。

「こちらは、製造番号コトツク02 225、となっています」

隣の列のガラスケースを見ると、賢者リーにそっくりな女性と男性が液体の中で眠っている。

オーカスは画面の情報を次々に読んでラグたちに伝えた。

「製造番号リー01 212と、リー02 213です」

次の列ではオーカスにそっくりな女性が液体の中で眠っている。

「私そっくりの……」

オーカスは画面情報を読むのを忘れてガラスケースに入った自分そっくりの女性を見ている。

ラグとニツクもオーカスにそっくりな女性を見た。

「そっくりというより、年恰好といいオーカスそのものじゃないか」

「うん。膨らんでいる所といくびれている所といい、全く同じだねえ」

ラグとニツクの視線が下半身へ移動した時、オーカスはガラスケースに飛びついて、液体の中で眠っているオーカスにそっくりの女性の裸を隠した。

「私の裸を見ないで。あ、その、私じゃないんですが、この女性は見ないで下さい」

「すまん。つい見てしまった」

ラグはオーカスの心情を察してすぐに謝るが、ニツクはにやりしながらオーカスに近づく。

「画面情報を読んでくれよ」

「読まなくても、製造番号、シーライト何番になっていると思いますから、ここは通り過ぎて、次へ行きましょう」

オーカスはラグとニツクを連れて次の列のガラスケースへ行く。液体の中には白い肌の金髪の女性が眠っている。

オーカスは画面情報を読む。

「こちらは、製造番号ケルティック01 257です」

ラグは、ニツクと見比べてから次のガラスケースへ行き、金髪の男性とも見比べる。

男性も金髪で白い肌をしている。

「夢の中で会った賢者ケルティックとは似ているが、お前の赤い髪と黒い肌は全然違うじゃないか。ニツク、お前は本当に賢者ケルティックの末裔なのか？」

ニツクは笑いながら言った。

「いきなり何を言うかと思えば、俺は真正銘ケルティックの末裔だよ。腕に水の鍵があるのを見たでしょ」

ニツクがオーカスを見ると、オーカスは確かに水の鍵が腕にあったと頷く。

ニツクはガラスケースに入っている金髪の男性に指をさして言う。
「それにほら、中の男の股間を見ろよ。俺と同じ大きさ」
オーカスは赤面した。

第130話：ゆりかご3

ラグはニックから視線を外す。

「お前の詮索はやめにする。きつとお前のそっくりさんは、別のガラスケースか別の部屋で眠っているんだろっ」

「なんの根拠があつて、そういう事を言うのかなあ」

ラグは、ぼやくニックに背を向けて歩いて行く。

オーカスも歩き出したが、画面の新しい情報を見つけてラグを呼び止めた。

「ちよつと待つて下さい。ここに別の情報があります」

オーカスは読み間違えないように古代文字を指でなぞりながら読んだ。

「テラフォーミングを行った結果、地球とほぼ同じ環境にする事に成功。大気や植物の違いが、人体にどのくらい影響を及ぼすか調べるために、有機ロボットをユーフォリアに送ることを決定する」

ラグはオーカスの横に立ち、読めもしない古代文字がある画面に手をつく。

「どういう事だ。意味が分からん」

「テラフォーミングは、巨大飛空艇の名前でしょうか」

ニックは賢者ケルティックの言葉をラグとオーカスに伝えた。

「巨大飛空艇の名前はノア。神々はここに住むために、以前住んでいた地球という世界に似せてユーフォリアを創造したんだと。俺たちはこの地に移り住んだ神々を守るために、特別に作られた人間だそうだ。体内のナノマシーンにより魔法器無しで魔法が使えるのはそのためらしい」

そして賢者ケルティックは、ニックの体内にあるナノマシンの能力を使って、ラグとオーカスにも伝えた。

『我はケルティック。聞こえるか？ コトックの末裔とシーライトの末裔よ。シーライトのナノマシンのプログラマーであるローラ

ンは、この上の部屋にいる。彼はノアのプログラムにアクセスし、ケルティックのナノマシンのプログラマーであるサザーランドを殺そうとしている。一刻も早く、ローランを止めるのだ』

ラグは眉間にシワを寄せた。

「訳の分からん言葉ばかりだ。とにかくローラン国王は上にいるんだな」

オーカスは魔法器に手を当てる。

「そのようです」

ニックは賢者ケルティックに言った。

「属性っていうか、体質が違うと声は聞こえないんじゃないかなかったのか？」

ニックの頭の中に賢者ケルティックの声がまた響く。

『リーのナノマシーンもそうだが、ラグに接触しているうちに、なんらかの影響を受けてほかのナノマシーンとの互換性が実現したようだ』

「マジかよ！」

驚いて棒立ちになるニック。

ラグは歩こうとしないニックを呼んだ。

「ニック早く来い。お前のウォーターカッターがないと天井に穴が開けれんだろ」

ニックはラグの横に立ち、ラグをじつと見つめる。

ラグはトラウマが働いて、ニックの愛情表現に備えて身構えた。

「なんだ？ どうした？」

「やっぱりあんたは最高だ！ 俺が惚れただけの事はある！」

オーカスは、ニックのラグに対する何度目かの告白を聞いて苦笑いを浮かべる。

ラグは迎撃体勢に入り、こめかみに青筋を浮き上がらせた。

「この非常時に何を言っているんだ！ 早く天井に穴を開ける！」

ニックはニヒルな笑いを浮かべた。手を広げて水の輪をいくつも作りだす。

「了解。ラグのための、愛のウォーターカッター」

「愛をつけるな！」

ニツクは軽業師のように水の輪を操りながら、憂いが籠もった眼差しをラグに向けて言った。

「はあ、つれないね。嘘でもいいから愛してるって言って欲しいよ」

「誰が言うか！」

天井に穴が開いた、

早速ニツクは氷の翼を作って一緒に飛ぼうとラグを招くが、当然ラグは断りオーカスと一緒に浮上する。

「一人って淋しい。ラグと一緒に飛べたら、俺は天にも昇る気分になれるのに」

「ちよつとでも俺に触れてみる。望みどおり、お前を昇天させてやる」

怒ってニツクに言うラグは、オーカスがすぐ穴に突入したこともあり、穴の形がハート型になっている事に、全く気付いてはいなかった。

第131話：ローラン国王1

ローラン国王はラグたちを探すために巨大飛空艇の隅々まで神経をいき渡らせていた。

「どこを探しても、ネズミ一匹見つからん。外に出たこん跡も見当たらぬとは」

壁を埋め尽くして並んでいるシステムもフル稼働してラグたちを搜索している。

その時、システム覆い尽くされているに部屋の床からニツクのウォーターカッターが飛び出した。高速回転する水の輪は床を滑ってハート型の穴を開ける。

巨大飛空艇のシステムはそれを感知して警報を鳴らした。

「侵入者有り。侵入者有り。ただちに防衛態勢に入れ」

床からまたもや金属の兵士が現れる。天井や壁からは、光線砲がついた機械の塊が出て来た。

そこにラグたちは、穴から浮上して現れた。

ラグたちが穴から出たあとハート型の穴は自己修復をして塞がっていく。

オーカスは魔法器に触れエネルギーフィールドを作り光線からラグとニツクを守る。

「賢者ケルティックによると、ここにローラン国王がいるとの事です、見当たりませんか」

オーカスはゆりかご型の機械の中にローラン国王が入っている事に気付いていない。

魔法が使えないラグは金属兵士から剣を奪い、戦って金属兵士を足止めする。

「賢者ケルティックは、本当にここにローラン国王がいると言っていたのか？ ニツク」

ニツクは水の輪でラグが足止めしている金属兵士を切断していく。

「ああ。今もここにローラン国王がいると言っている」

オーカスは魔法を発動して戦いながら叫んだ。

「ローラン国王。どこにいらっしゃるのです。お迎えに参じた私の前に、お姿をお見せ下さい」

ローラン国王は機械の中でラグたちを見ていた。

システムはローラン国王に告げる。

「侵入者は、有機ロボット格納庫より、ここに侵入したもよう」

ローラン国王は苦笑した。

「人形が人形倉庫に隠れるとは、見つからん訳だ」

ローラン国王を包んでいる金属が波打って動き、表面に溝ができ、やがて溝はアケビのようにぱっくりと開いた。

ラグたちの前にローラン国王は姿を現した。頭に王冠は無く、眼も耳も口もコードが侵入し、金属が体全体に張り付き顔や頭までも覆っている。

オーカスは、人とは思えない姿になってしまったローラン国王を見た。

「なんとというお姿に……」

「シーライトよ。命令だ。今より飛空艇団と共にサザーランド国に向かい王都を襲撃せよ」

「何をおっしゃっているのです。戦争は既に終わっているのですよ。王よ」

ニックが怒って、水の輪をローラン国王に投げる。

「冗談じゃねえぞ。ローラン。俺の兄貴を戦争に託けて殺し、今度は王都を襲撃だと。ふざけるな！」

水の輪はローラン国王を守るシステムにより光線で打たれ、一瞬にして蒸発する。

ローラン国王は言う。

「我が国を襲うサザーランドという脅威を壊滅しなければ、戦争は終わった事になどならん」

ラグも言う。

「ローラン国王よ。例え王都を襲撃しサザーランド国を壊滅状態にしても、第二第三のサザーランド国が生まれ、王都を攻撃した我らを憎む事になります。そんな事は繰り返してはなりません」

ラグは金属兵士に押されて壁に手をつく。手をついたところにボタンがあり壁の一部が扉として開く。

扉の向こうには何人もの研究員が殺されて床に倒れていた。

第132話：ローラン国王2

オーカスは驚愕する。

「王よ。これはどういう事ですか」

ローラン国王は静かな口調で言った。

「わしがこの巨大飛空艇でサザーランド国を攻撃すると言ったら逆らいおったのじゃ。王に逆らったのじゃ。当然の報いだ」

「王よ。あなたは狂っている」

オーカスは床に手をついた。手から出た雷魔法いかずちが床を渡ってローラン国王を包んでいる機械に届く。

「わしは狂ってなどおらん」

ローラン国王はオーカスの雷魔法を全身に受けながら続けて言う。「シーライト。なぜわしに逆らう。目をかけてやった恩を忘れたのか」

「忘れてはおりません。忘れていないから、こうして王の前に馳せ参じたのです。王よ。神々の契約に反してはなりません。今はよくても、いずれ神々の怒りを受けます事になります」

「お前も父親と同じ事を言う。ならば、お前にも真実を教えよう。」

余がどれほど偉大なる存在かを知り後悔するがよい」

機械で顔を覆われているローラン国王の表情は分からないが、声は今も威厳に満ちていて王を包む機械が玉座に見えてくる。ローラン国王は言葉を続ける。

「余とそちらは神と呼ばれる人間に使役されるために作られた人形。このユーフォリアに暮らす人間のために、常に最適な環境を維持するようにプログラムされ、ユーフォリアの崩壊時には、こうしてノアに繋がれ人間を安全な地へ運ばなければならない。そしてお前たちは、余と人間を守るために作られた戦闘人形。余の対になる者として余を守るために作られたのが、シーライト將軍、お前なのじゃ」
オーカスは金属兵士と戦い、ローラン国王に近づきながら言う。

「ならば、なぜ王を守ろうとする私の言葉をお聞き下さらないのですか？」

ローラン国王の声が凄みを帯びる。

「お前も父親同様、秘宝から離れると言うからじゃ。更にお前の父親は、わしが秘宝を求め、鍵を求めている事を、娘のお前に伝えると抜かしおった」

ラグは金属兵士を投げながら言う。

「ローラン国王。もしかして、あなたは……」

ローラン国王は不気味に笑う。

「察したか。英雄ラグよ。そちは賢いのう。そうだ。そのとおりだ。サザーランドの紋章のマネなど簡単だったぞ」

「ローラン国王……！」

ラグが怒り狂う。

オーカスはまだ訳が分からない。

「ローラン国王。何をおっしゃっているのですか？」

ニックが言う。

「ローラン国王は、鍵を得るために、俺の兄貴を殺し、ラグの家族も殺し、オーカスの父親も殺したんだ」

「え……」

オーカスは頭の中が真っ白になる。その脳裏に賢者シーライトが姿を現した。

『クレア・オーカス・シーライト。思考を止めてはなりません。思考が止まれば魔力が弱まる。魔力が弱まれば、あなたも、ほかの継承者も死んでしまう』

賢者シーライトは、オーカスそっくりの成熟した女性の姿でオーカスに言うが、オーカスの口からは嗚咽が漏れている。

「父上……」

オーカスは泣き出した。泣きながら戦い続けているが動きが悪くなり、ラグたちを包んで守っていたエネルギーフィールドが消えた。

第133話：ローラン国王3

泣きじゃくるオーカスに、ローラン国王は無情な言葉を続ける。

「父親だけではない。殺したのは家族全員だ。シーライト家は、みな魔力が強くてな、一筋縄ではいかなかったゆえ、会食に招き毒をもって殺したのじゃ。最後まで生きていたお前の兄は、わしに呪詛を吐いたのでな、この手であの世に送ってやったわ」

「私の家族を……全員……殺した……。そんなはずは……。我がシーライト家は、戦闘魔法のエキスパート。父上も母上も兄上も、軍人として国に仕えてきた。私の家族が殺されるなんて。私一人を残して家族が全員死ぬなんて。そんなはずは。私は、国や家族を守るために、女を捨てて將軍になったのだ。そんな私を支えてくれた家族が、全員殺されたなんて、信じられるものか！」

オーカスは半狂乱になる。オーカスの魔法器は輝きを増して熱を帯び、ランダムにいろんな属性魔法が飛び出した。

コントロールされていない魔法は周囲に飛び散り、天井や床、壁にあるシステムを破壊していく。

エネルギーフィールドが無くなったラグとニックは、ローラン国王が操る光線を避け、ランダムに飛び散るオーカスの魔法をも避けながら金属兵士と戦い、二人はオーカスの名を呼んで駆け寄った。

ニックは水の壁を作り自分とオーカスを守りながら言う。

「オーカス。しっかりしろ！」

ラグも襲いかかってくる金属兵士を殴り倒してから瞬間移動をして水の壁の中に飛び込んでオーカスに言う。

「オーカス。ちゃんと前を見て戦え」

オーカスの涙は止まらない。

「ラグ。ニック。父上が、母上が、兄上が。今まで私はなんのために戦ってきたのだ。なんのために將軍になったのだ。イヤだ。もうイヤだ。イヤだあー」

女性でありながら男と偽って將軍職に就き、約一年前の戦争では敵国であるサザーランドの軍用飛空艇をいくつも落としてきたオーカス。ローラン国王に利用されていたとはいえ、人々を守らなければならぬ *keys* と称される雷の鍵いかずちの継承者でありながら、鍵の魔力を用いて大量虐殺をしてしまったオーカスは、ローラン国王より与えられた血塗られたマジックナイトの称号を呪い、そして家族を失った悲しみと絶望感により、何も考えられなくなっていた。現在のオーカスに残っているものは、ローラン国王を呪う思いのみで、オーカスが触れている魔法器は、オーカスの心の悲鳴に反応して作動し、無差別に多様な属性魔法をランダムに発動していた。

ラグは、そのオーカスの心理状態を把握していた。ラグが過去に経験した苦しかった状態をオーカスは今経験しているのだ。しかもオーカスの場合は、目の前のローラン国王と戦う前に、心に湧きあがるオーカス自身を打ちのめす感情に、なんの猶予もなく挑まなければならぬ。ラグの時は戦争後の約一年という期間があつたし、優しい言葉をかけてラグを支えた妻のオフエーリアもいた。しかし今のオーカスを支えるものは何も無い。ラグは目の前で打ちひしがれているオーカスに手を伸ばした。オーカスの襟首を掴んで持ち上げ、オーカスの顔を自分に向けてから、怒鳴り声で言った。

「オーカス！ 戦争の時に何人が死んだ？ その時もお前は泣いたんだろ。俺に言ったよな。シーライト將軍の言葉。重圧に耐えかねて苦しむような事があつても、死んでいった者が守ろうとした国や人々の平和な暮らしを約束できるその時まで、マジックナイトとして將軍の道を歩まなければならない。あれは戦争の時に人を殺した感触に恐れ戦き、泣いて苦しみながら考て出したお前の結論じゃないのか？ お前の家族もそうだ。国民の平和な暮らしを守るために命を賭けてローラン国王に逆らつたんじゃないのか？ シーライト將軍！」

それは、ラグ・フルフォンド・コトツクとしての答えでもあつた。家族を殺されたラグの瞳に涙が込み上げている。

そう。今のオーカスの心情を一番理解しているのは、ラグ本人なのだ。

第134話：ローラン国王4

「ラグ……」

オーカスは我に返った。眼の焦点が合いオーカスのアクアマリン色の瞳はラグを見つめる。

ラグはオーカスから手を放した。

「俺は何があっても戦うぞ。探し続けた家族の仇が目の前にいるんだ。こんな所で泣いている場合じゃないからな」

ラグのアメシスト色の瞳はローラン国王を睨みつける。

ニックはエメラルド色の瞳でウインクしながらオーカスの頬を軽くつついた。

「正氣に戻ったか？ 俺も兄貴の仇をとらないといけなくて忙しいんだ。自分の身は自分で守ってくれよ。オーカス」

ニックは水の輪を作る。

ラグは床を蹴って瞬間移動をしてローラン国王に近づく。

オーカスは嗚咽が漏れる口に力を入れて奥に流れる涙を飲み込んだ。手で涙や鼻水を拭い去り、光を失った魔法器に触れ、再び魔力を注いでラグとニックと自分を守るエネルギーフィールドを作った。

「私も家族の仇を討つ。ローラン国王よ。覚悟！」

ローラン国王の機械のゆりかごは浮上する。

「わしの懷に飛び込んでおいて、勝てると思っておるところが小賢しいわ」

オーカスは得意の雷魔法いかすちを投げて、ローラン国王を追う。

「逃げるのですか？」

ニックもウォーターカッターを投げる。

「どこへ行く？」

ラグは瞬間移動をして飛び上がり、ローラン国王の機械のゆりかごに掴まる。ゆりかごの中に手を入れて王の耳を掴んだ。

「ローラン国王。母の形見は返してもらうぞ」

ラグは王の耳からイヤークフを抜き取ると、自分の左耳に装着した。ラグは浮上するローラン国王のゆりかごから飛び降りて言った。「いるんだろ？ 賢者コトック」

賢者コトックの声がラグの体内で響く。

『我を受け入れ、keysに加わる気になったのか？ ラーグ』

「それで家族の仇が討てるのならな」

『ならば誓いをたてよ。大地に恵みをもたらし、民を、我が子をあらゆる禍から守り、友の身に危険が及ぶ時は助け、keysとして鍵の魔力を持つ者は、常に力の均衡を保ち、平和を願い静かに暮らす。と』

「家族の仇が討てるなら、いくらでも誓ってやる。なんでもいい。早くやってくれ」

『分かった。ドクター・コトックのプロダクトキーをナノマシンに送信』

ラグのイヤークフが淡く光り、その光は広がってラグの全身を包む。

賢者コトックの声はラグの体内で響き続ける。

『ナノマシン、データアップ開始。10%、20%』

ラグは賢者コトックの声を聞きながら、体を光らせて金属兵士と戦う。

『.....50%.....70%.....90%、100%。再起動』

ラグの頭の中に火の魔法の名前と使用方法が浮かび上がる。

「これが火の鍵の魔法なのか」

第135話：ローラン国王5

『そうだ。ラーグ。その火の魔法は、全てお前のものだ』

「よし、ならば。メルトソード!」

ラーグは、手に高熱の剣を現した。それで目の前の金属兵士を一刀両断する。

金属兵士は高熱の剣に裂かれて蒸発して消えていく。蒸発では再生できず、みるみるうちに金属兵士の数が減っていく。

ニツクは言う。

「火の鍵の継承者として覚醒したのか」

オーカスはラーグの魔法を見て喜ぶ。

「火の鍵の魔法が使えるようになったのですね」

「これが魔法なのかよう判らんが、楽に戦えるようになったのは確かだ」

ラーグは瞬間移動して剣を振り回していたが、その剣を浮上し続けているローラン国王に投げつけた。

「逃がすか」

剣は何本にも分かれて機械のゆりかごに刺さり、ゆりかごになっている金属を溶かしていく。ローラン国王は嘲笑する。

「ラーグ。今頃火の鍵の継承者として覚醒しても遅いわ」

機械のゆりかごはローラン国王を乗せて天井のシステムと合体し、ゆりかごは天井に吸収されてしまった。ローラン国王がいなくなった部屋は壁からガスが吹き出す。

オーカスは咳き込んだ。

「また毒ガスです」

ニツクは水の壁を作って言う。

「吸い込むな。さっきのガスより毒性が上だぞ」

「息が苦しい。少し吸い込んでしまったようです」

オーカスは呼吸困難を訴えて座り込む。

「おいおい」

ニックは水魔法を使ってオーカスに触れて体内の毒を中和する。

「どうだ？」

「楽になりました。鍵の水魔法って凄いですね」

にこやかに言うオーカスを見て、ニックはときめきを覚え心の中で思う「かわいい」と。しかし、最愛のラグの事を思い出し、ラグの状態も心配する。

「ラグ。毒ガスだ。大丈夫か？」

ラグは高熱で白く光る剣を何本も出して、ローラン国王が吸収された天井に投げつけている。ラグの周囲も高熱化しているようで、床が溶けて足場が悪くなると、瞬間移動で場所を変えて、ローラン国王が吸い込まれていった天井を攻撃していた。

ニックは啞然とする。

「こりゃダメだ。ラグは頭に血が昇り過ぎて、俺の声が聞こえていないみたい」

オーカスもラグを見る。

「でも、ラグを囲む高熱がバリアの代わりにしているみたいで、毒ガスはラグに届いていないようです」

「あれも無意識でやってるんだよな。きっと。すげえな。益々惚れてしまう」

ニックはうつとりとした表情でラグを見つめた。

第136話：ローラン国王6

ローラン国王はシステムに更なる指示を出す。

「毒ガスも通じぬのなら、残りはこれしかない」

ラグたちを攻撃していた金属兵士と光線砲が床の中に消えた。

オーカスは一息つきながら警戒する。

「攻撃がやみましたが、この静けさは異様です」

ニックも警戒する。

「ローラン国王は、まともな奴じゃないからな。何を考えているのか分からん」

ラグも周囲の変化に気付いて攻撃をやめた。

「ローラン国王が消えたら急に静かになりやがった」

オーカスは周囲を気にする。

「私たちはここに幽閉されたという事でしょうか」

「幽閉されても、どっかに穴を開ければ出られるさ」

ニックはウォーターカタで壁に穴を開けるが、穴はすぐに修復して閉じてしまう。

「修復スピードがあがってやしないか」

「だったら俺の高熱で壁を溶かせば済む事だ」

ラグは壁に手をつき鍵の魔力を使って高熱で壁を溶かすが火傷しそうになり手を離す。

「あちっ」

ニックはラグに言った。

「同じ場所で火の魔法を使い続けたら、高熱をまともに受けて身がもたないだろ」

「みたいだな。今まで瞬間移動をしていたから気付かなかった」

ラグは手の火傷を見ながら言う。

オーカスは土魔法で周囲を調べた。柱や壁が作り出す空間が3Dの立体画像となってオーカスの脳裏に浮かぶ。

「私たちは完全に幽閉されたようですね。しかも、徐々に部屋の空間が狭くなっています」

「なんだと！」

ラグは手の火傷どころではなくなる。

ニツクも水魔法を使って周囲の状況を調べ、急に顔色を変える。

水の鍵魔法は、周囲にある水の状態を把握できるのだ。当然ローラン国王の体内にある水分状態も把握できる。

「大変だ。ローラン国王は、壁を動かして俺たちを押し潰すつもりだ」

ローラン国王はラグたちを見ながら言った。

「火の鍵などくれてやる。その代わり、そちたちの命は必ずもらうぞ」

オーカスは焦った。

「ニツクの水魔法で穴が開けないなんて、どうすれば」

オーカスは魔法器に触れて、属性の違う魔法をいくつか投げ投げるが、壁は壊れてもすぐに修復してしまう。

ラグは壁を見て言う。

「壁が波打って動いている。まるで生きているみたいだ」

「きつと、この壁はナノマシンの集合体なんだ。魔法に対する抵抗力があがっているところを見ると、学習能力も高い」

ニツクの分析に、ラグが聞く。

「さつきから聞くナノマシンってなんだ？」

「正確な答えじゃないが、目に見えないほど小さな魔法器だと思ってくれ」

「これが全部、小さな魔法器の集まりなのか!？」

ラグは壁に押されて部屋の中央に移動する。オーカスもニツクも部屋の中央に移動する。

三人は肩があたるほど近づき、更に壁は空間を狭め、三人は体を密着させないと立っていられなくなった。

第137話：ローラン国王7

ラグは壁を押しながら言った。

「ここから脱出する方法はないのか？」

オーカスも言う。

「魔法が通じなければどうすることもできません」

ニックも言う。

「俺はラグと密着したいのに、なんで間にオーカスを挟むの」

ニックはオーカスを徐々にずらしてラグと体を密着させた。

ラグは壁とニックを押し返す。

「貴様はくつつくな！ 俺に触るな！」

「どうせ死ぬなら、好きな人に寄り添って死にたいんだ」

「ラグ。ニック。狭い所で動かないで下さい。痛いです」

壁が狭まりラグたちの体が押し潰されそうになった時、巨大飛空艇は大きな爆音をあげて船体を揺らした。

その揺れは、中にいるラグたちや、ローラン国王にも伝わる。

システムからローラン国王に艇内の爆発状況が告げられた。

「現在、サザーランド飛空艇団の攻撃を受けているもよう」

映像がローラン国王に送られる。

ローラン国の飛空艇団はサザーランド国の飛空艇団に囲まれ、下の砂漠地帯にもサザーランド国の旗を掲げた兵士が隊を組んで移動し、ローラン国の飛空艇団を魔法で攻撃している。

「おのれ、サザーランド。神の秘宝に仇をなす気か！」

ローラン国王はシステムに命令して巨大光線砲を発砲する。光線はサザーランドの飛空艇を何機も破壊し、近くに停滞していたローランの飛空艇をも破壊した。

艦内のサザーランド兵士は、サザーランド国王に言った。

「今の攻撃により、二十三機の飛空艇と通信が途絶えました。現在、巨大飛空艇は次の発砲に向けチャージです」

サザーランド国王は戦闘鎧に身を包み艦長席に腰かけていた。

「次の攻撃に備え弾幕を強化しろ。今、鍵の継承者は巨大飛空艇内にいる。我々は攻撃を続け、鍵の継承者の援護を引き続き行っ」

四十歳前後のサザーランド国王の声が艦内に響く。

「了解」

サザーランド兵も飛空艇のシステムを操作しながら返事をする。

ローラン国王は全神経をシステムに委ね、戦況の把握に専念している。

ローラン国王が座っている機械のゆりかごは防御体制をとり蓋がスライドして動きローラン国王を包み隠すように閉まっていく。

「秘宝を手に入れた余と、まだ戦うというのか。サザーランド！」

そう言っているうちにも、サザーランドの攻撃を受けて船体は揺れ動いている。

機械のゆりかごの中でローラン国王は声を荒げた。

「ええい、何をしておる。次の光線はまだなのか？」

システムは機械音声で答える。

「次のチャージまで十分少々です」

「十分もかかるのか。遅い、遅過ぎる。なんとかできぬのか」

焦るローラン国王は、サザーランド国を滅ぼす事だけに集中している。

第138話：ローラン国王8

ラグたちは動きが止まった壁の中にいた。ラグとニックの間にいたオーカスはズレて、今はラグとニックが密着し、オーカスはラグの後ろにいる。

ニックに抱き付かれているラグは怒鳴りまくった。

「顔を近づけるな！」

ラグはニックの顔を押し返す。

ニックは口付けをする体勢で言う。

「ラグのほっぺの匂いを嗅ぎたくて」

「嘘をつくな！」

「あの、壁の動きが止まったようです」

オーカスの言葉でラグとニックの動きが止まる。

「本当か？」

「言われてみれば」

ラグはニックの顔を掴み押しながら言う。

「今のうちに壁に穴を開けるか、壊すかしたいが、魔法が効かない壁はどうすればいいんだ？」

「俺の短剣じゃあ、壁に傷をつけるのがせいぜいだしな」

ニックは自分の顔にくつついているラグの手をどけながら考えるが分からない。

オーカスが言う。

「壁はまだラグの魔法を受けていないので、ラグの魔法に対しての防御プログラムは作成されていないと思います。ラグが魔法を使えばなんとかなるのでは？」

「俺の魔法は高熱だ。囲まれた壁を溶かす事はできるが、囲まれているから瞬間移動ができません。もし壁を溶かしたら、動けない俺ら三人は全身火傷を負う事になるぞ」

オーカスは限られた条件の中で冷静に考えて言う。

「ニツクの言うとおりナノマシンがとても小さな魔法器というなら、溶かさなくても、ある程度の熱でナノマシンは壊れると思います。どのくらいの熱で魔法器が壊れるかは、魔法器産業が盛んなコトック地方育ちのラグなら知っていますよね。ラグの魔法でただの金属となった壁に、私の土魔法で穴を開けて脱出しましょう」

「わ、分かった。やってみる」

ラグは、オーカスとニツクが火傷をしやしないかと、冷や冷やししながら火の鍵魔法を使って壁に熱を加える。

ニツクは怖々と見ながら言った。

「ラグは、さつき魔法が使えるようになったばかりの初心者だったな」

オーカスは魔法器に触れて穴を開ける準備をしながら言う。

「だったらニツク、私たちが火傷をしないように、水魔法で冷却して下さい」

「了解。それは名案だ」

「それでは、土魔法を発動します」

オーカスはラグの火魔法のタイミングをみて土魔法を使って穴を開けた。

第139話：ローラン国王9

穴は開いたが、壊れなかったナノマシンの自動修復機能が働いて穴はどんどん小さくなっていく。

「こりゃ、いかん」

ニックは短剣の魔法器に触れ氷の輪を作って穴の伸縮を止めた。

「氷の輪がいつまで持つか判らん。早く穴を通してここから出るぞ」

「おう」

「はい」

まずラグとニックが強力してオーカスを穴から出した。次にラグが穴から出る。最後にニックが穴から顔を出すと、ラグが手を差し伸べた。

「急げ、ニック」

ニックが出たあと氷の輪は砕け散り、壁の穴はみるみるうちに塞がった。ニックはラグの手を掴みながら言う。

「ラグ。愛してる」

ラグは急に手を放した。床に足をつけたばかりのニックはバランスを崩してコケそうになる。

「おい。急に手を放したら危ねえだろ」

「どうもな、お前から愛情表現を受けると、つい手を放したくなるんだ。俺は」

「またふられちゃったちゃったよ」

ニックはオーカスに言う。

オーカスは苦笑いを浮かべている。

ラグはニックを気にもせず天井を見た。

ニックが聞く。

「ラグ。何をやっているんだ？」

「確かローラン国王は天井のこの辺りに入っていったんだが」
オーカスと一緒に天井を見ながら言う。

「壊されたナノマシンは学習できませんので、まだラグの火魔法は有効だと思いますよ」

「そうか。ならやってみるか」

「ええ。私も土魔法を使って穴を開けます」

オーカスがニックを見るので、ニックも言う。

「ほんで、俺が氷の輪で穴の収縮を防げばいいんだね」

「そうです。お願いします」

オーカスの声のあと、先ほどと同じ要領で穴を開け、ニックが氷の輪で穴の収縮を防いでいるうちに、オーカスは浮遊魔法を使いラグと一緒に穴を通って上へ移動する。ニックも氷の翼であとに続いた。

穴を通るとその先はただっ広い空間になっていた。

穴から顔を出したラグは空が見えると思った。床に手をつけば、床には地面の景色が映し出され、大勢の兵士がローランとサザードに分かれて戦っている。周りを見れば小型飛空艇が空中戦を繰り広げ、サザードの飛空艇がこちらに向けて光線を打ち出している。

天井と壁と床がスクリーンとなって、外の景色を映し出しているのだ。

穴から出たニックは喜びの声を上げた。

「俺の連絡を受けてサザード国王が来てくれたんだ。ヒャッホ」

第140話：ローラン国王10

「あそこにローラン国王がいます」

オーカスが指をさした空間の中央にはローラン国王のいるゆりかごがあり、中でローラン国王は巨大飛空艇ノアを操作してサザーランドの飛空艇団と戦っていた。

「おのれ。サザーランド」

ゆりかごの中からローラン国王の悔しそうな声が聞こえる。

ラグはゆりかごから出ているコードをメルトソードで切断した。

「俺の家族を殺しやがって」

神経と繋がっているコードを切られたローラン国王から悲鳴が聞こえる。

ラグがゆりかごに向かって何回かメルトソードを振ると、切断されたゆりかごからローラン国王が姿を現した。

ローラン国王は金属が貼り付いた顔をラグ、オーカス、ニックと順に向けて驚く。

制御を失った金属板は少しずつローラン国王の顔から剥がれ落ちていく。

「お前たちは壁に押し潰されて死んだんじゃないのか」

金属板の下から見えるローラン国王の表情は驚愕に満ちている。

オーカスはローラン国王に言った。

「確かに死ぬところでした。ですが、秘宝に身を委ね、私たちの死を確認しない王の傲慢さのお陰で、皮肉にも私たちは助かったのです」

ローラン国王はゆりかごから這い出しながら言う。

「違うのじゃ。余は、本当はそちたちを殺したくなかったのじゃ。

余は無益な殺生は好まん。シーライト將軍なら分かるだろ。余はそちを小さい頃から目をかけてかわいがってきた。そんなそちを殺すなど、余ができればいい」

オーカスは四つん這いになり体を小さくして身を震わせているローラン国王を見下ろした。

「ローラン国王」

オーカスの脳裏に幼い頃の自分をあやすローラン国王の姿が蘇る。だがそれもシステムの機械音声により掻き消された。

「光線砲チャージ完了。発砲三十秒前。二十九、二十八、二十七」

照準はサザーランドの飛空艇団に合わせてあるが、そこには撃ち合いをしているローラン国の飛空艇団もいる。

ニツクが声を上げる。

「大変だ！ サザーランド国王が危ない。ローラン国王はシステムから切り離されていて光線砲を止められん。どうすればいいんだ」ラゲはローラン国王の襟首を掴む。

「ほかに光線砲を止める方法は無いのか？」

「知らん。余は知らん」

ローラン国王が首を横に振っていると、オーカスが持っていた魔法器を投げ捨てた。

「私が鍵の雷魔法いかすちを使って光線砲を止めます」

ニツクが言う。

「光線は光だ。雷でどうやって光線を止めるんだ？」

オーカスは集中しながら言う。シーライト將軍として。

「雷にも光はあります」

オーカスの体が淡く輝く。

「ローラン国王。以前、飛空艇を落とすわたくしの鍵の魔法を見たითおっしゃいましたね。よい機会です。今ここでお見せしましょう。賢者シーライトの血を引く、祖先オーカスが使ったといわれる、ユーフォリアの地の果てまでも攻撃が可能な、正義と勇気の象徴、わたくしの雷魔法いかすちを！」

オーカスは両手を広げて見上げた。

第141話：ローラン国王11

壁のスクリーンは外の景色を隈なく映し出し、体を淡く輝かせているオーカスが空の中に浮かんでいるように見える。そのオーカスの頭上、巨大飛空艇ノアの上空に六角形の光の板がいくつも現れ、一定の間隔で円を描いて並び魔方阵形となって回転しながら稲妻を帯びる。オーカスの魔力が増すごとに六角形の光り板の枚数も増え、回転速度があがることに発する稲妻の量も増えていく。

サザーランドの兵士が国王に報告する。

「巨大飛空艇の上に、増大中の雷の魔力を感知。スピリット級です」
サザーランド国王は言う。

「その真下に、雷使いの賢者シーライトの末裔がいる。多分、ケルティック卿も一緒にいるはずだ。感応魔法使いに至急連絡し、the keysの正確な位置を割り出せ」

サザーランド兵士が感応魔法使いに連絡をとっている横で、もう一人の兵士が叫ぶように言う。

「大変です。巨大飛空艇が光線砲の発射段階に入っています」
サザーランド国王が命令する。

「回避だ！ 急いで弾幕を増やせ！ 攻撃に備えろ！」

「回避、間に合いません」
「何！」

サザーランド国王の表情が凍りついた時、巨大飛空艇から光線砲が発射された。

同時にオーカスの鍵の雷魔法が炸裂する。

両国の飛空艇団を巻き込むほどの太い光線は光の筋を伸ばしているが、途中でオーカスの稲妻が光線を遮るようにして交わり、光線は稲妻と交わった所で折れ曲がり、突き刺さるようにして何も大地に命中した。

それは一瞬の出来事だった。

光線と稲妻がやんだあと、オーカスは上空にある雷の魔法陣を使つて空と大地で戦う者たちに言った。

「私は、ローラン国軍、シーライト將軍である。今回の両国の戦いを招いた戦犯である、ローラン国王を確保した。ただちに双方の攻撃を中止せよ。繰り返す」

オーカスは壁に映し出されている両国の飛空艇団や大地で戦う兵士を見ながら言葉を繰り返す。

ローラン国王は、ラグたちの目が離れた隙に逃げようと、静かに床を這つて移動して行く。

それをニックが見つけた。

「誰が逃がすか！」

ローラン国王の足元の床が波打つて波紋が広がる。

その直後、ローラン国王は苦しみ出した。

「ぐがが、かはっ、がぐあ。助けてくれ」

ローラン国王は床の上でのたうち回る。

ラグがローラン国王を見ながら言った。

「ニック。ローラン国王に何をしたんだ？」

ニックは、ローラン国王の腕から落ちた水のプレスレットを拾いながら言った。

「ちよいと水魔法を使って、ローラン国王の体内酸素濃度を薄くして酸欠状態にした。ほかにいろいろな魔法をかけたから、今のローラン国王は全身の痛みと、痒みと、吐き気と、幻覚の恐怖体験中さ」
「助けてくれ。余が悪かった」

苦しむローラン国王を、オーカスは冷たい視線で見下ろす。

「私の家族も毒により苦しみながら死んでいったのです。処刑される前に、少しでもその苦しみを知って頂かないと」

ラグはメルトソードをローラン国王に向けた。

「処刑まで待つていられるか。家族の恨みを晴らすため、今ここで俺が殺す」

「ひいひい」

ローラン国王はメルトソードを見て、苦しみながら悲鳴をあげる。オーカスもラグに同意し、ローラン国王から雷のペンダントと土の指輪を取り上げて言う。

「そうですね。裁判もすぐには終わらないでしょうから、今ここで死んで頂いたほうが、私の家族も喜ぶかもしれません」

ニックも二本の短剣を握って言った。

「俺も、ここでやっちゃうに、賛成」

ラグたちが、それぞれの武器を構えた時、巨大飛空艇はまた船体を大きく揺らした。中にいるラグたちは足元をふらつかせてよろめく。

第142話：ローラン国王12

ラグは壁に手をついて言った。

「今度はなんだ？」

オーカスもバランスを取りながら言う。

「壁に映し出されていないので分かりません」

ニックもよろめきながら言う。

「壁の飛空艇が動いていない。下にいる兵士も動いていないぞ。ひよつとしてこの壁のシステムが壊れたとか？」

ラグとオーカスは同時に言う。

「なぜ壊れるんだ？」

「どうしてですか？」

「壁に聞くなよ」

ニックが低い声でツツコミを入れていると、その壁に光が走り半円を描いてからトンネル型となった壁が音を立てて倒れた。

開通したトンネルを通りサザーランド国の兵士が次々と中に入ってくる。

ラグとオーカスが身構えると、ニックが言った。

「大丈夫。あの人たちは全員俺の知り合いだから」

オーカスが理解できないといった表情をする。

「あの兵士全員が知り合いなのですか！？」

ラグは警戒を解く。

「そういえば、ニックは王宮住まいのケルティック家の人間だったな」

「放蕩息子の俺は、住んでいないけどね」

ニックは今も床で呻いているローラン国王を見ている。

サザーランドの兵士がニックの水魔法で苦しむローラン国王を拘束した頃、サザーランド国王がトンネルを通り中に入って来た。

60歳前後のローラン国王と比べると、40歳前後に見えるサザ

ーランド国王はとても若く見える。

ニックは条件反射でサザーランド国王の前で床に片膝をついて赤い髪（ヘアー）の頭を垂れた。

「直々のお越し、痛み入ります」

「うむ」

サザーランド国王はニックを見てからローラン国王を見る。

「久し振りよのう。ローラン国王」

ローラン国王は苦しんでいて返事ができない。

サザーランド国王は考える。

「いかがしたのじゃ？ ローラン国王よ？ さては 。ケルティック卿。水の鍵の魔法か？」

「御意」

ニックの返事を聞き、サザーランド国王の表情が険しくなる。

「水魔法を、やめい！」

「恐れながら、我が兄を殺したローラン国王の仇を討つ事をお許し頂きたく」

「ならぬ！」

肯定しないサザーランド国王に、ラグとオーカスも床に片膝をついて進言する。

「恐れながら、私の家族もローラン国王に殺されました。ニック、いえケルティック卿と同じ思いでございます。どうか仇を討つ事をお許し下さい」

「サザーランド国王、わたくしもローラン国シーライト將軍として、家族の仇であるローラン国王を討ちとうございます」

「ならぬと言ったら、ならぬ！」

なおも肯定しないサザーランド国王に、ニックの進言は続く。

「なぜでございますか？ 我らはローラン国王という一人の人間が起こした戦争で、家族や友人を失ったのです。仇を今討たずして、いつ討てとおっしゃるのです？」

今のニックは貴族の言葉を使っている。いつも変態振りを披露し

ているニツクに上品な口調はとても不釣り合いに見える。

サザーランド国王は、兄弟思いのニツクの強い訴えを静かな表情で受け止めた。

「戦争で身内や友人を失ったのは、鍵の継承者だけではない。民もそうだという事を忘れてはならぬ。私は民の代表である国王として、ローラン国王を民の前に連れて行き、犯した罪の所業を民に問わねばならんのじゃ。今すぐにローラン国王にかけた水魔法を解くのじゃ」

ニツクは悔しそうに水の鍵魔法を使いローラン国王にかかっている水魔法を解いた。

ローラン国王は呼吸がスムーズになり落ち着きを取り戻す。

サザーランド国王は顔をあげて兵士に言った。

「即刻、ローラン国王を引っ立て」

「はっ」

兵士は指示通りローラン国王を連れて行く。

第143話：ローラン国王13

ラグは立ち上がって怒りの眼でローラン国王を見送る。

サザーランド国王は静かな口調でラグに言った。

「サザーランド国の王家の伝承は、こう記されておる。このノアという巨大飛空艇は、地球で暮らしていた神々を乗せ、暗き空間を移動し、この地に降りた。神々はテラフォーミングという古の魔法いにしえを用いて、水を生み風を作り植物を芽吹かせ、我々をも創造した。神々は我らと契約をしたあと、この地に降り立ち、暮らしたのじゃ。すなわち、我々のいう神々とは、この地で暮らす民の事なのじゃ。よく覚えておくがいい。我らの力の均衡が崩れ、この大地で暮らす民に害が及んだ時の事を考え、我らの体内に制御プログラムという呪文を施した。今回のローラン国王のように、誰かの力が暴走し民を虐げるような事があった場合は、王及び賢者の末裔の誰かの制御プログラムが起動し、暴走した者を食い止めるようになっておる。その権限は絶対で、相手のナノマシンのプログラムの書き替えが可能になる」

ニツクは、サザーランド国王が言わんとしている事に気付く。

「それは、もはや!」

サザーランド国王の視線は、今もラグに向けられていた。

「そうじゃ。今回は、あの者がその役割を担ったのじゃ。愛と誠実の象徴。火の鍵の継承者。賢者コトツクの末裔」

ラグはサザーランド国王を見た。だが瞳はまだ怒りに満ちていて、その怒りは親の仇を討たせなかったサザーランド国王にも向けられている。

「大義であつた。賢者コトツクの末裔よ。さぞかし苦しかったであらう」

「俺は未だに、ナノマシンの、プログラムの、訳が分からないんだが」

愚痴るラグに、サザーランド国王は言う。

「余が知っている事ならなんでも教えて進ぜよう」

サザーランド国王は皆を誘導する。

「慣れない場で長話をするのは疲れる。早々に城に戻るぞ」

「はっ」

サザーランド兵士が来た道を戻ろうとした時、また巨大飛空艇が揺れた。

後方にいた兵士が叫ぶ。

「我が軍より入電。巨大飛空艇の船体が傾き、高度が落ちているとの事です」

サザーランド国王は呟くように言った。

「侵入するために、いくつも穴を開けて来たが、それがいけなかったのか」

ラグとオーカスとニツクは顎を落とした。

ラグは「どれだけ穴を開けて来たんだ。この王様は」と思い、オーカスは「推進力になる部分を割り貫いてしまったのかも」と思い、ニツクは「我が国王は秘法を壊し」と言葉にならないほど驚いている。

ニツクの声が裏返る。

「サザーランド国王……」

ラグは小声で言った。

「サザーランド国王は、天然か？」

オーカスは口の前に指を立てる。

「ラグ。静かに。無礼ですよ」

ニツクは急いでローラン国王のゆりかごがあった場所に行きしゃがんで床に手をついた。腕の水のプレスレットが淡く光り、ニツクも呼応して淡く光る。水魔法を使い船体の状況を調べているようだ。「王のおっしゃるとおり、システムの殆どが機能を失い浮いているのがやつとの状態です。こりゃあ直に墜落しますね」

ニツクは立ち上がる。

オーカスには一瞬ニツクの姿がダブって二人いるように見える。

ダブったどちらかが消えてしまいそうに思えてニツクの腕を握った。

「ニツク大丈夫ですか？」

「ん？ 何が？ なんでもないけど、急にどうしたの？」

ニツクはきょとんとしている。

「何もなければいいのです」

オーカスはニツクの腕から手を放した。

第144話：ローラン国王14

ニックは皆を先導する。

「さあ、早くサザーランドの飛空艇に戻らないと」

ラグたちはサザーランド国王と共に走り、巨大飛空艇に横付けされていたサザーランド国の国旗を掲げた飛空艇に無事に搭乗した。

オーカスはラグに言う。

「墜落する前に飛空艇に戻れてよかったですね」

「ああ」

ラグが返事をした直後に、巨大飛空艇は降下を始めた。

ラグたちは飛空艇の窓から落ちていく巨大飛空艇を見た。地面に叩きつけられ壊れていく巨大飛空艇は、飛空艇団の光線に耐えたと思えないほど脆い崩れようだった。崩れていく回りで土煙が上がる。ラグはポツリと言った。

「神々が作ったもんでも、最後は呆気ないな」

「そうですね」

オーカスも同感だと頷ぐが、声が一人足りない事に気付いて周囲を見た。

ラグが聞く。

「どうした、オーカス？」

「ニックの声がしないので」

「そういえば、そうだな」

ラグもニックを探す。

ニックはすぐに見つかった。サザーランド兵士に混じって立っているが、蠟人形のように全く動かない。

オーカスが歩み寄る。

「ニック？」

よく見ればニックの姿が半透明に透き通っている。

オーカスは急いでラグを呼ぶ。

「ラグ。ニツクの様子が変です」

オーカスの声でラグが駆け寄り、サザーランド国王や兵士たちがニツクに注目した。

オーカスの言うとおり、ニツクの体は透き通り、たまに波紋が起こり揺らいだりしている。

ラグはニツクの肩を掴んだ。

「ニツク。どうしたんだ？」

その瞬間、ニツクの体はただの水と化し、落ちて水溜まりとなつて床に広がった。

ラグは雫がかかった自分のブーツを見て息を飲む。

オーカスは水溜まりに向かって何度もニツクの名を呼ぶ。

ラグはオーカスほど取り乱さず黙って水溜まりを見つめた。そして、落ち着くようにとオーカスの肩を掴んだ。

「ニツクは、ワザと巨大飛空艇に残ったんだ」

「そんなはずは。だって私たちと一緒に逃げて」

言い掛けて、オーカスはニツクの姿がダブって見えた時の事を思い出した。

「もしかして、あの時に……。ニツクはシステムの状況を調べた時にすぐ墜落する事を察知して、私たちがサザーランドの飛空艇にたどり着くまで、墜落寸前の巨大飛空艇を維持しようと、鍵の水魔法を使って」

オーカスは泣き声になりながらも言葉を続ける。

「もう一人の自分を作り、本体はシステム維持のために残り幻術で身を隠して……。ニツクは巨大飛空艇と一緒に落ちて……」

ラグは、泣いて言葉が続かなくなったオーカスの肩を抱く。

「もういい。もういいから。な、オーカス」

「ラグ……」

「こんな事なら、ニツクにキスの一つでもくれてやればよかった」
ラグの言葉を聞いてオーカスはラグの胸にすがりついて声をあげて泣き出した。

サザーランド国王は静かに言った。

「きつとケルティック卿の体内にあるナノマシンのプログラムが起動し、プログラマーの血を受け継ぐ余を守れと、賢者ケルティックがニツクに伝えたのじゃろう」

サザーランド国王はオーカスの泣き声を聞きながら悲しみの表情を浮かべた。

「神々も惨いプログラムを作りおる」

巨大飛空艇は、サザーランドとローランの両国の兵士が見守る中、完全に崩壊し粉々に崩れ去った。

第145話：その後

ラグたちを乗せた飛空艇はサザーランド国の城に到着した。

ローラン国王は、サザーランド国王の命令により身柄を拘束され、サザーランド城内に幽閉された。

ラグたちは数日サザーランド国王宮に滞在し体の疲れを癒してから、迎えに来た飛空艇に乗りローラン国の城に戻った。

こうしてアルランドの英雄コトツク卿としてローラン城で暮らすようになったある日、ラグは光を目蓋に感じて目を開けた。もう窓際にオーカスはいない。ラグは起き上がってクローゼットに手を伸ばす。以前着ていた剣士の服は傷みが目立つものの今もクローゼットの隅に掛けてある。その反対側にある由緒正しきコトツク家の者が着る正装を手に取り身を包む。近くにある鏡を見て着崩れを直し、灰色の頭髮の寝癖も直して、立て掛けてあった剣を腰に挿した。

剣だけは昔と変わらず魔法器がついていない。

ラグは扉を開けて外に出た。廊下にはローラン国の紋章の刺繍が施された絨毯が敷いある。ふかふかの絨毯を踏み締めてラグは静かに品良く歩いて行く。歩いている時に王宮内で働く者とすれ違ふと必ず挨拶を受ける。

「英雄ラーグ殿。おはようございます」

「おはよう」

ラグはにつこりと笑顔で挨拶をしてすれ違ふ。

王宮内は広くてまだ慣れないが、一つだけ覚えた道順がある。

ラグはその通りに進み階段を上がりオーカスのいる將軍室へ向かう。それがラグの朝の日課になっていた。將軍室のドアの前でもう一度身形を整えてから、ラグはノックのあとにドアを開けた。

「シーライト將軍。おはようございます」

中には騎士の姿をしたオーカスがいて將軍専用の机に向かって書きものをしている。

「おはよう。ラーグ殿」

十七歳の少女は、品のある素振りでラグを見てからまた書きものを続ける。

ラグはドアを閉めてオーカスがいる机に歩み寄り、机の書類を覗いた。

「朝から何を書いているんだ？ オーカス？」

ラグの言葉遣いがいつもの調子に戻る。

「昨日話した巨大飛空艇ノアが自己修復を始めた件についてです。^{さくしゅ}」

陸の二十一部隊のオーカス隊長に、至急ノアの状況を把握してくるよう命令書を書いているのです」

「オーカス隊長って、お前の事じゃないか。自分の命令書を書く必要はないだろ」

オーカスは無邪気に笑う。

「そうですが、上官の命令書無しに外出外泊をすると、無断外出外泊とみなされて、將軍の私といえど懲罰を受けてしまうのです。そうそう、ラグもオーカス隊長に同行して頂きますので、ラグの外出届けも書いておきました。忘れずに持っていて下さいね」

オーカスの口調もいつもの調子に戻っている。

「俺もなのか？」

ラグは命令書を受け取る。

「ええ。ラグも今は王宮に席を置く立場なので命令書が必要なのです」

命令書には、オーカスの手書きでラグのフルネームが書いてある。

「お前。字が上手いな」

「將軍職になると、手書きの書類ばかり書かされるので、多少は字が上手いかもしれません」

オーカスはラグに誉められて少し照れながら立ち上がった。クローゼットを開けて、衣類をいくつか取り出して將軍用の椅子の背もたれに掛けている。

「ラグ。食事は済ませましたか？」

「まだだ。どうせお前も食べてないだろ」

「私が朝食を摂っていないとよく判りましたね。さすが私の保護者」
ラグを保護者呼びわりしていたニックがいなかったため、オーカスが代わりに言う。きつとラグに気を遣うての事だろう。

ラグはニックを思い出して、熱くなる目頭を冷ましながら言った。
「なんでもいいから早く出掛けて何か食おう。俺は腹ペコだ」

オーカスは、衣類を選ぶ手を止めてラグの表情をじっと見ていたが、ラグが顔を上げた時に視線をそらし、ラグを見ていない振りをして、椅子の背もたれにあつた衣類を掴んだ。

「ならば、その命令書を持って隊長のオーカスと我が軍の飛空艇内で朝食を摂って下さい。これはシーライト将軍である私からの命令です。英雄ラーグ殿」

オーカスは笑顔を作って言う。そんな十七歳の少女は、マジックナイトの称号を持つ将軍である。

命令を受けたラグは、作法どおりに踵を鳴らして足を揃えると、オーカスに向かって敬礼をした。

「ラーグ・フルフォンド・コトツクは、シーライト将軍の命により、名も無き土地へ向かいます」

オーカスはラグの敬礼を見届けてから、着替えのために腰にある剣を抜いて近くの壁に立てかけた。

剣についている魔法器はオーカスのために特別に作られたもの。
生産地はコトツク。雷の鍵いかずちの魔力をその魔法器で変換し、全ての属性魔法を操る事ができるようになっている。彼女がマジックナイトの称号を持つ由縁である。

第146話：また名も無き土地へ

彼女に称号を与えた前王は現在戦犯としてサザーランド城内に幽閉されている。

鍵の継承者にならなければ、普通の十代の少女として今頃は花嫁修業をしていたらうにと思いながらラグがオーカスを眺めていると、オーカスは服のボタンを外しかけ、まだ室内にいるラグに気がついた。

「ラグも早く自分の部屋に戻って支度をして下さい。私も今から支度のために着替えますので」

オーカスは恥ずかしそうにしながらラグを見ている。

またそのしぐさが女性らしかったので、ラグは不覚にも十代の少女に興奮を覚えてしまう。

「わっ、悪い。じゃあ、俺も着替えてくる」

ラグは逃げるようにして部屋を飛び出た。歩いて来る王宮侍女の視線を感じ、素早く取り繕って何事も無かったように歩き出す。だが、ラグの頭の中にあるオーカスの写真集に今見たオーカスの生着替えシーンが追加されたのは言うまでもない。

ラグは自分の部屋に戻って着替えを済ませてから待ち合わせの飛空艇に向かった。またオーカスに会えると思うと顔がにやけてくる。ラグの妄想どおりに、飛空艇の中にいたオーカスは少女の笑顔でラグを迎えた。

初めて出会った時と同じ髪を後ろにまとめて紐で結び、きちんと身形を整えた剣士の姿で立っている。家族が死んだと聞かされて、まだそれほど日は経っていないのに、どこからそんな笑顔がこぼれるのだらうと、以前酒浸りだったラグは自分との違いと、十代の少女のオーカスの強さを感じながら飛空艇に搭乗した。

飛空艇は静かに浮上し名も無き土地へ向かう。

オーカスと旅をしていた頃は、何日もかけて名も無き土地にたど

り着いたが、飛空艇を使えばオーカスと朝食を摂っているうちにたどり着いてしまう。

ラグは、オーカスが入れたミルクを飲みながら飛空艇の窓から見える、オーカスと共に歩んだ旅路を見下ろした。

何日もかけて歩いた道はとても細くて短く見える。

オーカスは外を黙って眺めているラグの表情を見ながら声を掛けた。

「もうすぐ名も無き土地に到着しますね」

「もうなのか。飛空艇だと早いな」

オーカスが窓から外の景色を見るのは相変わらずで、ラグの隣に立って一緒に眼下に広がる景色を見る。

「ラグと旅して来た道がとても細く見えますね」

「ああ。あんなに苦労して越えた国境の壁も、見上げるほどの城もおもちゃの模型のようだ」

前ローラン国王は巨大飛空艇からこの景色を見て、なおさらユーフォリアを欲しく思ったのだろうか。

ラグは細く続く旅路の先にある名も無き土地を眺めた。青く広がる草原が境界線を引いたみたいに途切れて、そこから草木の無い砂地が広がっている。その先に、ラグたちの眼下で崩れ去った巨大飛空艇があるのだが、出かける前にオーカスが言ったとおり、巨大飛空艇は自己修復をしたようで崩れる前の姿をして砂地の上にあった。「自己修復を始めたと聞いていたが、もうほとんど直っているじゃないか」

「報告によると、直っているのは外壁だけのようです。外壁は一晚のうちに修復し、修復当時はかなり薄い外壁だったのですが、日を追うごとに外壁が厚くなり、柱ができ内壁ができ、それがいくつかの空間に分かれて、今ではあのガラスケースの中で胎児が育っているそうです」

オーカスは記憶している報告書の内容を正確に伝える。

ラグはガラスケースの中で眠っていた母キリエラにそっくりの女

性を思い出した。ガラスケースの中で育っているという胎児は、
ま
たキリエラそっくりの女性に成長するのだろうか。

第147話：金髪のケルティック卿1

ラグたちを乗せた飛空艇は、巨大飛空艇の上で静止し、現地にいる誘導員に従って巨大飛空艇から少し離れた所に着陸した。

登場口に現れたラグは、目の前にそびえる巨大飛空艇を見上げる。オーカスもラグの後ろから巨大飛空艇を見た。

「こうして改めて見ると、神々が創造された飛空艇は本当に大きいですね。名も無き土地で草木が育たないのは、あの巨大飛空艇の離着陸用に神々が態^{わざ}と作ったからだ」と、巨大飛空艇のシステムデータを解読している研究者が言っていました」

「神々は、なんでも作るんだな」

ラグはオーカスと一緒に巨大飛空艇から降りた。

砂地は、先の戦争の残骸が無数に散らばっていて、所々に人骨も見える。

誘導員はその砂地を踏み、搭乗口から降りて来たラグとオーカスを迎えた。

「ようこそ。まさか鍵の継承者が直々にお越し下さると思わず、今使いの者を出してここの責任者を呼びに言っておりますので、少々お待ち下さい」

使いの者が呼びに行ったという責任者は、誘導員の後ろの、現在ラグの視線の先にいて、こちらに向かって歩いて来る金髪の男性だろうか。

「私たちは、ローランの調査報告を受け取りに来たついでに、自己修復をしているという巨大飛空艇の視察をしに来ただけなので、どうかお気を遣わないで下さい」

オーカスの話し方からすると、誘導員はサザーランド国の人間のようなのだ。

ラグはオーカスの隣に立ち、陽の光を受けて白く光る砂地の眩しさに目を細めながら、金髪で肌が真っ白な賢者ケルティックにそっ

くりの紳士を見ていた。

オーカスも金髪の紳士に気付き、誘導員との会話をやめて笑顔でその紳士を待った。

紳士はエメラルド色の瞳でラグとオーカスを見ながら歩いて来る。目の前の紳士はケルティック家の人間に間違いないとラグが思った時、紳士はラグとオーカスの前に立って手を出して握手を求めた。

ラグとオーカスは握手と挨拶を交わす。

オーカスは申し訳なさそうに言った。

「まさかサザーランド国の方に出迎えて頂けるとは思ってもみなくて、本当に有難うございます」

金髪の紳士はエメラルド色の瞳を細めて人懐っこそうな笑顔になつて言う。

「いえいえ。実は私があなた方にお会いしたくて、鍵の継承者が到着したら私に連絡をするように誘導員に申し付けておいたのです。

一応、私もケルティック家の人間なので」

品よく話すケルティック家の紳士はラグたちを巨大飛空艇へ誘導する。

ラグは誘導に従って歩きながら言った。

「貴殿をケルティック卿とお呼びしてよいのでしょうか？ このたびのご不幸を、なんとお悔み申し上げたらよいか」

ラグはニックの死を悔やみ切れずにいるようだ。

第148話：金髪のケルティック卿2

ラグより背が高いケルティック卿は、ラグの背中を軽く叩いて慰めながら言う。

「コトツク卿。巨大飛空艇に残ったのは、彼自身が考え望んだ事です。彼もサザールランド国王とあなたたちを助ける事ができて満足だったと思います」

オーカスはケルティック卿に聞く。

「あの、ニツ、ニコラス殿のご遺体は見つかったのでしょうか？」

「いえ。まだ見つかっておりません。肉片はいくつも見つかったのですが、どの肉片が誰のものなのか、ケルティック家の医術を使い調べているところです」

「水の鍵は？」

「水の鍵も見つかっておりません」

「そうですか」

オーカスは悲しそうな表情をする。

ケルティック卿は、目の前にそびえ立っている巨大飛空艇を見上げて言った。

「鍵もナノマシンの集合体で形成されているので、自己修復の過程で巨大飛空艇のナノマシーンとして吸収された可能性があります」
オーカスも巨大飛空艇を見ながら言う。

「私たちの体内にもナノマシーンがあると聞きました。ニコラス殿も水の鍵と一緒に巨大飛空艇に吸収されたのかもしれないね」

「その可能性も考えられますね」

ケルティック卿は巨大飛空艇の搭乗口に入って行く。

オーカスも続いて中に入るが、ラグは飛空艇の外壁に手を突いた。

「ラーグ殿？」

オーカスがついてこないラグを呼ぶ。

ラグは外壁に向かって立ち、外壁に話しかけている。

「俺にはナノマシンのプログラムを無条件で変更する絶対権限がある」

オーカスはラグに駆け寄る。

「ラーグ殿。どうしたのですか？」

ラグは鍵の魔力を発動させ体を淡く輝かせて巨大飛空艇のシステムにアクセスしながら言う。

「ニツク。もし巨大飛空艇に吸収されたのなら、巨大飛空艇から分離して姿を現してくれ」

「ラーグ殿。いくらなんでも、それは無理です。絶対権限を持つあなたでも、巨大飛空艇のシステムプログラムを変更する事はできません。報告書にありました。鍵と巨大飛空艇はナノマシーンで形成されていますが、プログラムは全く別物だと」

オーカスはラグの隣に立って説明をするが、それでもラグは巨大飛空艇の外壁に手について鍵の魔力を使いアクセスを続ける。

「頼むから姿を現してくれ。ニツク」

「ラーグ殿。私の話を聞いて下さい。研究員の話によると、巨大飛空艇は私たち鍵の継承者の絶対権限を受け付けないように作られているのです」

オーカスは、ラグと一緒に旅をし傍でラグを見てきたからこそ、ラグにとって仲間を失う事がどれほど辛い事なのか知っている。出会った頃のラグとの違いは、今のラグはオーカスの前で苦しいと素直に表現するようになった事だ。

「ニツク。巨大飛空艇と共にいるなら出てきてくれ。俺のために」

ケルティック卿がラグに近づく。

「コトツク卿は、愛と誠実の象徴である火の鍵の継承者に相応しく、熱き思いをお持ちなのですね」

第149話：金髪のケルティック卿3

ケルティック卿はラグの腕に触れて言葉を続ける。

「ニツクは、コトツク卿の熱き思いに触れてしまったがために、あなたを愛してしまったのでしょう」

ラグの動きが止まる。ラグは体を光らせながらケルティック卿を見た。

「ケルティック卿？」

ケルティック卿はハンサムな顔立ちで、迷える子羊となったラグに、教会の牧師のような表情をして導きの言葉を告げる。

「ニツク。愛してる。と言えば、それだけでニツクはとても満足すると思いますよ」

ラグの体から光が消えた。ラグはケルティック卿のエメラルド色の瞳を見つめて、唇をゆつくりと動かした。

「ニツク。愛……して……る」

最後の「る」を発音した時、ラグの唇はキスを求めるように開きかけた薔薇の蕾となって、ケルティック卿に向けられた。

ケルティック卿は、急に表情を変えてラグに飛びついた。

「ああ。ラグ。私もラグを愛してます」

ラグは飛び付いて来たケルティック卿の顔面を片手で受け止めた。と言って、俺がお前に愛を捧げると思ったか？ ニツク！

「あともう少しだったのに、どうして気付くんですか？」

「水の鍵魔法を使い、変装したって、行動がニツクそのものでは、ばれるのは当然だろ。その程度の変装で俺が騙せると思ったか。考えが甘いぞ」

「巨大飛空艇が崩壊した時、キスをくれてやればよかったと言っていたそうじゃないですか」

姿形はハンサムな金髪のケルティック卿。今の言葉使いも紳士のケルティック卿。だが行動そのものは変態ニツク。ニツクはケルテ

イック卿の姿のまま、ラグを抱きしめようとするが、手が背中まで届かず、ラグの頬に触れるのが精一杯で、とりあえずラグの頬に両手をそえてキスをしようと唇を尖らせる。

ラグは迫ってくるニックの顔を両手で押し返した。

「俺からのキスは、お前が死んでいたらの話だ。……て言うか、貴様、俺の話を聞いていないだろ」

そんなラグとニックに、オーカスは両手を広げて飛びついた。

「ニック。生きていたのですね」

ニックはラグから手を放してオーカスに抱きついた。

「オーカス。ちょっと見ないうちに女らしくなったね。もしかして薄化粧をしているのか？」

口調がガイドのニックになっている。

「はい。少しだけ。もうみんなの前で女を隠す必要がなくなったので」

「そうか。俺は綺麗になったオーカスに会えて嬉しいよ」

ラグの目には、愛おしそうにオーカスを抱き締める金髪のケルテイック卿の姿が映っている。

「オーカスに抱きつくな！」

怒りまくるラグを尻目に、ニックはオーカスの頭を撫でた。

オーカスはニックを見上げて、出会えた嬉しさを全身いっぱいに表示して言う。

「どうやって墜落する巨大飛空艇から脱出したのですか？」

ニックは周囲の視線を気にして咳払いをしてから、ケルティック卿として答えた。

「脱出は、できなかったのです」

第150話：金髪のケルティック卿4

「できなかった？　崩壊時に巨大飛空艇の中にいたということですか？」

オーカスの驚いた表情をかわいいと思いながらニックは答える。

「そうです。だから水の鍵が作り出した水球の中に入って墜落の衝撃を直接身に受けないようにして、周りに氷の壁をいくつも作って崩れ落ちてくる破片や機械の塊から身を守っていたのですが、氷の壁を作っているうちに私の魔力に限界が生じてしまつて。私はその前から戦い続けていましたからね。もうダメだと思い死を覚悟した時、巨大飛空艇の破片や機械の塊が私を包むように取り巻いて、私を守ってくれたのです。ただ、崩壊時に一緒に埋まつてしまつたので発見されるまで時間がかかりましたが」

「俺が調査隊に加わつていれば、お前が二度と地上に出てこないように、地中深く丁寧に埋め直してやったものを」

「もうラグ、意地悪な言い方はやめて下さい」

オーカスはラグを叱ってからニックに言う。

「本当はラグもニックに会えて喜んでいるのですが、まだ素直にならないところがあつて」

「俺の心を勝手にニックに向けるな！」

「素直じゃないラグも大好きです」

ニックは怒鳴るラグにウインクをする。

ラグは鳥肌を立てて嫌がる。

ニックがラグにウインクをしたのは作戦だつたようで、ニックはラグを黙らせてからまたオーカスとの会話を続けた。

「ラグが魔法を使えなかつた事について、ケルティック卿としてシーライト將軍にお伝えしたい事があります。ラグの感情の麻痺や幸福感の喪失などの症状については、賢者ケルティックから聞いております。ラグは過酷な戦闘体験による心的外傷後ストレス障害のよ

うです。現在は徐々にはありますが回復に向かっているそうです。
オーカス。あなたの存在がラグの心の薬になっているみたいですよ」
「私が!?!」

オーカスはラグの顔を見た。

ラグは急に真面目な表情をしてオーカスからの視線をそらした。
急いで取り繕ってニックに言う。

「悪いがニック、それは俺の問題だ。オーカスに話すのはやめてくれないか」

ニックは不敵な笑みを浮かべ、ギリシャ神話に出てくる神のように畏怖を込めた視線でラグを見下ろした。

「そうですね。ラグはコトック卿として、いずれローラン城を出て故郷であるコトック地方に戻り、お亡くなりになったお父様のあとを継いで知事の職に就き、ご両親や妹君、奥様であるオフエリア様の菩提を弔っていかなければなりませんからね」

オーカスは、ハッと気付いた表情をする。

ラグは現実を突きつけられて押し黙った。

顔色が変わってしまったオーカスにもニックは言った。

「オーカスもマジックナイトの称号を持つシーライト將軍として、シーライト家の再建をしていくんですよね。オーカスの夫となる方はどのような方になるのでしょうか。お祝いをお送りしたいので、お相手が決まったら私に連絡を下さいね」

第151話：金髪のケルティック卿5

急に無口になったラグとオーカスに、ニックは水の鍵の継承者である金髪のケルティック卿として念を押すように言う。

「次期ローラン国王の選任もしなければならぬし、いろいろと大変ですね。お二人とも。私にできることがあったら、いつでも援助させて頂きますので遠慮なく言って下さい」

オーカスからの返事はなく、オーカスの笑顔はそのまま凍りついて動かない。

ラグはアメシスト色の瞳で突き刺すような視線でニックを見据えて低い声で言った。

「水の鍵魔法を使いどんなに姿が変わっていても、火の鍵の継承者の俺に、水をさすお前は間違いなく水の鍵の継承者ニックだ」

不敵に微笑むニックに対し、ラグは今にも飛びかかりそうな怖い表情で睨んでいる。

オーカスは急いでラグとニックの間に入った。

「ニック。いえケルティック卿。我が国を気遣って頂き有難うございます。私はシーライト將軍としてローラン国のために尽力を注ぐ覚悟でありますので、私からお願い事がある時はどうか宜しくお願いします」

オーカスはシーライト將軍として、ケルティック卿であるニックに頭を下げた。

「それでは巨大飛空艇の中を視察したいので案内をして頂けませんか？」

ニックはオーカスの震える唇を見て言った。

「今のあなたに、この話は早過ぎたようですね。心配しなくても大丈夫です。私たち鍵の継承者は、気付かないうちに体内のナノマシンでお互いの連絡を取り合っていますから、私たちが完全に離れ離れになってしまうことはありませんよ」

心配している事はそうじゃないと思いながら、オーカスは隊長として、将軍として本当の思いを心の奥底に仕舞って言う。

「それはよかった。ケルティック卿もサザーランドの国が落ち着いたらローラン国に遊びに来て下さいね」

「はい。その時が来たら喜んで伺わせて頂きます」

オーカスはラグの所に行き、自分より背の高いラグをアクアマリン色の瞳で見上げて言った。

「そろそろラグも機嫌を直して下さい」

ラグのしかめっ面が直らないので、オーカスはラグの両頬をつまんで引つ張る。

「ラグは、いつまでたっても子供みたいなんだから。さあ、巨大飛空艇の中へ行きますよ。仕事。仕事」

ラグはオーカスに手を引かれながら言う。

「俺は子供じゃねえ」

ニックは陰で笑う。

ラグはすぐ気付いた。

「ニック。今笑っただろ？」

ニックは紳士のケルティック卿として返事をする。

「いいえ。笑っていません」

「いや。絶対に笑った」

「笑ってないって」

ラグが追及するので、ガイドのニックに戻ってしまう。

旅をしていた時となんら変わりのないラグとニックに、オーカスは喜びつつもローラン国の将軍として言う。

「二人とも、ちゃんと国の要人として仕事をして下さいね」

巨大飛空艇に搭乗する三人の楽しそうな声が響く。

巨大飛空艇の視察は、三人の破茶目茶トリオで行われ、その間ラグの操は幾度となくニックに狙われ、その都度オーカスに二人は叱られ、オーカスの監視により何とか無事に巨大飛空艇の視察は終了した。

第152話：雷と火1

ニツクに見送られ、ラグとオーカスを乗せた飛空艇はローラン城に向けて飛び立った。

飛空艇の窓から眺めているオーカスは淋しそうな表情で、砂地の上で手を振るニツクを見ている。今は陸の二十一部隊の隊長オーカスとして剣士の姿をしているが、彼女はクレア・オーカス・シーライト將軍という肩書きを持つ、華奢な体型からは想像もつかないほど強大な魔力を持った雷の鍵いかずちの継承者である。

そして隣に立っているラグも太陽並みの熱量を誇る火の鍵の継承者なのだが、ラグ自身は全く自覚がなかったりする。ラグはいつもの調子でオーカスと一緒にニツクを見ながら言った。

「いろいろあった旅だったな」

「ええ」

「なんていうか、うまく言えないが、有難うな。家族の仇を討つことはできなかったが、お前のお陰で俺は立ち直ることができた。これでやっと俺は故郷に帰ることができる」

オーカスのラグを見る表情が強張る。

「それはいつですか？」

ラグは斜め下を見て考えながら言う。

「うーん。巨大飛空艇の視察の報告書を全て提出してからになるから二、三ヶ月後ぐらいだな」

ラグは、オーカスへの思いが強くなる前に別れたほうがいいと思いい答えるが、オーカスにその思いは通じない。

「そんなに早く……」

「ニツクの言うとおり、早くコトツク家を再建しなければならないし、父と同じコトツクの知事にならないといかんしな。やることが多くて考えるだけで頭が痛い」

ラグは沈んだ表情のオーカスを見続けることができなくて、オー

カスに背を向けてカウンターへ行きグラスに水を注ぎながら言った。
「オーカスも大変だろと思うが、頑張つてシーライト家を」

ラグは背中に衝撃と温もりを感じて押し黙った。

オーカスが駆け寄つてラグの背に抱き付いたのだ。

抱き付かれた衝撃で、注いでいた水はグラスから外れてカウンターの上にこぼれた。

グラスの中の水と、こぼれて水溜りになっている水が、王宮内で育ったオーカスと、地方で育った自分との違いに思えて、ラグはこぼれた水を拭き取ることなく振り返った。

「オーカス。急に何をするんだ。危ないだろ」

ラグの目に飛び込んできたのは、オーカスの縋るような眼差しだった。

「ラグ。ローラン城に残して下さい。とお願いしたら、ラグは城に残ってくれますか？」

オーカスのラグに対する思ひは、当然ラグに伝わっているが、ラグはオーカスの肩に手を置いてゆっくりとオーカスを押した。

「城には、俺のやるべきことは無い」

オーカスはラグの胸に縋りつく。

「ラグが好きです。と言つてもですか？」

ラグは瞳を閉じる。今オーカスの顔を見たら、俺もオーカスが好きだと言ひそうになるからだ。

「俺には、妻オフェーリアがいる」

ラグは瞳を閉じたまま、すぐに背を向けた。近くにあったフキンを手にとってカウンターにこぼれている水を拭く。

またオーカスはラグの背に縋りつく。

「オフェーリアさんは、もう亡くなっています。それに巨大飛空艇ノアの上で、好きだと言つたら、ラグも好きだと答えてくれたじゃないですか」

「オーカスの事は確かに好きだ。でも、オフェーリアは愛しているんだ」

カウンターを拭く手を止め、ラグは脳裏に浮かぶオフェーリアに謝罪した。

オーカスはしばらくラグの背の温もりを感じていたが、手をついて離れた。

「ならせめて、故郷のコトックに帰るまで、城にいる短い間だけでいいですから、私をクレアと呼んで頂けますか？」

ラグはカウンターに手をついたまま動かない。

第153話：雷と火2

オーカスの考えは一つ。ラグの前では、一人の女性でいたいのだ。ラグの心の中で葛藤が起こる。オーカスの願いを受け入れてクレアと呼ぶべきか、それとも今のままオーカスと呼ぶべきか。巨大飛空艇ノアでオーカスを女性と知ってから、ラグの瞳にオーカスは17歳の少女としか映らない。

もし少年の二十一部隊の隊長のままだったら、ラグはオーカスに思いを寄せることはなかっただろう。いや。サザーランドの王都の宿で、悲しむオーカスを抱き寄せた時から、ラグの心はオーカスに奪われていたのではないか。

ラグは振り返った。

「クレア……」

ラグにとつて、とても大切に美しく崇高なる戦いの女神オーカス。ラグはアメシスト色の瞳でオーカスを見つめていたが、ゆつくりと動いて両膝を折って、片膝を床につけて、恭しく灰色髪（うすげ）の頭を垂れた。

「クレア・オーカス・シーライト將軍。わたくしラーグ・フルフォンド・コトツクは、ローラン国のため、いかなる時もシーライト將軍を裏切ることなく、永遠の忠誠を誓い、この身をローラン国のために捧げる所存でございます」

ラグの言葉は、残酷な矢となってオーカスの胸に突き刺さった。

「それが貴方の答えなのですね」

ラグの妻、オフエーリアを知らなかった訳ではない。ラグから断られるのも予想して覚悟をしていた。だが、断られた苦しさはオーカスの予想を遥かに上回っていた。オーカスは流れ出そうになった涙を必死に堪えた。ラグの前ではシーライト將軍として立っていないくてはならないからだ。

「ラーグ・フルフォンド・コトツク卿。私に対する貴殿の忠誠心、

確かに受け取りました。私は將軍としてローラン国のために、コトツク家の発展を願うことにしましょう」

こんな事なら思いをラグに告げなければよかったと、オーカスは心の中で叫び後悔する。

「私は少々疲れました。飛空艇が城に到着するまで部屋で休む事にします。ラーグ殿も部屋で休むといいでしょう。それでは、ごきげんよう」

オーカスは静かに歩いて部屋に向かう。見た目は落ち着いているが、心の中はぐちゃぐちゃに泣き崩れていて、將軍として今後ラグをコトツク卿と呼ぶべきか、ラーグ殿と呼ぶべきか、訳が分からなくなっている。部屋に入ってから飛び込むようにしてベッドに横たわり、枕に顔を押し当てて声が外に漏れないように泣き出した。

ラグはカウンターに手について椅子に腰掛けた。グラスの水を飲み干して空になったグラスを見る。最近酒を飲んでいなかったと思いいカウンターの奥をのぞくと、將軍が乗る上官用の飛空艇だけあって冷蔵庫の中に上級酒が置いてある。ラグは酒をグラスに注いで口に含んだ。酔って頭の芯が痺れてくれば、心の傷の痛みも和らぐ。

悪夢にうなされても、また酒を飲めば次の悪夢まで眠ることもできる。また以前の暮らしに戻れば済むだけの事。だが、ラグは酒を飲み干す事はなかった。酒が入ったグラスをカウンターに置いた。

「オフェーリア。父上。母上。セーラ。これからアルランドの英雄ラーグ・フルフォンド・コトツクの、火の鍵の継承者として本当の人生が始まるのですね」

カウンターのの上にあるグラスの中の酒に、ラグの涙が雫となって落ちた。

飛空艇は静かに空を移動しローラン城内に着陸した。

ラグとオーカスは、お互い会う事も無く時を別にして何事も無かったかのような顔で飛空艇を降りた。

その後、ラグとオーカスは王宮の執務で何度も出会う事になるが、二人の顔色に変化はなく、周囲の者も二人の間に何があったのか気

付くこともなく、二人にとっては重苦しく、ユーフォリアの人々にとっては静かな平穩の日々が過ぎていった。

それから数ヶ月して、戦犯の前ローラン国王の裁判が始まった。

ラグは裁判を見ることもなく故郷のコトツクの地へ戻るために城を出た。

同じ時、オーカスはシーライト將軍として裁判に参列し職務に勤しんでいた。無我夢中に將軍として職務に勤しむオーカスが、ラグへの思いを忘れようとしていた事は誰も知らず、当然城を出たラグ本人も知らない事だった。

それから更に数カ月後、サザーランド国王が見守る中、前ローラン国王に国民の判決が下された。

それは、ラグもオーカスもニツクも予想しなかった、無期懲役だった。

国民は、死よりも一生涯続く前ローラン国王の労働を望んだのである。

第154話：最終話1

巨大飛空艇の崩壊から約1年が過ぎ、最近は若い新国王の噂でローラン国は活気立っていた。

ラグは、生前父が勤めていた知事になるべく、現知事の下で事務官として働いていた。それとも一つ、戦争により断絶したサザーランド国との国交の回復のために、新ローラン国王に任命され大使としての役目も兼任していた。

そんなラグの所に一通の手紙が届く。手紙にはサザーランド国の紋章が刻印されている。

ラグは封を切り手紙を開いた。手紙には品の良い達筆な文字が綺麗に並んでいる。

我が愛するラグへ

今日、庭の薔薇を摘んでいる時にラグにぴったりの白い薔薇を見つけました。

手折るのをためらったのですが、やはり我が傍に置きたいと思い、氷付けにして我が机の上に飾っております。

ラグは読んでいる途中で手紙を握り込んで手の中で丸めた。

「そのうち、俺もあいつに氷付けにされる」

紙を丸めた音を聞き、ラグの執事が駆け寄る。

「ラーグ様。なんて事を。サザーランド大使様の手紙を、そのように手荒く扱ってはなりません。これは公的文書として保管しておかなければならないですよ」

「なら、お前の好きにしてくれ。たまの休暇くらい書斎でゆつくりしたいのに、そんな手紙を見せられたら、誰だつて丸めたくなる」

ラグはくしゃくしゃに丸めた手紙を執事に渡した。

サザーランド大使というのはニツクのことである。ローラン国の

大使がラグというのを聞きつけて自ら大使になりたいと名乗り出たのだろう。

「あーあ。こんなにしわくちやにして……」

執事が手紙を広げてしわを伸ばしていると、ドアのノック音が響き、侍女が静かに入って来て執事に耳打ちをした。

執事は手を止めて言う。

「昔、旅の連れだったという者が、ラーグ様に面会を求めているそうです。お通し致しますか？」

「旅の連れ？」

將軍のオーカスは、そう簡単に城から出れないはず。ということは、自称放蕩息子の子のニツクか。手紙をよこしたのはそのためかと思つたラグは焦つて舌を噛みながら言う。

「そ、その者は通すな。いいか、絶対にだ。氷付けにされる」
「はい。畏まりました」

侍女は返事をして書齋を出ようとするが、面会の者はドアの向こうにいたようで、侍女の制止を押しつけて書齋に入つてこようとする。

「ラグ。私です」

ラグは懐かしい声を聞いて椅子から立ち上がった。

「オーカスなのか？」

オーカスはドアから顔を出した。

ラグは急いで訂正する。

「すまん。私の勘違いだ。その者は通してくれても構わん」

「あ、はい。失礼しました。どうぞ、お入り下さいませ」

侍女はオーカスに一礼すると、オーカスの中へ通した。

第155話：最終話2

オーカスは魔法器がついた細身の剣を腰に提げ、初めて会った時と同じ、少年剣士の姿をしていた。

「オーカス。久し振りだな」

一年たった今も、ラグのオーカスへの思いは変わっていない。ラグは胸から溢れてくるオーカスへの思いを、オーカスに悟られないようにしながら静かな口調で言う。

「陸の二十一部隊の隊長の姿で来たという事は、公式の来賓ではないな。将軍として来れない何かが城であつたのか？」

「あの……」

オーカスが執事を気にするので、ラグは手で合図を送り執事に書斎から出るように命じた。

執事は静かに書斎から出て行く。

ラグはドアが閉まってから、また静かな口調で言った。

「城で何があつたんだ？」

「いえ、違うのです。その……」

オーカスはラグの顔を見ていたが、いざ説明する段階になって言葉が止まり、ラグから視線をはずした。

「私は、誕生日がきて十八歳になりました。だから……」

オーカスの言葉がまた止まる。

ラグは飛空艇で受けたオーカスの愛の告白が、またくるのかと予測して、断りの言葉を考える。1年以上も前に亡くなったとはいえ妻のオフエーリアを無下にできないからだ。考える猶予を得るためにオーカスの言葉を繰り返す。

「だから？」

「だから」

オーカスは顔を上げてラグを見つめる。やはり愛の告白かとラグが身構えた時、オーカスはラグに飛びついた。

「ラグ」

「ダメだ。俺にはオフエリアが」

ラグは貴族の口調が消えてしまうほど動揺し、迫るオーカスから逃げようとする。

オーカスはラグを掴まえて強引にラグと唇を重ね合せた。オフエリアの名前が出てくるラグの唇を塞ぐようにして唇を押しつける。後退りをするラグと離れないように、オーカスはラグの首に手を回して両手でラグの後頭部を掴んでラグの顔を引き寄せた。

ラグは抵抗してオーカスの腕を掴むが、オーカスの舌がラグの口の中に押し入った時、ラグの抵抗はなくなり、ラグは無意識にオーカスの背中に手を回して抱きしめた。

しばらくの間オーカスが主導権を握り、舌が絡み合ういやらしい音がする。

オーカスが思う存分キスをしてラグから離れると、ラグは口から吐息を漏らして自らの意思でまたオーカスを抱き寄せた。

「オーカス。どこでキスを覚えたんだ？」

「もしかして、嫉妬をしているのですか？」

ラグの心には、もうオーカスしかない。

「そうらしい」

「私を振ったのは、ラグなのに」

「なら、今からその償いをしよう」

今度はラグのほうからオーカスにキスをする。

ラグに舌を絡めとられたオーカスはすぐに陥落した。オーカスの呼吸は早くなり、息苦しくなったオーカスは、口を離し吐息を混じらせながら言った。

「愛と誠実の火の鍵の継承者のキスって、こんなにも甘美で熱いんですね」

「途中でやめるな。嫌われたかと思ったぞ」

「すいません」

第156話：最終話3

ラグはオーカスを持ち上げて机に座らせてから、オーカスの頬や首にもキスをする。

「あの……。ラグ。ここ机です」

「イヤなのか？」

聞いてはいるが、オーカスの服のボタンを外しているラグは、断りの返事を聞く気は無いようだ。

「イヤというより、いいのかと思って」

「俺が座らせたんだ。いいに決まってるだろ」

ラグはまたオーカスと唇を重ね合わせる。舌を絡ませながら、オーカスのズボンのチャックを下げて中に手を入れた。ラグの指は、オーカスの柔らかい茂みの中を探りながら奥へと入っていく。そして、指は硬いものにたどり着いた。ラグはオーカスとの行為に夢中で、最初のうちは硬いものがなんなのか分からず触っていたが、先端を弄り形を把握した瞬間、ラグはそれを握ったままオーカスの顔を見た。

「オーカス。お前……」

「ラグ。途中でやめないで下さい。お願い。もっと、して……」

オーカスは恍惚とした表情で足を開いて、ラグが来るのを待っている。

その時、急にノックも無くドアが開いた。

「ラグ。大変です」

オーカスが剣士の姿でドアから入って来る。

「え！ オーカス！？」

ドアから入って来たオーカスと、机に座っているオーカス。一体これはどういう事だ？ と、ラグが目を白黒させてドアのオーカスから机のオーカスに視点を移した時、いきなり赤い髪のニックの顔がドアップでラグの目に飛び込んだ。ラグは驚いて飛び退く。

「ニック！！」

ニックの胸のボタンは外され、褐色の胸には今しがたラグがつけたキスマークが至る所についている。その下のズボンはチャックが全開で、ニック自慢のブーメランパンツが露わになっており、ラグがよく知っている大きなものがブーメランパンツからはみ出していた。

ニックは濡れて艶だった唇を色づばく動かして男性特有の低音ボイスで言った。

「ラグ。久し振り」

「あのオーカスは、お前の水の鍵魔法が作り出した幻なのか！？」

ニックの満足な表情がイエスと言っている。

ラグはシヨックを受けて我が目を覆うとするが、右手でニックのものを掴んでしまったのを思い出して、急遽変更して左手で我が目を覆った。右手がものの感触を覚えていて、ラグは自分のしでかした始末の愚かさに血の気が引き目眩を覚え、ふらつきながら手探りで歩いて最初に掴んだ来客用のソファーに崩れるようにして座り込んだ。

「私が悪かった。許してくれ。オフエーリア……」

ラグの頭の中は真っ白で何の打開策も思いつかない。真っ白な背景を背にラグをコトック卿として見つめて笑うオフエーリアがいるだけ。

「笑うか。オフエーリア。そうだろうな」

ソファーの上で廃人になりかけているラグの隣に、本物のオーカスは腰を下ろした。

「オフエーリアさんを思うラグの気持ちは分かりますが、どうか私を拒絶しないで下さい」

「お前を拒絶しているんじゃない。あのオーカスを拒絶しているんだ。いや、するべきだったんだ」

まだ数分しか経っていないのに、ラグは病人のようにやつれた表情になっている。

オーカスは、心配しながらラグの肩に手を置いてラグを揺する。

「何を訳の分らない事を言っているのです。お願いですから私の話を聞いて下さい。私の話を聞いて頂けるか心配だったので、ニックから話して頂くように頼んだのですが」

オーカスは、背にある仕事机の上に座っているニックに言う。

「今のラグは、酔っている時より悪い状態じゃないですか。ニック。きちんと説明をしてくれたのですか？」

ニックのズボンのチャックは既に上まであがり、ニックはベストのボタンをはめながら言う。

「もちろん。さっきまでのラグは、オーカスを拒絶するどころか、受け入れる気がかなりあるように思えたけどな」

「なら、このラグの状態はどういう事ですか？」

「それは俺にも分からない」

ニックは悪戯っぽく笑う。

第157話：最終話 4

どうやらオーカスは、ニツクの水の幻影魔法により、ラグの不始末を見ていないようだ。

オーカスはニツクの表情を見てすぐに悟る。

「もう。ニツク。話のついでに、ラグに何かしたのですね」

「したというのか。されたというのか」

机の上でとぼけるニツク。

オーカスはラグに向き直る。

「ラグ。そのまま構わないので私の話を聞いて下さい。実は土の鍵の継承者候補が誘拐されたのです」

「何！」

ラグは我に返った。目を覆っていた左手は落ちて、本物のオーカスの顔が目に入る。

「俺は土の鍵の継承者候補がいるって事すら知らんぞ」

ニツクは机から降りて言う。

「あれ。手紙に書いたんだけど」

ラグは丸めた手紙を思い出す。

「白い薔薇の……」

「そう。その手紙」

「なんて事だ」

ラグは頭を抱えようとするが、右手がさつき何を握ったのか思い出して、右手の動きを止め、左手のみで頭を抱える。

オーカスは懇願するために、そのラグの右手を両手で包んで力強く握った。

「お願いです。土の鍵の継承者候補を探すには、土の指輪に認められたラグの協力が必要なのです」

ラグは必死に右手を引く。

「うわっ！ オーカス。いかん。すぐその手を放せ！」

「いいえ。わたしの頼みを聞いて頂けるまで、この手は放しません！」

オーカスは言いながら手を放し、懐から書類を三枚出してラグに見せる。

「これは新王からの長期出張命令です。そしてこれが將軍である私からの徴兵命令です。そしてこれが少尉になって頂くための任命状です」

「ちよつと待つてくれ。急に言われても俺も支度があるし、手も洗いたいし、知事にも長期休暇届けを出さない」と

「その必要はありません。新王からの命令により既に知事の許可は下りています」

オーカスは再度ラグの手を握って引つ張りラグを立たせる。

「ぐずぐずしている暇はありません。早く私と一緒に来て下さい。外に地竜を待たせてありますから」

「行くつて、俺にも心の準備つてものが」

オーカスはラグの右手をしっかりと握り、ラグを引つ張って歩く。「せめて、手だけでも洗わせてくれ。オーカス。お前も手を洗うんだ」

ラグは強制的にオーカスに引つ張られて行く。

オーカスは、インテリアのように壁に飾ってある剣を指さして言った。

「ニツク。ラグの剣を持って来て下さい」

「この剣だね。ついでに、このコートも持つていこう。うーん。ラグの匂いが染み付いて、いい感じ」

「貴様。人のコートの匂いを嗅ぐな！」

三人は騒ぎながらラグの書斎を出て行く。

ラグに真の安息の日々が訪れるのは、まだ先のようだ。

こうして、キー・スピリッツを体に宿す the keys の、新たな旅が始まった。さてさて、今度の旅は、どうなることやら。

第158話：エンディングテーマ（前書き）

読んで頂き有り難うございました。

皆様のご温情のお陰で無事に終了しました。

「the keys」はいかがでしたでしょうか？
ここはエンディングテーマになります。

歌詞の文字数：英和含めて約750文字です。

下記のアドレスは、ダウンロードに光回線100Mbpsで約3分かかります。

携帯の方は画像をご覧頂けないのでご了承下さいませ。

第158話：エンディングテーマ

想　　new love new world

福山雅治

<http://jp.youtube.com/watch?v=EVB6eJhHQ00>

無限の可能性ハジマル

ふたつの知能と

ふたつの本能が

ツナガルツナガル

究極の喜びがハジマル

ふたつの血潮と

ふたつの運命が

マザリマザリアウ

姿カタチ無きその真実が

この星（地球）を繋いできたんだ

原子レベルで遺伝子レベルで

欲しがる進化のカギ

愛

どこまでも美しくて

どこにもない世界のこと

連れて行ってくれないか

快樂の果て　その向こうへ

机上の空論的愛を

追い越してゆけ僕らの new soul

旅立ちのトキはいま

行き先はひとつさ

想奏浄崇壮挿遭贈曾

完全なる自由がハジマル

あらゆる秩序と

あるゆる無秩序が

トケルトケアウ

この衝動をカタチにしよう

情熱の河 欲望の海で

僕らもまた この星（地球）では

ダタ・ヒト・クミノ

ドウ・ブツ・ダヨ

こんなにも狂おしくて

もうこんなにも赦されていく

畏れなんていらななさ

絶頂の果て その向こうへ

計算上の幸福から

解き放たれた裸の new soul

覚醒のトキがきた

イク時は一緒さ

創 走爽颯蒼聡相双躁

new love new world

keep in touch! keep in motion!

ツナガルツナガッテイク
ハジマルハジマッテイク

どこまでも美しくて

どこにもない世界のこと
連れて行つてくれないか
快樂の果て その向こうへ

机上の空論的愛を

追い越してゆけ僕らの new love

旅立ちのトキはいま

行き先はひとつさ

想 奏浄崇壮挿遭贈曾

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471e/>

the keys

2010年10月8日13時27分発行